

からま からみ

からまつせき 唐松石 (名) きくめ
からまつせんべい 唐松煎餅 (名)
からまつもやう 唐松模様 (名) 唐
からまなび 唐學 (名) 支那の學問
からまはり 空廻 (名) 車又は機關
からまゆ 唐眉 (名) 作り眉の一
からまる 絡 (自動) からむやうに
からみ 絡 (名) からむこと。からみ
からみ 銕 (名) 化金属の冶金に際
からみ 辛味 (名) 辛味。あまみ
からみ 芥子 (名) 山葵の一種。大根
からみ 辛味 (名) 辛味。あまみ
からみ 辛味 (名) 辛味。あまみ
からみ 辛味 (名) 辛味。あまみ

からみ 乾物 (名) かんぶつ(乾物)
からみ 唐物 (名) 前條に
からみ 唐物 (名) 前條に
からみ 唐物 (名) 前條に
からみ 唐物 (名) 前條に
からみ 唐物 (名) 前條に
からみ 唐物 (名) 前條に
からみ 唐物 (名) 前條に
からみ 唐物 (名) 前條に

からみ 唐桃 (名) 植 薔薇科
からみ 唐様 (名) 支那の風
からみ 唐様 (名) 支那の風
からみ 唐様 (名) 支那の風
からみ 唐様 (名) 支那の風
からみ 唐様 (名) 支那の風
からみ 唐様 (名) 支那の風
からみ 唐様 (名) 支那の風
からみ 唐様 (名) 支那の風

からみ 唐様 (名) 支那の風
からみ 唐様 (名) 支那の風
からみ 唐様 (名) 支那の風
からみ 唐様 (名) 支那の風
からみ 唐様 (名) 支那の風
からみ 唐様 (名) 支那の風
からみ 唐様 (名) 支那の風
からみ 唐様 (名) 支那の風



(げなみらか)

からみ

からび

からめ

からめ からち

からめく (自動) からちと鳴り響
からめく 唐物 (名) 外國より舶
からめく 唐物 (名) 外國より舶
からめく 唐物 (名) 外國より舶
からめく 唐物 (名) 外國より舶
からめく 唐物 (名) 外國より舶
からめく 唐物 (名) 外國より舶
からめく 唐物 (名) 外國より舶
からめく 唐物 (名) 外國より舶

からめく 唐物 (名) 外國より舶
からめく 唐物 (名) 外國より舶
からめく 唐物 (名) 外國より舶
からめく 唐物 (名) 外國より舶
からめく 唐物 (名) 外國より舶
からめく 唐物 (名) 外國より舶
からめく 唐物 (名) 外國より舶
からめく 唐物 (名) 外國より舶

からめく 唐物 (名) 外國より舶
からめく 唐物 (名) 外國より舶
からめく 唐物 (名) 外國より舶
からめく 唐物 (名) 外國より舶
からめく 唐物 (名) 外國より舶
からめく 唐物 (名) 外國より舶
からめく 唐物 (名) 外國より舶
からめく 唐物 (名) 外國より舶

からめく 唐物 (名) 外國より舶
からめく 唐物 (名) 外國より舶
からめく 唐物 (名) 外國より舶
からめく 唐物 (名) 外國より舶
からめく 唐物 (名) 外國より舶
からめく 唐物 (名) 外國より舶
からめく 唐物 (名) 外國より舶
からめく 唐物 (名) 外國より舶

○ある鶴鶴にて焼きたる餅。江戸總應子
○深川萬年町、雁金(名)

かりかぶ 刈飼 (他動) 草を刈りて、
牛馬などに飼はす。後撰三我が門の一
むら薄かりかはん、君がた馴れの駒もこ
ぬかな

かりかふ 借換 (他動) 新たに借り
て、前の借りを返す。

かりかぶ 刈株 (名) 草木を刈りた
るあとの株

かりかぶ 假株 (名) 次條の略。

かりかぶ 假株券 (名) 商會
社が後に本株券と引き換ふるため、株
金金額の拂込みを終らざる株主に、假
りに交付する株券。商法施行法第六十
法中株券に關する規定は商法施行前に發
行したる假株券にも亦之を適用す。同
第十條商法施行前に發行したる株券及び假
株券は商法第四百八條又は第二百八
條の規定に違ふも之を改むることを要
す但商法施行後に株金の拂込みを爲した
る場合に於ては前に拂込みたる金額及び新
に拂込みたる金額を假株券に記載するこ
とを要す

かりかへ 借換 (名) かりかふること
の公債

かりかへ 借換 (名) かりかふること
の公債

かりかへ 借換 (名) かりかふること
の公債

かりかり・竹瓶、あさり、いさりのあはれ
も深かるべし

かりかり (名) 雁の鳴く聲。後撰
三我が門一むら薄かりかはん、君がた馴
れの駒もこぬかな

かりかり (名) 刈りかきかき
や、くる秋のつりかきかきと鳴く

かりかり (名) 刈りかきかき
や、くる秋のつりかきかきと鳴く

かりかり (名) 刈りかきかき
や、くる秋のつりかきかきと鳴く

かりかり (名) 刈りかきかき
や、くる秋のつりかきかきと鳴く

かりかり (名) 刈りかきかき
や、くる秋のつりかきかきと鳴く

かりかり (名) 刈りかきかき
や、くる秋のつりかきかきと鳴く

長共に故障あるときは臨時に職員中より
假議長を選挙すべし

かりきぬ 借衣 (名) 借りたる衣。
かりきぬ。夫木三我が門一むら薄かり
かはん、君がた馴れの駒もこぬかな

かりきぬ 借衣 (名) 借りたる衣。
かりきぬ。夫木三我が門一むら薄かり
かはん、君がた馴れの駒もこぬかな

かりきぬ 借衣 (名) 借りたる衣。
かりきぬ。夫木三我が門一むら薄かり
かはん、君がた馴れの駒もこぬかな

かりきぬ 借衣 (名) 借りたる衣。
かりきぬ。夫木三我が門一むら薄かり
かはん、君がた馴れの駒もこぬかな

かりきぬ 借衣 (名) 借りたる衣。
かりきぬ。夫木三我が門一むら薄かり
かはん、君がた馴れの駒もこぬかな

かりきぬ 借衣 (名) 借りたる衣。
かりきぬ。夫木三我が門一むら薄かり
かはん、君がた馴れの駒もこぬかな

かりきぬ 借衣 (名) 借りたる衣。
かりきぬ。夫木三我が門一むら薄かり
かはん、君がた馴れの駒もこぬかな



の。男は袴に袴に鳥帽子、指貫を着け、
女は頭を下げて髪にして五衣袴に、緋色
長袴を着く。

かりきぬ 借衣 (名) 借りたる衣。
かりきぬ。夫木三我が門一むら薄かり
かはん、君がた馴れの駒もこぬかな

かりきぬ 借衣 (名) 借りたる衣。
かりきぬ。夫木三我が門一むら薄かり
かはん、君がた馴れの駒もこぬかな

かりきぬ 借衣 (名) 借りたる衣。
かりきぬ。夫木三我が門一むら薄かり
かはん、君がた馴れの駒もこぬかな

かりきぬ 借衣 (名) 借りたる衣。
かりきぬ。夫木三我が門一むら薄かり
かはん、君がた馴れの駒もこぬかな

かりきぬ 借衣 (名) 借りたる衣。
かりきぬ。夫木三我が門一むら薄かり
かはん、君がた馴れの駒もこぬかな

かりきぬ 借衣 (名) 借りたる衣。
かりきぬ。夫木三我が門一むら薄かり
かはん、君がた馴れの駒もこぬかな

かりきぬ 借衣 (名) 借りたる衣。
かりきぬ。夫木三我が門一むら薄かり
かはん、君がた馴れの駒もこぬかな

じ。夫木三我が門一むら薄かりかはん、
君がた馴れの駒もこぬかな

かりくら 狩藏 (名) 借りたる倉庫。

かりくら 狩藏 (名) 借りたる倉庫。

かりくら 狩藏 (名) 借りたる倉庫。

かりくら 狩藏 (名) 借りたる倉庫。

かりくら 狩藏 (名) 借りたる倉庫。

かりくら 狩藏 (名) 借りたる倉庫。

かりくら 狩藏 (名) 借りたる倉庫。

かりくら 狩藏 (名) 借りたる倉庫。

かりくし 借越 (名) 借り越すこと。
かりくし。夫木三我が門一むら薄かり
かはん、君がた馴れの駒もこぬかな

かりくし 借越 (名) 借り越すこと。
かりくし。夫木三我が門一むら薄かり
かはん、君がた馴れの駒もこぬかな

かりくし 借越 (名) 借り越すこと。
かりくし。夫木三我が門一むら薄かり
かはん、君がた馴れの駒もこぬかな

かりくし 借越 (名) 借り越すこと。
かりくし。夫木三我が門一むら薄かり
かはん、君がた馴れの駒もこぬかな

かりくし 借越 (名) 借り越すこと。
かりくし。夫木三我が門一むら薄かり
かはん、君がた馴れの駒もこぬかな

かりくし 借越 (名) 借り越すこと。
かりくし。夫木三我が門一むら薄かり
かはん、君がた馴れの駒もこぬかな

かりくし 借越 (名) 借り越すこと。
かりくし。夫木三我が門一むら薄かり
かはん、君がた馴れの駒もこぬかな

かりくし 借越 (名) 借り越すこと。
かりくし。夫木三我が門一むら薄かり
かはん、君がた馴れの駒もこぬかな

かりくし 借越 (名) 借り越すこと。
かりくし。夫木三我が門一むら薄かり
かはん、君がた馴れの駒もこぬかな

かりくし 借越 (名) 借り越すこと。
かりくし。夫木三我が門一むら薄かり
かはん、君がた馴れの駒もこぬかな

かりくし 借越 (名) 借り越すこと。
かりくし。夫木三我が門一むら薄かり
かはん、君がた馴れの駒もこぬかな

かりくし 借越 (名) 借り越すこと。
かりくし。夫木三我が門一むら薄かり
かはん、君がた馴れの駒もこぬかな

かりくし 借越 (名) 借り越すこと。
かりくし。夫木三我が門一むら薄かり
かはん、君がた馴れの駒もこぬかな

かりくし 借越 (名) 借り越すこと。
かりくし。夫木三我が門一むら薄かり
かはん、君がた馴れの駒もこぬかな

かりくし 借越 (名) 借り越すこと。
かりくし。夫木三我が門一むら薄かり
かはん、君がた馴れの駒もこぬかな

かりくし 借越 (名) 借り越すこと。
かりくし。夫木三我が門一むら薄かり
かはん、君がた馴れの駒もこぬかな

かりくし 借越 (名) 借り越すこと。
かりくし。夫木三我が門一むら薄かり
かはん、君がた馴れの駒もこぬかな

かりくし 借越 (名) 借り越すこと。
かりくし。夫木三我が門一むら薄かり
かはん、君がた馴れの駒もこぬかな

かりくし 借越 (名) 借り越すこと。
かりくし。夫木三我が門一むら薄かり
かはん、君がた馴れの駒もこぬかな

かりくし 借越 (名) 借り越すこと。
かりくし。夫木三我が門一むら薄かり
かはん、君がた馴れの駒もこぬかな

かりくし 借越 (名) 借り越すこと。
かりくし。夫木三我が門一むら薄かり
かはん、君がた馴れの駒もこぬかな

かりくし 借越 (名) 借り越すこと。
かりくし。夫木三我が門一むら薄かり
かはん、君がた馴れの駒もこぬかな

かりくし 借越 (名) 借り越すこと。
かりくし。夫木三我が門一むら薄かり
かはん、君がた馴れの駒もこぬかな

かりくし 借越 (名) 借り越すこと。
かりくし。夫木三我が門一むら薄かり
かはん、君がた馴れの駒もこぬかな

かりくし 借越 (名) 借り越すこと。
かりくし。夫木三我が門一むら薄かり
かはん、君がた馴れの駒もこぬかな

かりくし 借越 (名) 借り越すこと。
かりくし。夫木三我が門一むら薄かり
かはん、君がた馴れの駒もこぬかな

かりくし 借越 (名) 借り越すこと。
かりくし。夫木三我が門一むら薄かり
かはん、君がた馴れの駒もこぬかな



差押裁判所は債務者の申立に因り口頭辯論を經て相當に定むる期限内に訴を起す可きことを債權者に命ず可し

かりしおほへんぼう 假差押物 (名) 【法】假差押の命令により、假差押をなしたる動産又は不動産。民事訴訟法第363条。假差押物の競買及假差押有價證券の換價は一時之を爲さず然れども假差押物に著しき價額の減少を生ずる恐あるときは其貯蔵に付不相應なる費用を生ず可きとき

かりさき 借座敷 (名) 借りたる座敷。若風俗「長町のかりさき」連れ來てある由を、申し捨てて歸る。傾城反魂香「四郎二郎元信を、北野の社人にかり座敷」

かりさま 假様 (副) 古語。かりそめ(假初)に同じ。雲異記「泛爾假初假命、執常持之」

かりさま 假箱 (名) 假りに用ふる箱。新六帖「いたづらにあればありとて、かりさまのまことの時はいりかともなし」

かりさわぐ 驅騷 (他動) 驅り立てて、さわぐ。枕「翁九中集」集まりてかりさわぐ

かりさんすお 假山水 (名) かしんす(假山水)に同じ。

かりん 借字 (名) 字義に據らず、ただ音又は調を借りて填めたる文字。參議を三木、鶴を本鳥と書く類。

かりん 刈敷 (他動) 草など刈り取りて、下に敷く。萬葉「まよには刈こえもゆくか、おほやぬのさきは刈敷ぬ」なりせりと「新勅撰」年あれば秋の雲なすいな庭、かりしく民のたれぬ日ぞなき

かりし かり 假執行 (名) 【法】假

執行の宣言に基きてなす強制執行。民事訴訟法第409条(舊408条)「假執行」

かりしかりのせんげん 假執行宣言 (名) 【法】民事訴訟法の定めたる場合又は條件の下に、裁判所が未だ確定せざる判決の主旨を假りに執行するを許すこととの宣言。民事訴訟法第409条(舊408条)「假執行の宣言」

かりしつたら 假執當 (名) 假りに任じたる執當。隱顯斷條「一、借執當の事。近代妻帯なる故、院家の人を傳うて靈寶などを取り次ぎて、門跡立掛御目時入ることなり」

かりしほ (名) 麥、稻など、刈り取るべき時期。夫木「しがの浦をちの濱田の刈りしほに、色づく見れば秋たちけり」

かりしめ 假標 (名) 假りに立てたる標材。萬葉「淺原刈標」さしてそのらことよ、よせてし君がことを待たむ」

かりじやう 借状 (名) 借用書。本條「狂言」何とやら、借状程の物が、鳩尾へさし込む」

かりしやうぞく 狩裝束 (名) かりさうぞく(狩裝束)に同じ。

かりしゆつてい 假出獄 (名) 【法】懲役又は禁錮の刑に處せられたる者が、其の刑の執行中、悔改の狀あるとき、行政處分により假りに獄より出だして、普通人の生活を營はしむること。刑法第50條「假出獄」舊刑法第46條(三)「假出獄」

かりしゆつてい 假出獄者 (名) 假出獄を許されたる犯人。明治四十一年司法省訓令第7號「假出獄者」

かりしゆつてい 假出獄證 (名) 假出獄を許したる犯人に、典

獄の下附する證票。明治四十一年司法省訓令第7號「假出獄證」

かりしゆつちやう 假出場 (名) 【法】拘留場又は勞務場に拘禁せられたる者を、情狀により、行政處分を以て、假りに出場せしむること。「假出場」明治四十一年司法省訓令第7號「假出場」

かりしゆつちやう 假出場 (名) 假りに適當なる時期。かりしほ

かりしやう 假證 (名) 次條の略。

かりしやう 假證書 (名) 本證書の作成まで、一時代用する證書。船舶検査法第7條「検査を受ける船舶の所有者又は船長に於て船舶検査證書の受有前に船舶を航行の用に供せんとするときは検査官吏は其の請求に依り假證書を交付して之を認可することを得」

かりしやう 假處分 (名) 假りに、或る事件を處分すること。【法】民事の係争物に關し、強制執行を保全する目的を以て、其の現状の變更により當事者一方の權利の實行を著しき困難を生ずる恐れあることを以て、許す裁判所の處分又は争ひある權利關係につき、著しき損害を避け急迫なる強暴を防ぐため、又は其の他の理由によりて必要とするとき、假りの地位を定むる目的を以てなす裁判所の處分の稱。民事訴訟法第255条(舊253条)「假處分」

かりしよぶんめい 假處分命令 (名) 【法】假處分を許す裁判所の命令。この命令は、本案の管轄裁判所、即ち第一

審裁判所これを管轄するを原則とするも、急迫の事情ある場合には、係争物の所在地を管轄する區域裁判所もこれを管轄するを得。不動産登記法第31條「假處分命令」

かりすつ 刈集 (他動) 刈りたるままと、捨ておく。新勅撰「なにはこのとも、津の國の草のしをれの刈りすて、すさびにのみぞなりにしを」

かりすす 借濟 (他動) 借ること。全く借り終はる。狂言「せしや嬉しや、まんまとかりすすました」

かりすまひ 假住 (名) 假りのすまひ。暫時の間の住居。

かりすまひ 借住 (名) 借家して住まふこと。又、其の住居。借宅。

かりせうせき 加里硝石 (名) 【化】せうせき(硝石)に同じ。

かりせき 假堰 (名) 假りに掘り設けたる堰。

かりせきけん 加里石鹼 (名) 【化】苛性加里を以て脂肪を鹼化した得たる石鹼。脂肪酸のかりうむ。薬用となす。軟石鹼。

かりせんごう 假選宮 (名) かりどのせんごう(假選宮)に同じ。(正選宮の對)

かりそく 刈除 (他動) かりのぞく。萬葉「あかみ山、草ね可利賃氣(刈除)すがへ、争ふいもし、あやにかなしも」六帖「此の比の戀のしげく夏草の、かりそくれども生ひしがごと」

かりそふ 刈添 (他動) 刈りて加ふ。萬葉「あきつぬをばな(刈添)の、秋萩の花を葺かさね、君がかりほに」

かりそむ 刈初 (他動) はじめて刈る。刈りはじむ。新千載集「わたつみはみるめは誰れか刈りそむし、世の人ご

となしといはする」新六帖「夏ふかみまだかりそめぬあはづ野の、ささぎのひなの草かくれつ」

かりそめ 假初 (名) 假初の「一時のこた」。永久ならざること。間に合せ。しはし。ちよつと。かり。苟且。古今異語「かりそめの行きかひちとぞ思ひ、今は限りのかどでなりけり」枕「あざやかなるたみ一ひら、かりそめに打ち敷きて」根ざし深からざること。ふとしたこと。ふと。諸事「ただかりそめの口論により、同列「かりそめの風の心地と仰せ候ひしが、今夜空しうなられて候」名義抄「暫(かりそめ)なるるしきこと。なほさき。おろそか。等閑。狂言「假初な事を致さる事ではござらぬ」あじやら(假初)「借染(假初)「冷雨(假初)「あじやら(假初)「借染(假初)「冷雨(假初)「あじやら(假初)「借染(假初)「冷雨(假初)」

かりそめながら 假初乍 (副) かりそめに「はあれども、いやしくも、諸事「假初ながら催遇の縁、一樹の蔭の宿りも、此の世ならぬ契りなり」狂言「かりそめながら二度の縁ぢや。めでたう諸はう」

かりそめにも 假初 (副) いやしく悪しき心を持つてはな。狂言「かりそめにも。狂言士「かりそめにも、悪しき心を持つてはな」

かりそめね 假初寝 (名) かりそめぶし(假初臥)に同じ。漢語「かりそめね」

かりそめびと 假初人 (名) かりそめに相知れる人。千載集「夜の程にかりそめ人や來たりけん、淀のみこもの今朝亂れたる」

かりそめぶし 假初臥 (名) かりね。うたたね。後撰「秋の田の假初伏しもしてけるか、いたづらいなを何につままし」千載集「嵐のやのかりそめぶしは津の國の、長らへゆけど忘れざりけり」

かりた 刈田 (名) 稻を刈り取れた後の田。後拾遺「鳴のふす刈り田にたてるいな茎の、いなとは人の云はずもあらなん」新六帖「秋はてしかりたのひつちいたづらに、穂に出づれども守る人ぞなき」

かりた 骨牌 (名) かるた骨牌に同じ。

かりたいほ 假逮捕 (名) 【法】假逮捕によりて、逃亡犯人を逮捕すること。逃亡犯人引渡條例第3條「請求に係る逃亡犯人を逮捕し若くは假逮捕したるときは其逮捕状を發したる上席検事は之を逮捕したる地の上席検事に引渡すべし」

かりたいほ 假逮捕狀 (名) 逃亡犯人を、我が國にて、假りに逮捕するため、司法大臣の命令によりて、檢事の發する逮捕状。この逮捕状によりて逮捕したる場合に、其の請求國より二箇月を過ぎざる相當の期間内に、其の引渡しの請求なきときはこれを釋放すべく、其の期間内に引渡しの請求ありたるときは、更に逮捕状を發し、これと交換すべきものとす。逃亡犯人引渡條例第9條「假逮捕狀」

かりたぐ 假宅 (名) 暫時假りにすむ家。假の住居。和漢房語園「元慶原燒失の後、淺草三谷の邊に引き移り、假り宅中、夜見世致し」

かりたぐ 借宅 (名) 借りたる宅。しやくたく。借家。

かりたぐ (名) ほんしがみ(法師髮)に同じ。弓馬故實「かりたぐふしも、いが頭とも、又いが髮とも、かりたぐともいふなり」

かりたす 借足 (他動) 借りて、足らざるをたす。

かりたす 借出 (他動) 借りて物を出ださす。借ること初む。

かりたす 驅出 (他動) かりいだす(驅出)に同じ。

かりたす 驅立 (他動) 驅り出だす。追ひ立つ。新六帖「草に入る疲れの鳥をかりたてよ、かた野のみ野は今日暮れぬとも」強ひて催し赴かしむ。「人夫をかりたつ」

かりたて 驅立 (名) 驅り立つること

かりたて 驅立 (名) 鳥獸などを驅り立つること。かりこ。

かりたて 驅立 (他動) かりたつ(驅立)の口語。

かりたな 借店 (名) 店賃を出だして借りたる店。

かりたばた 刈田働 (名) 秋の末に、敵地の稻を刈り盜むこと。

かりたふし 借倒 (名) 借り倒すこと。

かりたず 借倒 (他動) 借りて返さずにする。諸處を借り倒す。

かりたず 骨牌結 (名) かるたむすび(骨牌結)に同じ。色道大龜「後帯をかりたむすびにし」

かりち 借地 (名) 土地を借ること。借りたる土地。しやくち。若風俗「淺草の片陰にかり地をして」

かりちめん 借地面 (名) 前條に同じ。

かりちゆうしよ 假住所 (名) 假りに住まふ所。假りの住所。【法】本來の住所・居所以外に、或る特定の行為に就き、住所と同一の效力をあらしめたる一時の居所。其の設定は、法律の要求に因ることあり、又當事者の意思に任かすることあり。民法第23条「或る行為に付き假住

所を選定したるときは其行為に關しては之を住所と看做す」刑事訴訟法第84條「訴訟關係人は裁判所所在地に住せざるときは其地に假住所を定め裁判所に届出つ可し」民事訴訟法第230條「受訴裁判所の所在地に住居をも事務所をも有せざる原告若くは被告は其所在地に假住所を選定して之を届出つ可し假住所を選定したるときは最近の口頭辯論に於て之を爲し又其前に書面を差出すときは其書面を以て之を爲す可し」

かりちん 借貸 (名) 物を借りたる對價として與ふるもの。借料(貸賃の對)

かりつか 驅使 (他動) 追ひ廻はして使役す。父子相連「六道縱横にかりつかひにしかば」

かりつひ 刈集 (他動) 刈りて集む。萬葉「しほひなば玉藻刈集の、家のいもが濱づと名はば何を示さむ」相摸集「あま人は又もこそ集りこらずまに、何かりつむる物語かは」

かりつめ 刈集 (名) 刈りて集むる物のつめ

かりつめ 狩杖 (名) 鷹狩に、鳥を追ひ立つるにもちふる杖。又、鷹犬を牽く者の携へて犬をいましむるに用ふる杖。定家卿鷹三百首「はし鷹のしらふにきれる狩杖の、長さや人のたけによるらん」曾我五郎問「せこの者共に打ちまじはり、かりつめを振りたてて、心も起こらぬ鳥をたて」

かりて 糧 (名) かて(糧)に同じ。萬葉「常知らぬ道の長てを、くれぐれと如何にか行かむ、可利豆(糧)はなしに」雲異記「糧(糧)字鏡集「釋(糧)はなしに」

かりて 借手 (名) 物を借る人。(貸手の對) 借りに借り入る人。

かりて かりと

かりて 劉手 (名) 刈る人。よく刈る人。川中島合戦、綱手、劉手の千草原、招くすきを呼ぶかとて。

かりに

かりに (本とちの對) 若風俗かりとちにして、(手日記) かりとちのふ 借調 (他動) 借りて、ととのふ。借りて、狂言、借調、入りを致さうと存じて、方方でかりとちの、是れ程にまで出で立ってござる。

かりぬ

かりにん 借人 (名) かりて借手、に同じ。

かりは

かりぬのまくら 假寝枕 かりぬをする枕。源々、秋の野の草のしげみは分けしと、かりぬの枕結びやせし。

かりは かりは

かりは (英 Calipers) (名) 【理】球の直徑、圓筒の直徑、孔の直徑等、物指にて直接に測り難き長さを測る器械。兩脚器の如き構造のもの、曲尺に動き得る腕木を附したる如き構造のもの等あり。

かりひ

かりはね (名) 刈りたるあとの株。かりかぶ 萬葉、しなぬちは今のほり道、可里婆羅門に足踏ましむな、杏はけ我がせ。

かりふ

かりびと 借人 (名) かりて(借手)に同じ。かりん 借りたる人。借りて使役する人。

かりは

かりはね 假船 (名) 借りたる船。かりはね かりいほ(假船)の略。萬葉、秋萩の散らへるぬべの初尾花、可里保(かり)に寄せて、同、たらちねの母を別れて、まこと我れ旅の加里保(かり)に安く寝むかも。

かりん 下臨 視おろすこと。下臨。高貴の人が卑賤の者の所を訪はるること。

かりんぼ 一河臨法 (名) 佛語。ろくじかりんぼ(六字河臨法)の略。

かる 軽 (名) かるがも(輕鴨)の略。

かる 枯 (自動) 植物、生氣盡きて死す。枯死す。萬葉雨ふらず日の重なれば、枯し田も蒔きはたけも朝ごとに、しほみ可禮ゆく。同、うち橋に生ひををれる川もぞ、干ればはゆる。中絶花もいとはななけにて、蟲などのかれたるやうにて、をかし。中務集、蛙のわたるを、人のおこせて。人の心消え衰ふ。百日曾我茶中三杯に枯れたる魂をさぐり。

かる 潤 (自動) 水、悉く乾く。干も。萬葉みみなしの池しうらめし、わきもが來つつかれば水は將潤。拾遺草三草がわかれれば水はぬる。とむすびし袖は今もかわかず。水分無くなる。濕氣去る。字鏡「燥如加」。植物など、かせる。榮華集「かんの殿の御かさかされせ給ひつれど」。圓未熟の氣失す。技術、老熟となる。老熟す。「手がかる」。

かる 暖 (自動) 明に濕氣なくして、音聲立たずなる。しはがる。しがべれる。萬葉うれたきや、しほととぎす今こそは、聲の干に、き鳴きとよまめ。源朝かかれたる聲のをしきにて、いへば。

かる 離 (自動) はなる。離る。遠ざかる。萬葉たかみに離るふ月の惜しけども、いもが袂を加流類。このごろ、同、玉簪筒あけまけ惜しきたら夜を、ころもて可禮にて一人かも寝む。同、もつ鳥あしがらに船あるきおほみ、日こそ可禮ならめ、心はもへど。開をおく。疎くなる。絶ゆ。萬葉玉にぬく、あふちを宿に植ふたらば、山ほととぎす可禮子來むかも、源無玉我れなくて草の庵は荒るとも、この一言はかれじとぞ思ふ。

かる 借 (他動) 後に返す約束にて、或る期間他人の物を請ひ受けて使用す。借用す(貸すの對) 萬葉人妻とあせがそをいむ、しからば、隣をきぬを可里にて著なほも、古今草離して涙は見えぬ子規わが衣手のひづをからん。他より、助けを受け。一人の勢力をかる。借借時の地産類、なす時の閻魔。借の時は悦び、返済する時は不快なる顔つきをなすこと。大鏡狂言世話にも申す如く、借借時の地産類、なす時の閻魔類とは、よう申したものでござる。

かる 刈 刈 (他動) 草などの如く、養生したるを、鎌で去る。切り拂ふ。神代紀「大葉刈」。祝詞式大真天津菅會事、本朝「刈」末、刈切也。萬葉同に寄せ我が可流のや、さわがやの、まことなやはなると。勢語「田からんとて」。

かる 驅 驅 (他動) 逐ひ立つ。逐ひ拂ふ。崇神紀「逐」食、栗雀。著聞「川上より魚をかりけり」。強ひてなきしむ。促がす。「人をかり集む」敬遠紀「驅使(雙)等」自走らず。馳せむ。

かる 輕氣 (名) かるさう。かるきさま。かるげ。

かる 輕籠 輕子 (名) 輕籠にて縦横に綱目を作り、四隅に繩を付けて、土石などを載せ、棒にて擔ひ運ぶ具。あじか籠。二人に備はれて、物を負ひ運び、又、荷車などを引くもの。物を負ふ荷舟會事、和泉國堺の方言。輕籠、江戸深川仲町の女郎屋の語。なまる(中居)に同じ。寛天見聞記「かること、仲居の女附き添ひ行く」。

かる 輕子 (名) かるきさま。かるき。かるま。輕 (名) かるきさま。かるき。かるま。輕 (名) かるきさま。かるき。

かる 輕衫 (名) 次條の略。義後覺「かるを著たり」。

かる 輕袴 (名) 仕立方の甚だ狭き袴。伊賀袴。

かる 輕袢 (名) 江戸時代、髪結などが、かるを伴って、得意に乞ひて金鏡を集むること。

かる 輕 (形) かるし(輕)に同じ。勢語「出でていなば心かるる」といひやせん、世のありさまを人は知らねば。字鏡「輕」。輕い返辭に重尻。返辭は氣輕にすれども、容易に立ち働かざること。

かるが かるん

かる 狩 獵 (他動) 鳥獸などを驅り出だして捕らふ。萬葉やかた尾の鷹を手にする、みしまに可良ぬ日まねく、月ぞにける。拾遺草「あらちをかる矢のまきにたつ鹿も、いと我ればかり物は思はじ」。捕らへんとして探す。探して探る。「捕鹿をかる」。

かる 著 (他動) きる著の訛り。古(東國)の方言。萬葉「葉のさやが霜夜に、七(加流)衣にませる子が肌はも」。

かる 取引 (名) 取引所の語。仲買人の失敗して休業すること。がった。

かる (接尾) 或る語に屬し、自動の如く活きて、と思ふなどの意を表す語。崇峻紀「哀不忍聽(むづか)」。本字鏡「噴瀾」。竹取「人あさましがりて」。源生事「よがるを、同、あさましがりて」。源生事「書さすたり。顯季集「つれづれがりて、日毎に歌よまんとて」實方集「道心がり給ふよりは、せ生好み給ふこそ」。

かる 一 (英 Galloon) (名) 洋服の縁(等)に用ふる厚地の平紐。

かる 輕石 (名) 火山より噴出したる熔岩の一種。色は灰白若しくは黃色にして軽く脆く、微細の小孔あり。物を擦り磨くに用ふる。和名「浮石」。交州記云、浮石體虚而輕。

かる 軟 (英 Calvinism) (一派) 宗教家たるケルトの創始せるもの。

かる 軟 (名) かるさう。かるき。かるま。輕 (名) かるきさま。かるき。

かる 軟 (名) かるきさま。かるき。かるま。輕 (名) かるきさま。かるき。

かる 軟 (名) かるきさま。かるき。かるま。輕 (名) かるきさま。かるき。

かる 軟 (名) かるきさま。かるき。かるま。輕 (名) かるきさま。かるき。

かる 軟 (名) かるきさま。かるき。かるま。輕 (名) かるきさま。かるき。

かる 軟 (名) かるきさま。かるき。かるま。輕 (名) かるきさま。かるき。

かる 軟 (名) かるきさま。かるき。かるま。輕 (名) かるきさま。かるき。

かる 軟 (名) かるきさま。かるき。かるま。輕 (名) かるきさま。かるき。

かる 軟 (名) かるきさま。かるき。かるま。輕 (名) かるきさま。かるき。

かる 軟 (名) かるきさま。かるき。かるま。輕 (名) かるきさま。かるき。

かる 軟 (名) かるきさま。かるき。かるま。輕 (名) かるきさま。かるき。

かる 品。こみや(込矢)に同じ。さくぢやう。こめや。ひざを。さき。雜兵器語「開亂一ばいぶまけたらば、かるかをひん抜いて、鐵炮を腰にひびきげて、刀を抜いて、敵の手足とねらつて切りめされえ」。

かる 輕鴨 (名) 動鳥類中、游禽類の一種。體形・大き共にまがに似たり。上面は暗黒色にして、頬より喉は淡茶色、胸部は多し黄色を帯び、暗色の斑點あり。四季共に本邦に見る。かるなつがも。

かる 刈萱 (名) 刈り取らるるかや。六帖「刈萱に亂れそめにしかるかや、我れぞつかねてゆふまぐれ見し」。

かる 草 (名) 植木本科、草屬の多年生草本。莖の高き四五尺。葉は細長にして、毛茸を有す。花は小穂をなし、小穂は集まりて圓錐花序に排列し、長き芒を具へ、苞は褐色を呈し、秋開花す。我が國、各地の山野に自生す。根は強韌なるを以て、刷毛・束藁、等に用ふべし。めがるかや。徒然草「秋の草は中ふ刈萱・りんどう」。

かる 刈萱 (名) 刈り取らるるかや。六帖「刈萱に亂れそめにしかるかや、我れぞつかねてゆふまぐれ見し」。

かる 刈萱 (名) 刈り取らるるかや。六帖「刈萱に亂れそめにしかるかや、我れぞつかねてゆふまぐれ見し」。

かる 刈萱 (名) 刈り取らるるかや。六帖「刈萱に亂れそめにしかるかや、我れぞつかねてゆふまぐれ見し」。

かる 刈萱 (名) 刈り取らるるかや。六帖「刈萱に亂れそめにしかるかや、我れぞつかねてゆふまぐれ見し」。

かる 刈萱 (名) 刈り取らるるかや。六帖「刈萱に亂れそめにしかるかや、我れぞつかねてゆふまぐれ見し」。

かる 刈萱 (名) 刈り取らるるかや。六帖「刈萱に亂れそめにしかるかや、我れぞつかねてゆふまぐれ見し」。

かる 刈萱 (名) 刈り取らるるかや。六帖「刈萱に亂れそめにしかるかや、我れぞつかねてゆふまぐれ見し」。

かる 刈萱 (名) 刈り取らるるかや。六帖「刈萱に亂れそめにしかるかや、我れぞつかねてゆふまぐれ見し」。

かる 刈萱 (名) 刈り取らるるかや。六帖「刈萱に亂れそめにしかるかや、我れぞつかねてゆふまぐれ見し」。

かる 刈萱 (名) 刈り取らるるかや。六帖「刈萱に亂れそめにしかるかや、我れぞつかねてゆふまぐれ見し」。

かる 刈萱 (名) 刈り取らるるかや。六帖「刈萱に亂れそめにしかるかや、我れぞつかねてゆふまぐれ見し」。

かる 刈萱 (名) 刈り取らるるかや。六帖「刈萱に亂れそめにしかるかや、我れぞつかねてゆふまぐれ見し」。

かる 刈萱 (名) 刈り取らるるかや。六帖「刈萱に亂れそめにしかるかや、我れぞつかねてゆふまぐれ見し」。

かる 刈萱 (名) 刈り取らるるかや。六帖「刈萱に亂れそめにしかるかや、我れぞつかねてゆふまぐれ見し」。

かる 骨牌遊 (名) かるたの遊戯。

かる 骨牌紙 (名) 骨牌納附の證として、骨牌の包装に貼用する印紙。角形と帯紙形との二種あり。後者は包装の外を四方より巻きて帯紙となし、前者は包装の封目に貼附するものとす。明治三十五年勅令第五十五號「骨牌印紙」同年大蔵省令第十四號「骨牌印紙」。

かる 骨牌會 (名) かるた遊びをなす會合。

かる 骨牌稅 (名) 骨牌に賦課する租稅。骨牌稅法「骨牌稅」。

かる 骨牌 (名) かるたの如き外觀を有する、之より硬く且つ輕き金屬。極めて酸化し易く、遊離して存せざれども、化合物としては廣く且つ多量に天然に存在す。石灰石・大理石・石膏等の成分をなす。

かる 骨牌 (英 Calcaim) (名) 博奕又は遊戯用の具。方形にして小さき厚紙又は薄板にて作り、種種の象の俚諺・歌句を書きたるもの。いろはがるた・うたがるた・詩がるた・とらんぶ等の種類あり。數人に分ち、各札の象の點數・語句等を合はせて取り、其の點數などにて勝負を決す。戀八卦柱牌・かるたの打ちやう存せり」。

かる 迦樓茶 (名) 佛語。かるら(迦樓羅)に同じ。

かる 骨牌遊 (名) かるたの遊戯。

かる 骨牌紙 (名) 骨牌納附の證として、骨牌の包装に貼用する印紙。角形と帯紙形との二種あり。後者は包装の外を四方より巻きて帯紙となし、前者は包装の封目に貼附するものとす。明治三十五年勅令第五十五號「骨牌印紙」同年大蔵省令第十四號「骨牌印紙」。

かる 骨牌會 (名) かるた遊びをなす會合。

かる 骨牌稅 (名) 骨牌に賦課する租稅。骨牌稅法「骨牌稅」。

かる 骨牌 (名) かるたの如き外觀を有する、之より硬く且つ輕き金屬。極めて酸化し易く、遊離して存せざれども、化合物としては廣く且つ多量に天然に存在す。石灰石・大理石・石膏等の成分をなす。

かる 骨牌 (英 Calcaim) (名) 博奕又は遊戯用の具。方形にして小さき厚紙又は薄板にて作り、種種の象の俚諺・歌句を書きたるもの。いろはがるた・うたがるた・詩がるた・とらんぶ等の種類あり。數人に分ち、各札の象の點數・語句等を合はせて取り、其の點數などにて勝負を決す。戀八卦柱牌・かるたの打ちやう存せり」。

かる 迦樓茶 (名) 佛語。かるら(迦樓羅)に同じ。

かる 骨牌遊 (名) かるたの遊戯。

かる 骨牌紙 (名) 骨牌納附の證として、骨牌の包装に貼用する印紙。角形と帯紙形との二種あり。後者は包装の外を四方より巻きて帯紙となし、前者は包装の封目に貼附するものとす。明治三十五年勅令第五十五號「骨牌印紙」同年大蔵省令第十四號「骨牌印紙」。

かる 骨牌會 (名) かるた遊びをなす會合。

かる 骨牌稅 (名) 骨牌に賦課する租稅。骨牌稅法「骨牌稅」。

かる 骨牌 (名) かるたの如き外觀を有する、之より硬く且つ輕き金屬。極めて酸化し易く、遊離して存せざれども、化合物としては廣く且つ多量に天然に存在す。石灰石・大理石・石膏等の成分をなす。

かる 骨牌 (英 Calcaim) (名) 博奕又は遊戯用の具。方形にして小さき厚紙又は薄板にて作り、種種の象の俚諺・歌句を書きたるもの。いろはがるた・うたがるた・詩がるた・とらんぶ等の種類あり。數人に分ち、各札の象の點數・語句等を合はせて取り、其の點數などにて勝負を決す。戀八卦柱牌・かるたの打ちやう存せり」。

かれこ—かれつ

たれかれ。これかれ。古今度よめる歌多し。...

かれこれ 彼此 (副) 何やかや。...

かれこれ 彼此屋 (名) 一定の職業なく、何事にも拘らず従事する人。...

かれこれ 枯薄 (名) 枯れたる薄。...

かれは

枯れ落ちてつるも。玉葉を枯れつるも。...

かれは 枯野 (名) 草の枯れたる野原。...

かれは 枯野 (名) 枯野に。...

かれは 枯野 (名) 枯野に。...

かれひ

かれはたそよぎ 彼者誰時 (名) たそよぎ。...

かれは 枯果 (自動) 残らず枯る。...

かれは 枯花 (名) 枯れたる花。...

かれは 枯花 (名) 枯れたる花。...

かれも

飯。べんたう。萬事常知らぬ道の長て。...

かれも 枯生 (名) 草の枯れたる地。...

かれも 枯穂 (名) 枯れたる穂。...

かれも 枯穂 (名) 枯れたる穂。...

かれや—かれん

かれやう 離様 (名) 離れんとす。...

かれやう 枯柳 (名) 枯れたる柳。...

かれやう 枯山 (名) 草木の枯れたる山。...

かれやう 枯行 (自動) 次第に枯る。...

かれん

かれんせい 可憐生 (名) 憐むべき者。...

かれん 可憐 (名) 愛すべきこと。...

かれん 可憐 (名) 愛すべきこと。...

かれん 可憐 (名) 愛すべきこと。...

かろひ

かろひ 可憐 (名) 憐むべき者。...

かろひ 可憐 (名) 憐むべき者。...

かろひ 可憐 (名) 憐むべき者。...

かろひ 可憐 (名) 憐むべき者。...

かろ

かろ 可憐 (名) 憐むべき者。...

かろ 可憐 (名) 憐むべき者。...

かろ 可憐 (名) 憐むべき者。...

かろ 可憐 (名) 憐むべき者。...

かろりー (英 Calorie) (名) 【理】熱量の単位。水一瓦を温度一度摂氏高むるに要する熱量。

かろりめーたー (英 Calorimeter) (名) 【理】比熱・気化熱・融解熱等熱に関する量を測定するとき用ふる器械の總稱。種類多し。熱量計。

かろろか (副) かるるか(輕)に同じ。源義経直衣にて、かるろかななる御よそほひどもなれば。

かろん (英 Galton) (名) 【數】英國制の體積の單位。四・五四三四五八リットル。即ち、日本の二升五合一勺餘に相當す。

かろん (他動) 輕く見る。【借】かろしむ。見さく。侮る。輕侮す。【借】かろしむ。厭はず。【命】を輕んじ。名を重んず。

かろ (名) 和歌に關する説話。歌談。

かろ (名) よきはなし。面白話。【佳話】(名) 梶原景時一室内、黄卷開佳話。【梶原景時】(名) 梶原景時。

かろ (名) 湯したること。大西狂言「湯」お蔭で喉の湯きをとめまして(こぼる)。

かろ (名) 湯に臨みて井を掘るに同じ。かつ湯の條を見よ。

かろ (名) 乾性 (名) 喉かわき。【乾性】(名) 乾砂子 (名) かわき。徒然草「吉田中納言の、乾き砂子の用意はなかりけるとのたまひたりしかば」。

かろ (自動) 熱の爲め、濕氣を水分無くなる。ひる。萬々あさりする。あま少女らが袖とほり、濡れにし衣ほせど不乾(乾)日本紀實「寛政」日月の行く星の宿りかはるとも、新羅の國は掛は可和(可)じ。字鏡「燥(乾燥)又(乾)」。喉にうるほひ無くなりて、飲料を欲す。湯す。宇治拾遺記「のかわき、死なんとす」。

かろ (自動) 乾く。なす。頓城酒吞童子「ほてんがうかわかずと、通れ通れといひければ」丹波興作「盗みかわくは何奴ぢやい」。

かろ (名) 大河の河口の、外へ開かせること。

かろ (名) 低き地位。低き官位。上位の對、易經「巽居上位而不順在下位而不憂」。

かろ (名) 我が家。故郷。郷里。朗詠「家園忘却酒爲郷」。

かろ (名) 人の住むための建物。いへ。東鑑「治承四年、令放火、家屋焼亡」。

かろ (名) 假りに設けた家屋。かりや。

かろ (名) 假りに設けた家屋。かりや。

かろ (名) 假りに設けた家屋。かりや。

かろ (名) 假りに設けた家屋。かりや。

かろ (自動) 一ぱいにかきまわす。かきまわす。かきまわす。かきまわす。

かろ (自動) 好き香たつ。かきまわす。かきまわす。かきまわす。かきまわす。

かろ (自動) 好き香たつ。かきまわす。かきまわす。かきまわす。かきまわす。

かろ (自動) 好き香たつ。かきまわす。かきまわす。かきまわす。かきまわす。

かろ (自動) 好き香たつ。かきまわす。かきまわす。かきまわす。かきまわす。

かろ (自動) 好き香たつ。かきまわす。かきまわす。かきまわす。かきまわす。

かん あく 寒明 寒過ぎて立春の日となる。重井簡「氣色も次第に快し。寒明けたら本服せう」。

かん あく 寒明 寒過ぎて立春の日となる。重井簡「氣色も次第に快し。寒明けたら本服せう」。

かん あく 寒明 寒過ぎて立春の日となる。重井簡「氣色も次第に快し。寒明けたら本服せう」。

かん あく 寒明 寒過ぎて立春の日となる。重井簡「氣色も次第に快し。寒明けたら本服せう」。

かん あく 寒明 寒過ぎて立春の日となる。重井簡「氣色も次第に快し。寒明けたら本服せう」。

かん あく 寒明 寒過ぎて立春の日となる。重井簡「氣色も次第に快し。寒明けたら本服せう」。

かん あく 寒明 寒過ぎて立春の日となる。重井簡「氣色も次第に快し。寒明けたら本服せう」。

かん あく 寒明 寒過ぎて立春の日となる。重井簡「氣色も次第に快し。寒明けたら本服せう」。

かんくわがく 眼科学 (名) 眼科
かんくわき 眼科器 (名) 眼科の
かんくわじけふ 感化事業 (名)
かんくわつ 奸猪 姦猪 (名)
かんくわん 看官 (名) 見る人。讀
かんくわん 看官 (名) 事務のひま

かんけ 疝氣 (名) 疝の病の氣
かんけ 勘除 除目の時、申文を外記
かんけい 奸計 姦計 (名) わる
かんけい 寒閨 (名) 夫又は妻の
かんけい 艦型 (名) 軍艦の模型
かんけい 巖柱 (名) 植きんもく

かんけつ 汗血 (名) あせと血
かんけつ のうま 汗血馬 一日に千
かんけつ 勘決 考へて決すること
かんけつ 閑月 (名) 冬など、農事
かんけつ 閑月 (名) 光さむげな
かんけつ 閑月 (名) 狐枕啼き寒月

かんけつせん 閑歇泉 (名) 地
かんけつねつ 閑歇熱 (名) 閑
かんけん 勘解由 (名) かげゆ(勘
かんけん 勘解由 (名) かげゆ(勘
かんけん 勘解由 (名) かげゆ(勘

かんけん 勘檢 考へしらぶること
かんけん 勘檢 考へしらぶること
かんけん 勘檢 考へしらぶること
かんけん 勘檢 考へしらぶること
かんけん 勘檢 考へしらぶること

かんこ 鹹湖 (名) 地、鹽分を多
かんこ 乾枯 乾つきてかたまること
かんこ 乾固 かわきてかたまるこ
かんこ 簡古 簡單にして古色ある
かんこ 簡古 簡單にして古色ある

かんこ 簡潔 つづまやかに清潔
かんこ 簡潔 つづまやかに清潔
かんこ 簡潔 つづまやかに清潔
かんこ 簡潔 つづまやかに清潔
かんこ 簡潔 つづまやかに清潔

かんこ 簡潔 つづまやかに清潔
かんこ 簡潔 つづまやかに清潔
かんこ 簡潔 つづまやかに清潔
かんこ 簡潔 つづまやかに清潔
かんこ 簡潔 つづまやかに清潔

かんきりん 一開作林 (名) 喬木。伐採の後、一定の年開、苗木の間に農作物を栽培する森林。
かんきり 一開酒 (名) 燗をしたる酒。
かんざし 髪挿簪 (名) 婦人の髪に挿す飾品。其の種類甚だ多し。宇治拾遺に、髪に玉のかんざし一よそひを挿して、鏡の巾子に玉の玉を挿して、髪を貫きとむるもの。和名、髪簪。挿簪也。釋名云、簪、係也。所以均冠使不墜也。目くし、櫛の稱。源朝臣の御かんざしのはしを、いささか折りて、髪を貫き、髪を貫き、いささか折りて、かいはりたる額つき、かんざし、いみじう美し。ねびゆか、かんざし、いささか折りて、かんざし、かしらつき、御くしのかかりたるさま。
かんざし 一簡札 (名) 文字を記すべし。後漢書、魯豈以汗簡札也。
かんざし 一鑑札 (名) 認可の證として、官又は組合などより下付する證票。即ち、賣藥の營業鑑札、請賣鑑札、行商鑑札の類。賣藥規則、鑑札。
かんざし 一監察 (名) 監督し視察すること。後紀、任右衛門督、監察。左傳、天威不遠、視察也。註、天威、察不遠。
かんざし 一監察 (名) 照らし見ぬこと。照臨。左傳、天威不遠、視察也。註、天威、察不遠。
かんざし 一雁札 (名) 手紙。書簡。雁書。雁の條、雁のふみ、雁文を見よ。平家、雁文を雁書共いひ、雁札共また名附けれ、東鑑、雁文、直實、雁文の雁札。
かんざし 一雁札 (名) 雁の紙幣。
かんざし 一雁札 (名) 雁の紙幣。
かんざし 一雁札 (名) 雁の紙幣。

かんざし 一監察 (名) 監督し視察すること。後紀、任右衛門督、監察。左傳、天威不遠、視察也。註、天威、察不遠。
かんざし 一監察 (名) 照らし見ぬこと。照臨。左傳、天威不遠、視察也。註、天威、察不遠。
かんざし 一雁札 (名) 手紙。書簡。雁書。雁の條、雁のふみ、雁文を見よ。平家、雁文を雁書共いひ、雁札共また名附けれ、東鑑、雁文、直實、雁文の雁札。
かんざし 一雁札 (名) 雁の紙幣。
かんざし 一雁札 (名) 雁の紙幣。
かんざし 一雁札 (名) 雁の紙幣。

かんざし 一監察 (名) 監督し視察すること。後紀、任右衛門督、監察。左傳、天威不遠、視察也。註、天威、察不遠。
かんざし 一監察 (名) 照らし見ぬこと。照臨。左傳、天威不遠、視察也。註、天威、察不遠。
かんざし 一雁札 (名) 手紙。書簡。雁書。雁の條、雁のふみ、雁文を見よ。平家、雁文を雁書共いひ、雁札共また名附けれ、東鑑、雁文、直實、雁文の雁札。
かんざし 一雁札 (名) 雁の紙幣。
かんざし 一雁札 (名) 雁の紙幣。
かんざし 一雁札 (名) 雁の紙幣。

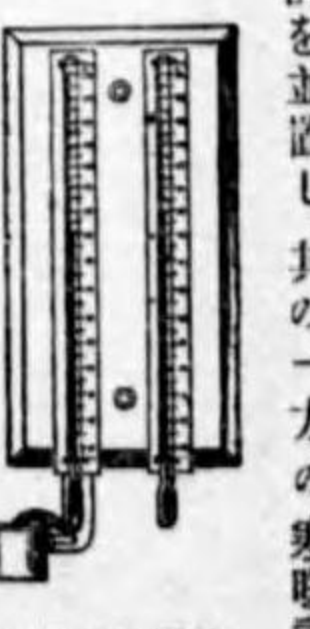
かんざし 一監察 (名) 監督し視察すること。後紀、任右衛門督、監察。左傳、天威不遠、視察也。註、天威、察不遠。
かんざし 一監察 (名) 照らし見ぬこと。照臨。左傳、天威不遠、視察也。註、天威、察不遠。
かんざし 一雁札 (名) 手紙。書簡。雁書。雁の條、雁のふみ、雁文を見よ。平家、雁文を雁書共いひ、雁札共また名附けれ、東鑑、雁文、直實、雁文の雁札。
かんざし 一雁札 (名) 雁の紙幣。
かんざし 一雁札 (名) 雁の紙幣。
かんざし 一雁札 (名) 雁の紙幣。

かんじ 一閑事 (名) ひまなる事。無用の事業。むだごと。諸朝、朝開、暮落、すて閑事。
かんじ 一監事 (名) 法人の機關の一。其の財産又は業務を監督するもの。民法第五十八條、監事。或る特殊の機關又は團體の職務を掌理する。即ち、海軍兵學校、海軍機關學校、海軍醫學校の監事など。
かんじ 一監寺 (名) かんす監寺に同じ。
かんじ 一柑子 (名) 〔植〕からじ柑子に同じ。宇津保、白ききぬにかんじを包めるやうに見えて、いと白く美しげなり。
かんじ 一幹事 (名) 主として、業務を擔任すること。又、それに堪ふる人。又、其の役。易經、貞固足以幹事。北史、李暹此人舉動異常、必爲幹事。同。
かんじ 一勘事 (名) 勘當に同じ。かんじ。宇津保、宮かうながらあらば、いたづらになんとおぼして、その日かんじ敷させ給ふ。拾遺、延喜の御時、按ぜちの御息所、久しくかんじにて、御めのとに附けて参らる。
かんじ 一雁使 (名) かりのつかひ(雁使)に同じ。雁の條を見よ。狂言、雁文を雁書といひ、使をがんと名附くるなり。
かんじ 一雁齒 (名) 橋の上に構へたる棧。がんき。盛衰記、虹の橋桁危くして、雁齒の構へ、奇しければ、渡り得ん事難けれど。太平記、野六郎、路羊腸を渡りて、橋雁齒の危きをなせり。
かんじ 一雁翅 (名) 陣立の名。播州佐用軍記、上月邊より形見山の尾崎まで、雁翅に連なつて鐵炮を張り。

かんじ 一閑色 (名) かんしよく(閑色)に同じ。
かんじ 一閑色 (名) かんしよく(閑色)に同じ。
かんじ 一閑色 (名) かんしよく(閑色)に同じ。
かんじ 一閑色 (名) かんしよく(閑色)に同じ。

かんじ 一閑色 (名) かんしよく(閑色)に同じ。
かんじ 一閑色 (名) かんしよく(閑色)に同じ。
かんじ 一閑色 (名) かんしよく(閑色)に同じ。
かんじ 一閑色 (名) かんしよく(閑色)に同じ。

かんじ 一閑色 (名) かんしよく(閑色)に同じ。
かんじ 一閑色 (名) かんしよく(閑色)に同じ。
かんじ 一閑色 (名) かんしよく(閑色)に同じ。
かんじ 一閑色 (名) かんしよく(閑色)に同じ。



(註) 寒暖計

かんしーかんし

かんじ

かんじ

かんす

かんし (名) 王朝時代、皇室所用の屏風の...

かんしん (名) 甘心 心に快く思ふこと。...

かんじん (名) 肝腎 肝臓と腎臓と。...

かんす (名) 監寺 (名) 禪宗にて、寺の...

かんじり (名) 固き物を噛み當てた...

かんしん (名) 寒心 ぞっとすること。肝...

かんじん (名) 肝心 (肝と心とは人身に...

かんす (名) 奸 姦 (他動) 婦女...

かんじり (名) 感 (自動) かんず感の...

かんしん (名) 勘進 考へ調べて申し上げ...

かんじん (名) 勘進沙汰 (名) 鎌...

かんす (名) 刊 (他動) 刊行す。出版す。

かんしん (名) 庚申 (名) かうしん庚...

かんしん (名) 漢人 (名) 支那本土...

かんじん (名) 感震器 (名) 地震の...

かんす (名) 感 (自動) 物の氣に觸...

かんしん (名) 諫臣 (名) いさむる家...

かんしん (名) 清朝 (名) 支那人の稱。

かんじん (名) 勘進沙汰 (名) 鎌...

かんす (名) 感 (自動) 物の氣に觸...

かんしん (名) 奸臣 姦臣 (名) 心の...

かんしん (名) 閑人 (名) 用のなき人。

かんじん (名) 勘進沙汰 (名) 鎌...

かんす (名) 感 (自動) 寒身に染む。

かんしん (名) 奸心 (名) ねぢけたる...

かんしん (名) 閑人 (名) 甲冑を造るを...

かんじん (名) 勘進沙汰 (名) 鎌...

かんす (名) 勘 (他動) 罪を調べかんが...

かんす (自動) こざります。あります...

かんす (名) 澆水 (名) 船のあか。ふ...

かんせい (名) 湖聲 (名) 谷川の音。淡...

かんせい (名) 監製 監督して製造せし...

かんす (名) 乾荷 (名) かけくさ。ま...

かんす (名) 肝睡 (名) いびきをかきて、よ...

かんせい (名) 肝聲 (名) いびきの聲。

かんせい (名) 閑税 (名) かんせつせい...

かんす (名) 函數 (名) 數【甲數が...

かんす (名) 甘途 (名) 植【なつとう...

かんせい (名) 汗青 (名) 古へ支那に...

かんせい (名) 眼勢 (名) 前條に同じ。

かんす (名) 寒雀 (名) 寒中の雀。

かんす (名) 眼水 (名) なみだ涙)に...

かんせい (名) 濫竽 (名) をりと、おと...

かんせい (名) 閑清縫 (名) かんせ...

かんす (名) 寒水 (名) 寒冷なる...

かんす (名) 鹹水湖 (名) 【地】か...

かんせい (名) 濫竽 (名) をりと、おと...

かんせい (名) 閑清縫 (名) かんせ...

かんす (名) 旱水 (名) 旱損と水損...

かんす (名) 寒水石 (名) 【鐵】...

かんせい (名) 濫竽 (名) をりと、おと...

かんせい (名) 閑清縫 (名) かんせ...

かんす (名) 汗水 (名) あせみづ。あ...

かんす (名) 早水損 (名) 旱損...

かんせい (名) 濫竽 (名) をりと、おと...

かんせい (名) 閑清縫 (名) かんせ...

かんす (名) 湖水 (名) たにの水。即...

かんす (名) 早水損 (名) 旱損...

かんせい (名) 濫竽 (名) をりと、おと...

かんせい (名) 閑清縫 (名) かんせ...

かんす (名) 鹹水 (名) 海水の如く鹹...

かんす (名) 早水損 (名) 旱損...

かんせい (名) 濫竽 (名) をりと、おと...

かんせい (名) 閑清縫 (名) かんせ...

かんせき 標 (名) かんじき標に同
かんせき 巖石 (名) かん
 地球の外皮、即ち地殻を構成するもの。多
 多くは二種以上の礦物より成る。例へば
 花崗岩(御影石)の如きは石英・正長石・雲
 母の三礦物より成る類。いはば、
 太平洋に三層風を立てたるが如き岩石
 重なり、古松枝を垂れ、蒼苔露漉らかな
 り。史記通鑑に「陳勝、吳廣、大澤山澤、石之
 開」
かんせき 標 (名) かんじき標に同
かんせき 巖石 (名) かん
 地球の外皮、即ち地殻を構成するもの。多
 多くは二種以上の礦物より成る。例へば
 花崗岩(御影石)の如きは石英・正長石・雲
 母の三礦物より成る類。いはば、
 太平洋に三層風を立てたるが如き岩石
 重なり、古松枝を垂れ、蒼苔露漉らかな
 り。史記通鑑に「陳勝、吳廣、大澤山澤、石之
 開」

隔てて對すること。直接の對。②とはま
 はし。とはまはり。
かんせつ かんせつ 間接効用 (名)
 他物との交換によりて、欲望を充たすも
 得る財貨の効用の稱。直接効用の對。
かんせつ かんせつ 間接爲替 (名)
 爲替取引をなす。他の一國若しくは
 數國との爲替取引を經由して爲替取引を
 なし、以て其の間の債權、債務を決済する
 もの。直接爲替の對。
かんせつ かんせつ 間接機關 (名)
 法に他の國家機關の國法上の委任に基
 て、機關たるの地位を得る國家機關。直
 接機關の對。
かんせつ かんせつ 間接強制 (名)
 強制國債の發行。強制的に公債證書を交付す
 るもの。直接強制國債の對。
かんせつ かんせつ 間接國債 (名)
 國債發行法 (名) 次條に同じ。
かんせつ かんせつ 間接國債發行法 (名)
 國債發行法 (名) 次條に同じ。
かんせつ かんせつ 間接國債發行法 (名)
 國債發行法 (名) 次條に同じ。

募集せしむるもの。直接國債募集法の對。
かんせつ かんせつ 間接國稅 (名)
 國稅に關する犯罪あるとき
かんせつ かんせつ 間接國稅に關する犯罪 (名)
 國稅に關する犯罪あるとき
かんせつ かんせつ 間接國稅に關する犯罪 (名)
 國稅に關する犯罪あるとき
かんせつ かんせつ 間接國稅に關する犯罪 (名)
 國稅に關する犯罪あるとき
かんせつ かんせつ 間接國稅に關する犯罪 (名)
 國稅に關する犯罪あるとき

かんせつ かんせつ 間接國稅に關する犯罪 (名)
 國稅に關する犯罪あるとき
かんせつ かんせつ 間接國稅に關する犯罪 (名)
 國稅に關する犯罪あるとき
かんせつ かんせつ 間接國稅に關する犯罪 (名)
 國稅に關する犯罪あるとき
かんせつ かんせつ 間接國稅に關する犯罪 (名)
 國稅に關する犯罪あるとき
かんせつ かんせつ 間接國稅に關する犯罪 (名)
 國稅に關する犯罪あるとき

かんせつ かんせつ 間接肥料 (名)
 作物に對し其の養分の吸收力を進め、又
 は土壤を改良するに用ふる肥料の總稱。
かんせつ かんせつ 間接府縣稅 (名)
 關稅に關する府縣稅
かんせつ かんせつ 間接貿易 (名)
 關稅に關する貿易
かんせつ かんせつ 間接貿易 (名)
 關稅に關する貿易
かんせつ かんせつ 間接貿易 (名)
 關稅に關する貿易
かんせつ かんせつ 間接貿易 (名)
 關稅に關する貿易

國家が個人に對し、父兄が子弟に
 對し、又は雇主が被雇人に對して、干涉
 拘束を加ふる主義。放任主義の對。
かんせつ かんせつ 閑清 (名) かんせんぬひ
 閑清の略。
かんせつ かんせつ 閑清 (名) かんせんぬひ
 閑清の略。
かんせつ かんせつ 閑清 (名) かんせんぬひ
 閑清の略。
かんせつ かんせつ 閑清 (名) かんせんぬひ
 閑清の略。

かんせつ かんせつ 閑清 (名) かんせんぬひ
 閑清の略。
かんせつ かんせつ 閑清 (名) かんせんぬひ
 閑清の略。
かんせつ かんせつ 閑清 (名) かんせんぬひ
 閑清の略。
かんせつ かんせつ 閑清 (名) かんせんぬひ
 閑清の略。

かんせつ かんせつ 閑清 (名) かんせんぬひ
 閑清の略。
かんせつ かんせつ 閑清 (名) かんせんぬひ
 閑清の略。
かんせつ かんせつ 閑清 (名) かんせんぬひ
 閑清の略。
かんせつ かんせつ 閑清 (名) かんせんぬひ
 閑清の略。

かな — かな

かな 知(其他)「かななり」としぼる 較肝膽 かなた
 んをく(推肝膽)に同じ。かなたん
 (肝膽)の條を見よ。
かな 史記「使天下之民肝膽塗地」
 父子暴骨中野不可勝數」
かな 神主 (名) かなぬし(神主)
かなのし 神主 (名) かなぬし(神主)
かなのし 神主 (名) かなぬし(神主)
かなのし 神主 (名) かなぬし(神主)
かなのし 神主 (名) かなぬし(神主)

かに

かんなばこ 鉋箱 (名) 鉋を納める
 箱。道具箱。狂言「番匠屋の娘」
かんなばこ 鉋箱 (名) 鉋を納める
 箱。道具箱。狂言「番匠屋の娘」
かんなばこ 鉋箱 (名) 鉋を納める
 箱。道具箱。狂言「番匠屋の娘」
かんなばこ 鉋箱 (名) 鉋を納める
 箱。道具箱。狂言「番匠屋の娘」
かんなばこ 鉋箱 (名) 鉋を納める
 箱。道具箱。狂言「番匠屋の娘」

かに

かにんじゅう 堪忍情 (名) 堪忍
 する心。こらへじやう。關八州聚馬三妹
 が返答「今ややと一時餘り、待ちこたへ
 たる堪忍情」
かにんじゅう 堪忍情 (名) 堪忍
 する心。こらへじやう。關八州聚馬三妹
 が返答「今ややと一時餘り、待ちこたへ
 たる堪忍情」
かにんじゅう 堪忍情 (名) 堪忍
 する心。こらへじやう。關八州聚馬三妹
 が返答「今ややと一時餘り、待ちこたへ
 たる堪忍情」

かぬ

かぬ 看察と云ふ。世諦を見さばくる也
かぬ 看察と云ふ。世諦を見さばくる也
かぬ 看察と云ふ。世諦を見さばくる也
かぬ 看察と云ふ。世諦を見さばくる也
かぬ 看察と云ふ。世諦を見さばくる也
かぬ 看察と云ふ。世諦を見さばくる也

かぬ

かぬ 看察と云ふ。世諦を見さばくる也
かぬ 看察と云ふ。世諦を見さばくる也
かぬ 看察と云ふ。世諦を見さばくる也
かぬ 看察と云ふ。世諦を見さばくる也
かぬ 看察と云ふ。世諦を見さばくる也
かぬ 看察と云ふ。世諦を見さばくる也

かぬ

かぬ 看察と云ふ。世諦を見さばくる也
かぬ 看察と云ふ。世諦を見さばくる也
かぬ 看察と云ふ。世諦を見さばくる也
かぬ 看察と云ふ。世諦を見さばくる也
かぬ 看察と云ふ。世諦を見さばくる也
かぬ 看察と云ふ。世諦を見さばくる也

かぬ

かぬ 看察と云ふ。世諦を見さばくる也
かぬ 看察と云ふ。世諦を見さばくる也
かぬ 看察と云ふ。世諦を見さばくる也
かぬ 看察と云ふ。世諦を見さばくる也
かぬ 看察と云ふ。世諦を見さばくる也
かぬ 看察と云ふ。世諦を見さばくる也

かぬ

かぬ 看察と云ふ。世諦を見さばくる也
かぬ 看察と云ふ。世諦を見さばくる也
かぬ 看察と云ふ。世諦を見さばくる也
かぬ 看察と云ふ。世諦を見さばくる也
かぬ 看察と云ふ。世諦を見さばくる也
かぬ 看察と云ふ。世諦を見さばくる也

かんば

かんば 早稲に飢饉なし 降雨多き年には収獲皆無のことあれども、早稲には多少の收穫あり。
かんばつ 開伐 森林の樹木の整齊、發育を助くるために、適度の間隔を置き、伐する伐木。すかしきり。ぬききり。疎伐。

かんば

かんば 看板 (名) 商家などに、通行人又は需用者の注意を惹くため、家號・賣品・職業等を記して店頭に掲ぐる目標。
かんばつ 看板倒 (名) 看板のみにて、實際のこれに伴はぬこと。又、其のもの。

かんび

かんび 雁皮 (名) 植、瑞香科、葉花の葉の葉柄無く、毛茸多し。夏葉は卵形にて、葉披針形、鋭頭なり。
かんび 雁皮紙 (名) 雁皮を原料にして、紙の原料に供す。

かんび

かんび 雁皮紙織 (名) 織物の名。縹に絹絲或は絹絲織には雁皮紙を織りこめたるもの。伊豆國熱海の特産。
かんび 雁皮紙織 (名) 織物の名。縹に絹絲或は絹絲織には雁皮紙を織りこめたるもの。

かんび

かんび 嘲墮 (名) 酒の類をなすに用ふるびん。
かんび 姦夫 (名) 有夫の女と通じたる男。姦をこ。みそかを。
かんび 姦婦 (名) 夫ありながら他の男と私通したる女。みそかめ。

かんび

かんび 看板 (名) 商家などに、通行人又は需用者の注意を惹くため、家號・賣品・職業等を記して店頭に掲ぐる目標。
かんび 看板倒 (名) 看板のみにて、實際のこれに伴はぬこと。又、其のもの。

かんべ

かんべ 雁皮 (名) 植、瑞香科、葉花の葉の葉柄無く、毛茸多し。夏葉は卵形にて、葉披針形、鋭頭なり。
かんべ 雁皮紙 (名) 雁皮を原料にして、紙の原料に供す。

かんべ

かんべ 雁皮紙織 (名) 織物の名。縹に絹絲或は絹絲織には雁皮紙を織りこめたるもの。伊豆國熱海の特産。
かんべ 雁皮紙織 (名) 織物の名。縹に絹絲或は絹絲織には雁皮紙を織りこめたるもの。

だくみ。好針。太平記... かんぼく。植

かんぼく。寒木。冬枯れの木。 かんぼく。寒木

かんぼく。寒木。冬枯れの木。 かんぼく。寒木

かんぼく。寒木。冬枯れの木。 かんぼく。寒木

かんぼく。寒木。冬枯れの木。 かんぼく。寒木

かんぼく。寒木。冬枯れの木。 かんぼく。寒木

かんぼく。寒木。冬枯れの木。 かんぼく。寒木

かんぼく。寒木。冬枯れの木。 かんぼく。寒木

かんぼく。寒木。冬枯れの木。 かんぼく。寒木

かんぼく。寒木。冬枯れの木。 かんぼく。寒木

かんぼく。寒木。冬枯れの木。 かんぼく。寒木

かんぼく。寒木。冬枯れの木。 かんぼく。寒木

かんぼく。寒木。冬枯れの木。 かんぼく。寒木

かんぼく。寒木。冬枯れの木。 かんぼく。寒木

かんぼく。寒木。冬枯れの木。 かんぼく。寒木

かんぼく。寒木。冬枯れの木。 かんぼく。寒木



かんむり冠(名) かんむり冠(名) かんむり冠(名)

かんめ。好針。太平記... かんめ。好針

かんめ。好針。太平記... かんめ。好針

かんめ。好針。太平記... かんめ。好針

かんめ。好針。太平記... かんめ。好針

かんらん

かんり

かんり

かんれ

かんらんかん 橄欖岩 (名) 橄欖石より成る過珪基性の火成岩。分解すれば蛇紋岩に變ず。本邦には磐城・常陸等に之を見る。

かんらんかん 橄欖科 (名) 植物。雙子葉類の科。喬木又は灌木。葉は互生、奇数羽狀複葉又は三小叶より成る複葉、托葉を有し、又は之を缺く。花は總狀又は複總狀花序に排列し、两性又は雄性。萼は三裂乃至五裂し、花冠は離瓣、三箇乃至五箇の花瓣を有し、花盤ありて輪狀又は盃狀にして、萼の基部と癒合す。雄蕊は花盤と同數又は倍數、花盤に著生す。子房は二室乃至五室、稀に一室、花柱は單一柱頭、亦單一、或ひは二裂乃至五裂す。子房各室には二箇、稀に一箇の胚珠を藏す。果實は核果にして、種子には胚乳無し。本科に屬するものは、殊に熱帯に分布し、有用なるもの少なからず。

かんらんかん 橄欖色 (名) 橄欖石の微褐色に同じ。

かんらんかん 監吏 (名) 監督する吏員。税關の職員。税關監視者にて、上官の指揮を受け、關稅警察及び犯則處分に關する事務に従事する判任官。税關官制第三條に「監吏」を列す。關東都府府監獄の職員。上官の指揮を受け、監獄の戒護及び庶務に従事し、部下の看守を指揮、監督する判任官。關東都府府監獄官制第三條に「監吏」を列す。畿内府府監獄の職員。監獄管理監督すること。

かんらんかん 監吏 (名) 監督する吏員。税關の職員。税關監視者にて、上官の指揮を受け、關稅警察及び犯則處分に關する事務に従事する判任官。税關官制第三條に「監吏」を列す。關東都府府監獄の職員。上官の指揮を受け、監獄の戒護及び庶務に従事し、部下の看守を指揮、監督する判任官。關東都府府監獄官制第三條に「監吏」を列す。畿内府府監獄の職員。監獄管理監督すること。

かんらんかん 監吏 (名) 監督する吏員。税關の職員。税關監視者にて、上官の指揮を受け、關稅警察及び犯則處分に關する事務に従事する判任官。税關官制第三條に「監吏」を列す。關東都府府監獄の職員。上官の指揮を受け、監獄の戒護及び庶務に従事し、部下の看守を指揮、監督する判任官。關東都府府監獄官制第三條に「監吏」を列す。畿内府府監獄の職員。監獄管理監督すること。

かんらんかん 監吏 (名) 監督する吏員。税關の職員。税關監視者にて、上官の指揮を受け、關稅警察及び犯則處分に關する事務に従事する判任官。税關官制第三條に「監吏」を列す。關東都府府監獄の職員。上官の指揮を受け、監獄の戒護及び庶務に従事し、部下の看守を指揮、監督する判任官。關東都府府監獄官制第三條に「監吏」を列す。畿内府府監獄の職員。監獄管理監督すること。

かんらんかん 監吏 (名) 監督する吏員。税關の職員。税關監視者にて、上官の指揮を受け、關稅警察及び犯則處分に關する事務に従事する判任官。税關官制第三條に「監吏」を列す。關東都府府監獄の職員。上官の指揮を受け、監獄の戒護及び庶務に従事し、部下の看守を指揮、監督する判任官。關東都府府監獄官制第三條に「監吏」を列す。畿内府府監獄の職員。監獄管理監督すること。

かんれい 寒冷 (名) 寒く冷やかなること。つめたきこと。山谷詩「燈火坐寒冷」。

かんれい 寒冷 (名) 寒く冷やかなること。つめたきこと。山谷詩「燈火坐寒冷」。

かんれい 寒冷 (名) 寒く冷やかなること。つめたきこと。山谷詩「燈火坐寒冷」。

かんれい 寒冷 (名) 寒く冷やかなること。つめたきこと。山谷詩「燈火坐寒冷」。

かんれい 寒冷 (名) 寒く冷やかなること。つめたきこと。山谷詩「燈火坐寒冷」。

かんれい 寒冷 (名) 寒く冷やかなること。つめたきこと。山谷詩「燈火坐寒冷」。

かんれい 寒冷 (名) 寒く冷やかなること。つめたきこと。山谷詩「燈火坐寒冷」。

かんれい 寒冷 (名) 寒く冷やかなること。つめたきこと。山谷詩「燈火坐寒冷」。

「上」孝徳紀「車」天智紀「石」...

「一氣」(名) 風雨・寒暑等天地間...

好ましく思ふ心あり。おぼしめしがあ...

「一記」(名) 記しるすこと。又、其の...

「一規」(名) 規(名) 規(名) 規(名)...

「一氣」(名) 風雨・寒暑等天地間...

「一記」(名) 記しるすこと。又、其の...

「一規」(名) 規(名) 規(名) 規(名)...

「一機」(名) 機(名) 機(名) 機(名)...

さ 一鬼(名) 死者の精霊。論語「鬼を非其鬼而祭之謂也」冥冥の間に存在して人間以上の靈ありといふもの。
 二十八宿の一。鬼宿。唐船嶺今國姓嶺。南天には、よく、ちん・きりう・せい・ちやう星。

さ 一箕(名) 二十八宿の一。うしやめぼし。史記「箕宿爲蓋星」
さ 一危(名) 二十八宿の一。うしやめぼし。史記「危宿爲蓋星」
さ 一己(名) 十千の一。みづのと。十千の一。つちのと。
さ 一歸(名) おもむき。歸向。趨向。歸著。歸を同じくす。
さ 一軌(名) わだち。車軌。中庸「天下、車同軌、書同文」戰國策「車不得方軌、馬不得並行」一定の法則のり。
さ 一驥(名) 千里をも走るといふ駿馬。徒然草「驥を學ぶは驥のたぐひ」
さ 一起(名) きく(起句)の略。「起承・轉・結」

さ 一基(名) 〔化〕原子の一團にして、化學變化に際し、分裂することなく、物質より他物質に移ること、恰も一原子の如く作用すること。
さ 一騎(名) 馬に乗ること。「騎して行く」
さ 一馬(名) 馬に乗ること。「騎して行く」
さ 一合(名) 馬に乗ること。「騎して行く」
さ 一合(名) 馬に乗ること。「騎して行く」
さ 一合(名) 馬に乗ること。「騎して行く」

さ 一助(名) 過去の意を表す語。記。「神夜良比夜良比岐」同。山がたにすき斯とたね春き」同。其美人驚而、立走伊須須岐伎」同。かもがと我が見斯ところ、かくもがと我が見斯子に」同。「かみのごと、聞こえ斯速」同。「あけひのこ、鈴落ちに岐」と「推古紀」大君のつかはすらし根」
さ 一基(助數) 据を置く器、又は立て

おく物を数ふの語。支那式「經臺一基中經臺一基」警臺一基。内匠寮式「厨子一基」太神宮式「銀銅多利一基」朝野群載「警臺壹基、腰與壹基」東宮年中行事「てんじやうの二基のからびつふたにいれ」

さ 一工(接頭) 原産のままにて、人工を加へず、又精製せざる意を表す語。「生絲(生樂)」「生蠟」
さ 一君(名) 古語。きみ(君に同じ)。
さ 一記(名) 古語。きみ(君に同じ)。
さ 一記(名) 古語。きみ(君に同じ)。
さ 一記(名) 古語。きみ(君に同じ)。

さ 一義(名) 五常の一。行爲の道に合ふこと。制裁の理に適合すること。己れの利害を顧みずして、人道の爲めに盡くすこと。書經「以義制事、以禮制心」易經「利者義之和也」同。君子敬以直内、義以方外」道理。理由。保元平治の亂に其の義ありとて、打ち立ちければ」
さ 一義(名) 五常の一。行爲の道に合ふこと。制裁の理に適合すること。己れの利害を顧みずして、人道の爲めに盡くすこと。書經「以義制事、以禮制心」易經「利者義之和也」同。君子敬以直内、義以方外」道理。理由。保元平治の亂に其の義ありとて、打ち立ちければ」
さ 一義(名) 五常の一。行爲の道に合ふこと。制裁の理に適合すること。己れの利害を顧みずして、人道の爲めに盡くすこと。書經「以義制事、以禮制心」易經「利者義之和也」同。君子敬以直内、義以方外」道理。理由。保元平治の亂に其の義ありとて、打ち立ちければ」

さ 一義(名) 五常の一。行爲の道に合ふこと。制裁の理に適合すること。己れの利害を顧みずして、人道の爲めに盡くすこと。書經「以義制事、以禮制心」易經「利者義之和也」同。君子敬以直内、義以方外」道理。理由。保元平治の亂に其の義ありとて、打ち立ちければ」
さ 一義(名) 五常の一。行爲の道に合ふこと。制裁の理に適合すること。己れの利害を顧みずして、人道の爲めに盡くすこと。書經「以義制事、以禮制心」易經「利者義之和也」同。君子敬以直内、義以方外」道理。理由。保元平治の亂に其の義ありとて、打ち立ちければ」
さ 一義(名) 五常の一。行爲の道に合ふこと。制裁の理に適合すること。己れの利害を顧みずして、人道の爲めに盡くすこと。書經「以義制事、以禮制心」易經「利者義之和也」同。君子敬以直内、義以方外」道理。理由。保元平治の亂に其の義ありとて、打ち立ちければ」

で、義を立て抜いた此の甘藷」
さ 一義(名) 五常の一。行爲の道に合ふこと。制裁の理に適合すること。己れの利害を顧みずして、人道の爲めに盡くすこと。書經「以義制事、以禮制心」易經「利者義之和也」同。君子敬以直内、義以方外」道理。理由。保元平治の亂に其の義ありとて、打ち立ちければ」
さ 一義(名) 五常の一。行爲の道に合ふこと。制裁の理に適合すること。己れの利害を顧みずして、人道の爲めに盡くすこと。書經「以義制事、以禮制心」易經「利者義之和也」同。君子敬以直内、義以方外」道理。理由。保元平治の亂に其の義ありとて、打ち立ちければ」

さ 一義(名) 五常の一。行爲の道に合ふこと。制裁の理に適合すること。己れの利害を顧みずして、人道の爲めに盡くすこと。書經「以義制事、以禮制心」易經「利者義之和也」同。君子敬以直内、義以方外」道理。理由。保元平治の亂に其の義ありとて、打ち立ちければ」
さ 一義(名) 五常の一。行爲の道に合ふこと。制裁の理に適合すること。己れの利害を顧みずして、人道の爲めに盡くすこと。書經「以義制事、以禮制心」易經「利者義之和也」同。君子敬以直内、義以方外」道理。理由。保元平治の亂に其の義ありとて、打ち立ちければ」
さ 一義(名) 五常の一。行爲の道に合ふこと。制裁の理に適合すること。己れの利害を顧みずして、人道の爲めに盡くすこと。書經「以義制事、以禮制心」易經「利者義之和也」同。君子敬以直内、義以方外」道理。理由。保元平治の亂に其の義ありとて、打ち立ちければ」

さ 一義(名) 五常の一。行爲の道に合ふこと。制裁の理に適合すること。己れの利害を顧みずして、人道の爲めに盡くすこと。書經「以義制事、以禮制心」易經「利者義之和也」同。君子敬以直内、義以方外」道理。理由。保元平治の亂に其の義ありとて、打ち立ちければ」
さ 一義(名) 五常の一。行爲の道に合ふこと。制裁の理に適合すること。己れの利害を顧みずして、人道の爲めに盡くすこと。書經「以義制事、以禮制心」易經「利者義之和也」同。君子敬以直内、義以方外」道理。理由。保元平治の亂に其の義ありとて、打ち立ちければ」
さ 一義(名) 五常の一。行爲の道に合ふこと。制裁の理に適合すること。己れの利害を顧みずして、人道の爲めに盡くすこと。書經「以義制事、以禮制心」易經「利者義之和也」同。君子敬以直内、義以方外」道理。理由。保元平治の亂に其の義ありとて、打ち立ちければ」

さ 一義(名) 五常の一。行爲の道に合ふこと。制裁の理に適合すること。己れの利害を顧みずして、人道の爲めに盡くすこと。書經「以義制事、以禮制心」易經「利者義之和也」同。君子敬以直内、義以方外」道理。理由。保元平治の亂に其の義ありとて、打ち立ちければ」
さ 一義(名) 五常の一。行爲の道に合ふこと。制裁の理に適合すること。己れの利害を顧みずして、人道の爲めに盡くすこと。書經「以義制事、以禮制心」易經「利者義之和也」同。君子敬以直内、義以方外」道理。理由。保元平治の亂に其の義ありとて、打ち立ちければ」
さ 一義(名) 五常の一。行爲の道に合ふこと。制裁の理に適合すること。己れの利害を顧みずして、人道の爲めに盡くすこと。書經「以義制事、以禮制心」易經「利者義之和也」同。君子敬以直内、義以方外」道理。理由。保元平治の亂に其の義ありとて、打ち立ちければ」

氣上がり、顔は天火」
さ 一氣(名) 木のあるしる。聖德太子繪傳記「練り築地の棟瓦、木あぐら組んで待ち居たる」
さ 一氣(名) 木のあるしる。聖德太子繪傳記「練り築地の棟瓦、木あぐら組んで待ち居たる」
さ 一氣(名) 木のあるしる。聖德太子繪傳記「練り築地の棟瓦、木あぐら組んで待ち居たる」

さ 一氣(名) 木のあるしる。聖德太子繪傳記「練り築地の棟瓦、木あぐら組んで待ち居たる」
さ 一氣(名) 木のあるしる。聖德太子繪傳記「練り築地の棟瓦、木あぐら組んで待ち居たる」
さ 一氣(名) 木のあるしる。聖德太子繪傳記「練り築地の棟瓦、木あぐら組んで待ち居たる」

さ 一氣(名) 木のあるしる。聖德太子繪傳記「練り築地の棟瓦、木あぐら組んで待ち居たる」
さ 一氣(名) 木のあるしる。聖德太子繪傳記「練り築地の棟瓦、木あぐら組んで待ち居たる」
さ 一氣(名) 木のあるしる。聖德太子繪傳記「練り築地の棟瓦、木あぐら組んで待ち居たる」

さ 一氣(名) 木のあるしる。聖德太子繪傳記「練り築地の棟瓦、木あぐら組んで待ち居たる」
さ 一氣(名) 木のあるしる。聖德太子繪傳記「練り築地の棟瓦、木あぐら組んで待ち居たる」
さ 一氣(名) 木のあるしる。聖德太子繪傳記「練り築地の棟瓦、木あぐら組んで待ち居たる」

さ 一氣(名) 木のあるしる。聖德太子繪傳記「練り築地の棟瓦、木あぐら組んで待ち居たる」
さ 一氣(名) 木のあるしる。聖德太子繪傳記「練り築地の棟瓦、木あぐら組んで待ち居たる」
さ 一氣(名) 木のあるしる。聖德太子繪傳記「練り築地の棟瓦、木あぐら組んで待ち居たる」

さ 一氣(名) 木のあるしる。聖德太子繪傳記「練り築地の棟瓦、木あぐら組んで待ち居たる」
さ 一氣(名) 木のあるしる。聖德太子繪傳記「練り築地の棟瓦、木あぐら組んで待ち居たる」
さ 一氣(名) 木のあるしる。聖德太子繪傳記「練り築地の棟瓦、木あぐら組んで待ち居たる」

さ 一氣(名) 木のあるしる。聖德太子繪傳記「練り築地の棟瓦、木あぐら組んで待ち居たる」
さ 一氣(名) 木のあるしる。聖德太子繪傳記「練り築地の棟瓦、木あぐら組んで待ち居たる」
さ 一氣(名) 木のあるしる。聖德太子繪傳記「練り築地の棟瓦、木あぐら組んで待ち居たる」

さ 一氣(名) 木のあるしる。聖德太子繪傳記「練り築地の棟瓦、木あぐら組んで待ち居たる」
さ 一氣(名) 木のあるしる。聖德太子繪傳記「練り築地の棟瓦、木あぐら組んで待ち居たる」
さ 一氣(名) 木のあるしる。聖德太子繪傳記「練り築地の棟瓦、木あぐら組んで待ち居たる」

さ 一氣(名) 木のあるしる。聖德太子繪傳記「練り築地の棟瓦、木あぐら組んで待ち居たる」
さ 一氣(名) 木のあるしる。聖德太子繪傳記「練り築地の棟瓦、木あぐら組んで待ち居たる」
さ 一氣(名) 木のあるしる。聖德太子繪傳記「練り築地の棟瓦、木あぐら組んで待ち居たる」

さ 一氣(名) 木のあるしる。聖德太子繪傳記「練り築地の棟瓦、木あぐら組んで待ち居たる」
さ 一氣(名) 木のあるしる。聖德太子繪傳記「練り築地の棟瓦、木あぐら組んで待ち居たる」
さ 一氣(名) 木のあるしる。聖德太子繪傳記「練り築地の棟瓦、木あぐら組んで待ち居たる」

さ 一氣(名) 木のあるしる。聖德太子繪傳記「練り築地の棟瓦、木あぐら組んで待ち居たる」
さ 一氣(名) 木のあるしる。聖德太子繪傳記「練り築地の棟瓦、木あぐら組んで待ち居たる」
さ 一氣(名) 木のあるしる。聖德太子繪傳記「練り築地の棟瓦、木あぐら組んで待ち居たる」

きん (名) 「植」にいはばら(金櫻子)の異名。

きん (自動) きいと音す。きいと鳴る。大筑波、ふぐりを締めてきいめかせけりの松の木のかかるはね釣瓶。

きん 来入 (自動) 来たり入る。記「おほむろやに、人さには岐伊理(き)をり、人さには入りたりとも」同「やがはえなす、岐伊理(き)まわくれ」

きん 黄色 (名) 黄なる色。黄。宇津保(き)きいろの小うちきかきれたる。

きん 黄色氣 (副) きいろなる氣味。きいろさう。

きん 黄色與 (名) 漆にて黄色に塗られたる。歴入記「しよせの事申當の時は、きいろのこしなり」

きん 黄色 (名) 黄いろきこと。きいろさう。

きん 黄色 (形) 黄色なり。

きん 黄色 (名) 黄いろきこと。きいろさう。

きん 黄色味 (名) きいろき氣味。

きん 起因 おこり。はじまり。起因。

きん 一基因 げんいん原因に同。

きん 一歸隱 職をやめ郷里に歸りて隠遁すること。

きん 一欺隱 事實をかくして、人を欺くこと。舊刑法第三百九十九條「已に欺當典物と爲したるを欺隱して他人に賣與し又は承て欺當典物と爲したる者」

きん 一偽印 (名) 偽造の印。又、其の印を押捺したる印影。偽判。謀列。舊刑法第三百九十九條「各官署の印を偽造し又」

其偽印を使用した者。同「百九十九條の記號印章を偽造し又は其偽印を使用した者」

きん 一灸 (名) 醫術の法。艾(きん)を膚に著け、其れに火を點じて灼くこと。之を灸をすうといふ。やいと。灸點。徒然草「四十以後の人身に灸を加へて三里を焼かざれば上氣の事あり。必ず灸すべし」

きん をおろす 初めて灸點をおろす。灸をすう。

きん 一灸治をなす。灸戒めをすう。

きん 一柩 (名) ひつぎ柩に同じ。禮記「在棺曰柩、在棺曰柩」

きん 一舊 (名) ふるきこと。ふるき時。ふるき物事。昔のありさま。昔の跡。新の對「舊を送り新を迎ふ」「舊を語る」書經「維今之人、不尙有舊」左傳「不尙舊也」訓れて久しくなること。舊知。左傳「季友如陳、葬原仲、非魯也。原仲季友之舊也」(きん)れき(舊曆)の略。新の對「回きうかぶ(舊株)の略。「日本銀行株の新舊、各六七圓安」

きん 一救 (名) 城壁の高さを量る單位。高さ一丈、廣二尺の稱。拾芥抄中「一丈爲救二」

きん 一救 (名) 玉の如く丸き形をなせるもの稱。「救」半圓が、其の直徑を軸として一回轉するとき生ずる立體。

きん 一氣字 器宇 (名) きくらみ。心いき。氣象。器量。三國志「龐統云、要識氣先看器宇高卑」

きん 一九 (名) ここのつ。く。初は八尺、(舊)九尺の功を二番に虧く。

實は土籠」事の成らんとする間際中に止するに譬ふ。書經「不尙細行終累」九層の臺は累土より起る。廣積もりて山となるに同じ。ちり塵の臺も累土より起り、千里の行は一步より始まるといふ老子の教へも。

きん 一祈雨 雨ふらんことを祈ること。あまごひ。著聞「保安五年五月朔日祈雨の奉幣有りけり」

きん (名) ぐうに同じ。浮世床「きうともすうとも云ひをらいて、走るは」

きん 一牛 (名) 牛(動)「牛」に同じ。易經「乾爲馬、坤爲牛」(きん)に同じ。牛(肉)の略。「きん(妓夫)の異名。太平記「夜に目くらに立つ夜發の遊女の支配する、牛とやら、もうとやらの業侍のせぬ事」(きん)二十八宿の一。

きん 一舊病 (名) 久しく癒えざる病氣。以前にかかりたる病氣。宿病。潘岳文「舊病加、舊病有」

きん 一舊惡 (名) ふるき惡事。昔の恨み。論語「道不念舊惡、惡是用希」

きん 一舊衣 (名) 著ふるしたる衣。ふるき衣服。

きん 一野夷 (名) 古へ支那にて、東方にある野蠻の外國の稱。即ち、吠夷。千夷。方夷。黃夷。白夷。赤夷。女夷。風夷。陽夷。又、他國を卑していふ語。太平記「五、皇泰の始皇の六國を并せ、漢の文、章の九夷を順へしに異ならず」論語「子欲居九夷、或曰、陋如之何」

きん 一休意 ころを安むること。安心。休心。

きん 一牛醫 (名) 牛の病を療治する醫者。後漢書「黃憲世貧賤、父爲牛醫」

醫戴良見憲歸、問然若者、母問曰、汝復從牛醫兒來耶」

きん 一舊友 (名) 久しく交じはる友。昔、交じはりし友。昔の朋友。許渾詩「舊友北來頻」

きん 一舊遊 (名) 昔、遊びたること。昔、共に遊びし朋友。朗詠「舊遊零落半歸泉」李白詩「今古一相接、長歌懷舊遊」

きん 一教育 棄兒などを救ひてそだつること。明治四年六月二十日大政官達「從來棄兒教育の儀所預りの分は養育米被下」

きん 一教育所 (名) 棄兒、迷兒、遺兒その他、扶養する者なき不具者等を收容して養育する所。明治三十三年法律第五十一號「教育所」同年勅令第四百四十四號「教育所」同年內務省令第十一號「教育所」

きん 一舊姻 (名) ふるきより婚姻を結びたりし縁あること。又、其の家。詩經「不尙舊姻、求爾新特」漢書「王莽求舊姻之家」

きん 一蚯蚓 (名) 「動」みみず(蚯蚓)に同じ。禮記「孟夏之月蚯蚓出、仲冬之月蚯蚓結」

きん 一牛飲 牛の水を飲む如く暴飲すること。「牛飲馬食」史記「魏村爲酒池、迴船積丘而牛飲者、三千餘人爲輩」

きん 一牛飲 牛の如く飲み、馬の如く食ふこと。暴飲暴食。み、大いに食ふこと。

きん 一牛疫 (名) 牛の流行病。

きん 一牛葉甘藍 (名) 「植」はぼたん(甘藍)に同じ。

きん 一舊縁 (名) ふるき縁故。

昔のなじみ。太平記「昔、前業の嬰かる所に、舊縁を離れぬて」

きん 一久延 年久しく延ぶること。長久。平治「是れを見る人、善を招き惡を避け、壽命久延といふ」

きん 一舊恩 (名) ふるき恩。昔、受けたる恩。盛衰記「昔、今義明爲頼朝、忽報舊恩、遂立新功」漢書「況重以骨肉之親、及加以舊恩未報乎」

きん 一舊家 (名) 年久しく續き来たりの家。其の地に久しく住居する家。

きん 一九夏 (名) 夏季、九十日の間の稱。朗詠「九夏、三伏之暑月、竹合銷午之風」盛衰記「九夏、三伏の夏の天にもなりぬれば」論語「九夏の天も暑を忘れ、玄冬の朝も寒からず」梁元帝「夏曰、朱明、亦曰、長風、朱夏、炎夏、三夏、九夏」

きん 一休暇 休暇 やすみ。明治九年達第二十七號「従前一六日休暇の處來る四月より日曜日を以て休暇と被定候條此旨相違候事但土曜日は正午十二時より休暇たる(き事)漢書「古者吏休假日告」

きん 一球芽 (名) 「植」しゆが(球芽)の異名。

きん 一舊交 (名) ふるき交際。昔よりの朋友。舊好。舊友。運歩色葉「舊交」飛國策「舊交」史記「使於鄭、見子產、如舊交」

きん 一舊好 (名) ふるきよしみ。昔よりのしたしみ。太平記「舊好不便也」左傳「私、久しく相調れし舊好の程も史記「結舊好於諸侯」

きん 一舊稿 (名) ふるき作りし詩歌、文章。

きん 一休校 學校が、課業を休むこと。生徒が、其の學校の課業を休むこと。

きん 一休講 講義などを休むこと。

きん 一舊郷 (名) ふるさと。故郷。郷里。論語「胡馬北風に、いばえしも、舊郷を忍ぶ故なりとか」

きん 一叫號 かけぶこと。號叫。詩經「或不知叫號、或慘慄劬勞」

きん 一嗅覺 (名) 「醫」嗅覺器の末梢神經に香氣ある氣體の觸れし際、其の化學的刺戟によりて起る感覺の一種。

きん 一丘壑 (名) をかたとたに山谷。洛陽伽藍記「楊元慎父甜、自得丘壑不事王侯」

きん 一休學 學業を休むこと。生徒のしぼりて登校せざること。

きん 一牛角 (名) 牛屬のつ。牛の革。牛皮。

きん 一嗅覺器 (名) 「醫」顔面の中央、即ち鼻部、分ちて外鼻及び内鼻とす。外鼻は所謂鼻にて、内鼻は鼻腔及び粘膜に、嗅覺を司る部分なり。嗅器。嗅官。

きん 一休暇事件 (名) 法 通常裁判所が夏季の休暇中にも取り扱ふ事件、即ち、刑事事件、非訟事件、判決執行事件、破産事件、略式を以て取り扱ふことを得る民事訴訟事件、流通證券、船舶運送貨物の請求、保證を出さしむる請求の類。民事訴訟法第六十三條「前項の規定は不變期間及び休暇事件の期間には之を適用せず」同「同項」休暇事件とは裁判所構成法

第二百二十八條「第二百二十九條に掲げたる事件を謂ふ」

きん 一休職事務 (名) 法 休職事務の事務。裁判所構成法第三十三條「二人以上の判事を置きたる區裁判所の休職事務取扱方法は監督判事の定む」

きん 一裘褐 (名) 皮ころもあらぬもの。莊子「天子使後世之墨者多以裘褐爲衣、以跛躄爲履、日夜不休、以自苦爲極」

きん 一裘葛 (名) 皮ころもくずぬもの。冬衣と夏衣と。

きん 一裘葛 (名) 冬と夏とを經過す。一年たつ。

きん 一舊株 (名) 新たに發行する株券に對し、株式會社が其の創立の際、資本募集のため、始めに發行したる株券の稱。新株の對

きん 一休職部 (名) 司法會議裁判所、即ち地方裁判所、控訴院、大審院にて休職事務取扱のために休職中設くる部。其の組立は休職の始まる前、裁判所長の定むるものとす。裁判所構成法第三十三條「司法會議所にては休職中事務取扱の爲休職部と稱する」若し二以上の部を設く休職部の組立は休職の始まる前裁判所長の定むる」

きん 一糾合 (名) 糾は繩をよりあはす義。よせあつむること。一つにまとむること。鳩合。左傳「糾合、桓公是以糾合諸侯」史記「起糾合之衆、收散亂之兵、不滿萬人」

きん 一休職部長 (名) 休職部の長。其の部の事務を監督し、其の分配を定むるもの。裁判所構成法第三十三條「休職部若し休職部長に於て直に著手すべき緊急のものと認めたる請求若し事件」

きん 一鳩類 (名) 「動」鳥類分類上の目名。嘴は短小にて、先端のみ角皮を被り、肢は短くして弱し。翼大なる故に飛翔するに乏し。雌、雄孰れも、唾液より乳液を分泌して雛を養ふ。かはらばと、きじばと、あをばとの類。

きん 一休職免許證 (名) 父母、妻子の重病又は死亡等により、休職を得て、歸郷又は旅行する陸軍下士官に交付する證書。明治三十四年陸軍者令第十二號「休職免許證」

きん 一救荷料 (名) 「商」救授救助費として支拂ふ料金。

きん 一球竿 (名) 體操に用ふる具。長さ五尺ばかりある木の棒の頭に木球を附けたるもの。

きん 一嗅覺 (名) きうかく(嗅覺)に同じ。

きん 一休刊 新聞、雜誌などが、其の發行を休むこと。

きん 一休閑 農業にて、地力を休養する爲めに、耕作を中止し置くこと。

きん 一嗅覺器 (名) 「醫」きうかく(嗅覺)に同じ。

きん 一嗅覺器 (名) 「醫」きうかく(嗅覺)に同じ。

きん 一球竿體操 (名) 球竿を持ちて行ふ體操。

きん 一舊記 (名) 昔の記録。舊事を記したる文書。年中行事、秘抄、舊記云「太平記」是れ皆上古の不思議、舊記の載する所也」北魏書「因、其舊記」

きん 一舊規 (名) ふるきよりある規定。ふるきおきて。太平記「三人會集」不如、公請、論議の聲を捨てて、高祖大師の舊規に歸らんには」

きん 一嗅覺器 (名) 「醫」きうかく(嗅覺)の略。

この類にて製り、環の形とす。船舶檢査規程第九十條「救命浮環」
きりりめいふたい 「救命浮環」(名) 身體の水に溺るるを防ぐために、胴・肩の間に纏ひ附くる带状の具。船舶檢査規程第九十條「救命浮環」
きりりめいふたい 「救命浮環」(名) 身體の水に溺るるを防ぐために、胴・肩の間に纏ひ附くる带状の具。船舶檢査規程第九十條「救命浮環」
きりりめいふたい 「救命浮環」(名) 身體の水に溺るるを防ぐために、胴・肩の間に纏ひ附くる带状の具。船舶檢査規程第九十條「救命浮環」
きりりめいふたい 「救命浮環」(名) 身體の水に溺るるを防ぐために、胴・肩の間に纏ひ附くる带状の具。船舶檢査規程第九十條「救命浮環」
きりりめいふたい 「救命浮環」(名) 身體の水に溺るるを防ぐために、胴・肩の間に纏ひ附くる带状の具。船舶檢査規程第九十條「救命浮環」
きりりめいふたい 「救命浮環」(名) 身體の水に溺るるを防ぐために、胴・肩の間に纏ひ附くる带状の具。船舶檢査規程第九十條「救命浮環」
きりりめいふたい 「救命浮環」(名) 身體の水に溺るるを防ぐために、胴・肩の間に纏ひ附くる带状の具。船舶檢査規程第九十條「救命浮環」
きりりめいふたい 「救命浮環」(名) 身體の水に溺るるを防ぐために、胴・肩の間に纏ひ附くる带状の具。船舶檢査規程第九十條「救命浮環」
きりりめいふたい 「救命浮環」(名) 身體の水に溺るるを防ぐために、胴・肩の間に纏ひ附くる带状の具。船舶檢査規程第九十條「救命浮環」

は灰白色なり。その肉は胡瓜の如き臭氣を有す。北海道の産。
きりりか 「九里香」(名) 【菴】もくせい木犀の異名。
きりりがく 「究理學」(名) 【理】物の理を究むる學問。又、理學ともいひて、其の範圍廣げれども、主として今日の物理學をいふ。此の名稱今は殆ど用ひられず。
きりりり 「舊律」(名) ふるき法律。
きりりり 「舊律」(名) ふるき法律。
きりりり 「舊律」(名) ふるき法律。
きりりり 「舊律」(名) ふるき法律。
きりりり 「舊律」(名) ふるき法律。
きりりり 「舊律」(名) ふるき法律。
きりりり 「舊律」(名) ふるき法律。
きりりり 「舊律」(名) ふるき法律。
きりりり 「舊律」(名) ふるき法律。
きりりり 「舊律」(名) ふるき法律。

信心
消 (自動) 消ゆることをす。
きえす (自動) 消ゆること。後撰玉山隠れきえすぬ雪のわびしきは、君まつ葉にかりてぞふる。源実朝、ただきえすぬ程は有るにまかせ、おいらかならんと思ひはてて。
きえそう 一 歸依僧 (名) 我が歸依する僧。
きえん 一 喜悅 よるこぶこと。よるこび。太平記、師直喜悅の肩が開き、「庭園往來、一願今欲、遊使者候處、遮而預、音信候條、相叶本懐候、殊以喜悅喜悅」漢書、皆喜悅。
きえん 一 消盡 (自動) 悉く消ゆ。きえはつ。玉葉舞、夜もすがら空の薄霧きえつきて、心にみがく秋の月かげ。
きえんとする 消止 (自動) きえすして残りともまる。きえこのこ。源實朝、えとまる程やはずき、たまさかに蓮の露のかかるばかりを。
きえんの消 (自動) 消えはつてしきて残り。萬鳥みけむかふ、みなぞち山のいはほには、ふるはだれか消盡 (きえ) たる。生き残り。生存す。源實朝、女君きえのこりたるいとほしみに、わたり給ひて、榮華、誰れも皆きえのこるべき身ならねど、行きかくれぬる君ぞ悲しき。
きえはつ 消果 (自動) 消え盡く。全く消ゆ。古今語、きえはつる時しなれば、こしちなる白山の名は雪にぞありける。「思ふく絶ゆ。死す。勢語、あひ思はでかれぬる人をとどめかね、我が身は今ぞきえ(くち)はてぬめる。」源實朝、けかか程に、きえはて給ひぬ。全く絶ゆ。離れはつ。後撰、きえはててやみぬばかりか年をへて、君をおもひのししなければ。

消果 (自動) 前條の口語。
きえびね (名) 「植蘭科、えびね属の多年生草本。葉は根生にして、廣椭圆形、やや鋭頭、葉開漸く狭くして翼を有し、葉身に著しき五縱脈あり。花莖は葉間より抽出し、短き總狀花序に排列せる花を著け、春季開き、淡黄色にして美なり。我が國、各地の山地に自生す。又、觀賞用として栽培せらるることあり。
きえつ 一 歸依佛 (名) 歸依するほとけ。信仰するほとけ。
きえま 一 歸依法 (名) 佛道を行ぜんとて、法に歸依すること。
きえまど 一 消惑 (自動) 消え入るほどに思ふ惑ふ。源實朝、きえまどへるけしき、いと心ぐるしくらうたげなれば。
きえむく 消行 (自動) きえてゆく。次第にゆく。玉葉、ふり埋む雪の姿と見えたるを、きえゆく方ぞ竹になりにゆく。
きえる 消 (自動) きゆ(消)の口語。
きえわたる 消渡 (自動) 一面に消ゆ。全く消ゆ。源實朝、若きご達の消えかへり心移す少づ、何くれの殿上人のやうの人は、何にもあらずきえわたれるは、更たたぐひなうおはしますなりけり。
きえわ 消侘 (自動) 消えざることを思ひわぶ。又、消え入るばかりに思ひわぶ。新古今語、この霜枕のきええわぬ、結びおかぬ人の契りに、新拾遺、きえわわぶ霜の衣をかへしても、見し夜まれなる夢の通ひち。
きえん 一 奇縁 (名) 思ひがけぬ縁。又、不思議につながらる縁。諸事、げに奇縁ある我れ等かな。松風村雨東帯鑑、三龍女が戀の誠の玉、思ひの玉、奇縁の玉、通ふ心の玉手箱。
きえん 一 機縁 (名) 佛語。衆生の

機縁に、佛の教へを受くべき因縁あること。榮華、東方世界の諸佛の世に出でさせ給ひて、機縁に盡きぬれば必ず滅度に入り給ひて。しほ。
きえん 一 氣愼 (名) 意氣のあがること。いきほひ、氣さき。氣勢。唐書、氣愼其威靈氣愼、有以動、物悟人者、きえん、はんちや、氣愼萬丈、氣愼の盛んなる形容にけいふ語。得意になりきえん、きはく、吐氣愼、得意になりて豪語す。
きえん 一 几筵 (名) つくまに敷きもこと。左傳、園布几筵、告於莊之廟而來。
きえん 一 棄捐 するつること。すてたること。庭園往來、五萬事奉成、父母之思畢。敢以不可被棄捐。戰國策、少棄捐在外、管無師傳、教學、劉向、孟子、荀卿、儒術之士、棄捐於世、財物を投じて、人に恵むこと。施與。江戸時代、幕府より大小以下に貸與せし金穀の返済を免除し、又、一般に、年久しき貸借の権利義務を破棄せしめたること。是れを徳政と稱す。
きえん 一 起縁 (名) 「縁起の字を轉倒したる語。」えんき縁起に同じ。生玉心中、家内に何の怪も無い、きえんの悪い脇指」持統天皇歌、きえんの悪に財產を地つこと。
きえん 一 義捐 慈善又は公益のためため金銭。
きえん 一 稀鹽酸 (名) 【化】多量の水にて稀薄にしたる鹽酸。多くは二倍乃至五倍の水を加ふ。改正日本藥局方にれば、鹽酸一分に蒸留水二分を混合したるもの。
きえん 一 起縁 (名) 「縁起の字を轉倒したる語。」えんき縁起に同じ。生玉心中、家内に何の怪も無い、きえんの悪い脇指」持統天皇歌、きえんの悪に財產を地つこと。
きえん 一 義捐 慈善又は公益のためため金銭。
きえん 一 稀鹽酸 (名) 【化】多量の水にて稀薄にしたる鹽酸。多くは二倍乃至五倍の水を加ふ。改正日本藥局方にれば、鹽酸一分に蒸留水二分を混合したるもの。

起縁直 (名) えんきなほし(縁起直)に同じ。從出、世祖、なほしに酒にせう。
きおも 一 記憶 一旦知覺し、又は經驗したる印象を再び喚起する作用。物事を心に留め忘れざること。おぼえ。ものおぼえ。南史、漢史、多所記憶。
きおも 一 記憶術 (名) 曾て見又は描きたる畫を思ひ出だして描寫する方法。
きおも 一 記憶力 (名) 他の物事に結びつけなどして、記憶に便ならしむる方法。
きおも 一 記憶法 (名) 前條に同じ。
きおも 一 記憶力 (名) 物事を記憶する能力。記憶的作用。
きおも 一 氣後 (自動) 氣勢ひるむ。おちふる。こころ應ず。曾我、扇八景、小わつは風情に止められは、母が勸當氣にかかり、氣おくれたる。故ぞかし。
きおも 一 氣後 (名) 氣後るること。氣おくれたること。
きおも 一 氣落 (名) 力を落とすこと。はりあひの抜くこと。沮喪。落膽。從出、世祖、井筒屋も氣にかかれと、氣落ちさせじと。
きおも 一 杵音 (名) きねにて物を搗く音。推古紀、辨夫止杵、春女不杵。
きおも 一 氣重 (名) 氣力引き立たざるさまなり。氣しづみてあり。取引所の語。相場引き立たずして、ややつれば下落せんとす。
きおも 一 木表 (名) 【建築】板の面の樹心に近き方の稱。其の遠き方を木

きおり 生織 (名) 次條の略。
きおりもの 生織物 (名) 生絲を原料として織りたる絹織物。
きおし 著下 (名) 衣服の著ふるしたるもの(目下)者に與ふる時などにいふ。五人女、きおろしの小袖。
きおん 一 貴恩 (名) 他人より受けたる恩惠の敬稱。御恩。
きおん 一 棄恩 佛語。恩愛を棄てて顧みざること。
きお 一 麾下 (名) 將軍の旗下。はたもと。史記、項王麾下壯士、騎從者八百餘人。特定人の指揮權の下にあるもの。鎮守府、神戶、司令官は天皇に直隸し、麾下の艦隊、艦隊部、團隊を統率し、
きか 一 旗下一 (名) はたした。はたもと。麾下。
きか 一 机下 (名) つくまのした。書簡文に、宛名の脇に書く敬稱。榻下。床下。案下。運歩色藝、机下。
きか 一 季夏 (名) 夏の末。陰曆六月頃。禮記、季夏六月。
きか 一 貴家 (名) 貴き家。他人の家。の尊稱。尊宅。
きか 一 幾何 (名) 【數】きがかく(幾何學)の略。
きか 一 歸家 きたく(歸宅)に同じ。
きか 一 貴下 (代) 對稱の代名詞。主として、同輩に對し、敬語として用ふ。
きか 一 香蘭の宛名の脇に書く語。
きか 一 木香 (名) 酒にうつりたる樟の材の香ひ。
きか 一 喜賀 (名) きのじのいはひ(喜字)に同じ。
きか 一 饑餓 飢餓。うること。

きか 一 嶺巖 (副) 山などの、高く登ゆるさまにいふ語。け高くおごそかなるさまにいふ語。義經記、嶺巖の星物、嶺巖として見えたり。
きかい 一 氣海 (名) 地球を包む空氣の部分に譬へていふ語。漢方醫の語。晴より下部一寸許りの處。
きかい 一 器界 (名) 佛語。きせけん(器世間)に同じ。
きかい 一 器械 (名) うちつはもの。うつは。器具。禮記、器設、戰國策、衣服器械、各便其用。後漢書、内盛日器、外盛日械。次條に同じ。
きかい 一 機械 (名) 機巧を施して動力を發し、種種の仕事に運用する具。からくり。しかけ。他人の爲めに使はれて、機械的動作をなすこと。又、其の人。「人の機械となりて働く」。
きかい 一 規戒 規範・調戒とすること。
きかい 一 氣業 氣概 (名) 氣象の強さをいふ。氣業。北史、故、氣業者、所不重。宋史、賈俊、遇能文、尙氣業。杜甫詩、交親氣業中。
きかい 一 危害 (名) あやぶめ害ふこと。危險。また損害。禍害。韓非子、非難、陳、危殆之事、則顯其毀、非見其合於私患也。生命又は身體を害し、そのなふこと。刑法、天皇太后皇太后、皇太后太子又は皇孫に對し、危害を加へ、又は加へんとしたる者、同皇太子皇族に對し、危害を加へたる者は、死刑に處し、危害を加へんとしたる者は、無期懲役に處す。
きかい 一 義解 意義を解釋すること。

きかい 一 機械編 (名) 機械を用ひて編むこと。又、その編みたるもの。(手編の對)
きかい 一 機械絲 (名) 機械に由りて拵たる絲。
きかい 一 氣界學 (名) きけんがく(氣界學)に同じ。
きかい 一 機械學 (名) 【理】機械の構造に關して研究する學科。其の包含する分科頗る多く、熱機關・水力機關等の研究は其の一分科なり。
きかい 一 機械列 (名) 頭髪を斬る機械にて列り込むこと。
きかい 一 機械口 (名) 機械にて開閉するやうにしたる瓶の口。
きかい 一 機械線 (名) 機械にて糸を織ること。又、其の糸、手織の對。
きかい 一 機械工業 (名) 【理】機械に關する、ことを研究する工業。
きかい 一 機械工業 (名) 機械を使用して營む工業。
きかい 一 機械工場 (名) 機械を製造する工場。
きかい 一 危害罪 (名) 【法】天皇皇后、皇太子、皇孫又は皇族の身體、生命に對し、危害を加へ、又は加へんとしたるによりて成立する犯罪。
きかい 一 機械作用 (名) 機械の運轉。機械が物理的に動力によりて運轉する如く、自己の精神上の活動を加へること。
きかい 一 機械水雷 (名) 水雷の一種。海中に沈め置きて、之に觸接すれば、直に爆發するやうに装置したもの。
きかい 一 機械製絲 (名) 機械に由りて糸を製すること。又、其の絲。
きかい 一 機械體操 (名)

きかい 一 起縁直 (名) えんきなほし(縁起直)に同じ。從出、世祖、なほしに酒にせう。
きおも 一 記憶 一旦知覺し、又は經驗したる印象を再び喚起する作用。物事を心に留め忘れざること。おぼえ。ものおぼえ。南史、漢史、多所記憶。
きおも 一 記憶術 (名) 曾て見又は描きたる畫を思ひ出だして描寫する方法。
きおも 一 記憶力 (名) 他の物事に結びつけなどして、記憶に便ならしむる方法。
きおも 一 記憶法 (名) 前條に同じ。
きおも 一 記憶力 (名) 物事を記憶する能力。記憶的作用。
きおも 一 氣後 (自動) 氣勢ひるむ。おちふる。こころ應ず。曾我、扇八景、小わつは風情に止められは、母が勸當氣にかかり、氣おくれたる。故ぞかし。
きおも 一 氣後 (名) 氣後るること。氣おくれたること。
きおも 一 氣落 (名) 力を落とすこと。はりあひの抜くこと。沮喪。落膽。從出、世祖、井筒屋も氣にかかれと、氣落ちさせじと。
きおも 一 杵音 (名) きねにて物を搗く音。推古紀、辨夫止杵、春女不杵。
きおも 一 氣重 (名) 氣力引き立たざるさまなり。氣しづみてあり。取引所の語。相場引き立たずして、ややつれば下落せんとす。
きおも 一 木表 (名) 【建築】板の面の樹心に近き方の稱。其の遠き方を木

さかひほり 機械掘 (名) 機械を用ひて掘りなどを採掘すること。又、その方法(手掘の対)

さかいゆ 機械油 (名) 機械の摩耗を防ぐために、其のすれあふ部分に塗る油。

さかいりよく 機械力 (名) 〔理〕機械が外より受けたる仕事によりて働き、外に向かひて仕事をなすときに表はす力。時としては、機械の工率をもいふ。

さかき 枳柑 (名) 〔植〕からたち(枸橘)の異名。

さかき 紀綱 (名) (き)紀は小綱、から(綱)は大綱。制度典章。政事の大綱。網紀。書經之註、今夫厥道亂其紀綱、乃底滅亡。

さかき 紀行 (名) 旅行の記。旅日記。道の記。

さかき 奇行 (名) 奇なる行ひ。普通に異なりたる行爲。戰國策、服奇而志淫、是都魯無奇行也。

さかき 奇効 (名) 不思議なる効能。

さかき 奇伴 (名) 意外なる幸ひ。こぼれさいはひ。僥倖。

さかき 機巧 (名) 巧みなる装置。しかげ。工夫。後漢書、衡善機巧、最致思于天文、陰陽、曆算、二種、種才智をめぐらすこと。機巧を弄す。太平記、六、去、機巧は大真に非ず。陸龜蒙詩、人皆機巧求、百運無一達。

さかき 起稿 (名) 草稿を書き始めること。起草。

さかき 寄稿 (名) 草稿を他に寄贈すること。又、其の草稿。投稿。投書。

さかき 寄航 (名) 船舶が、航海の途中、他の港に寄泊すること。明治四十年外務省告示第十三號之三、内地航行中他の條約港に寄航するとき。

さかき 寄港 (名) 前條に同じ。明治四十年外務省告示第十三號之三、免許を得たる汽船は、寄港したる場所又は寄港すべき場所を報告し。

さかき 歸港 (名) 船舶が、出發せる港に歸すること。

さかき 歸航 (名) 船舶の歸路の航海。許法、五、八、雇入港まで歸航するに必要な期間に對する給料。

さかき 歸向 (名) おもむくこと。むかふこと。

さかき 歸耕 (名) 官職などを辭し、郷里に歸りて耕作に従事すること。戰國策、一、虞無爲之事、歸耕乎周之土地、耕而食之、織而衣之。

さかき 歸降 (名) かうさん(降参)に同じ。盛衰記、四、内侍所中、藤原上、歸降。

さかき 歸校 (名) 學校へ歸ること。

さかき 貴幸 (名) 天子の恩寵を蒙ること。史記、六、蕭何爲內史、貴幸用事。

さかき 奇巧 (名) にくすくしたくみなること。莊子、馬、泰至則多奇巧。

さかき 記號 (名) 記號 (名) 文字の他、人の思想を代表せる標章・符號。ふてふ。しるし。刑法、百六、公務所の記號、名稱、表題、蔡憲文、蔡相呂不韋著書、取、月令、爲記號。

さかき 旗號 (名) 旗のしるし。はたしるし。旗章。

さかき 徽號 (名) 前條に同じ。禮記、魚、服色、殊徽號、旌旗之屬、徽之號、如、如之、太白、周之大赤之類也。

さかき 貴號 (名) 榮譽を表はす稱號。即ち學位・爵位の類。舊刑法、三十三、勳章年位記號恩給を有する權。

さかき 鬼號 (名) かみやう(戒名)に同じ。

さかき 揮毫 (名) 書又は畫を書くこと。さかき (名) 僧官。三會(三)の講師を命ぜられて、其の勤めの未だ済まざる間の稱。

さかき 技巧 (名) 細工の上手なること。手藝のたくみ。史記、百、極技巧、通魚鹽、則人物歸之。

さかき 寄稿家 (名) 寄稿をなす人。

さかき 技巧家 (名) 技巧に巧みなる人。

さかき 寄航港 (名) 船舶の寄航する港。

さかき 記號偽造罪 (名) 〔法〕行使の目的にて、公務所の記號を偽造したるにより成立する犯罪。

さかき 記號切手 (名) 〔商〕其の記載金額の正確を保證するため、切手の面に記號せる切手。

さかき 旗號査問 (名) 〔法〕軍艦が公海にて、海賊・密航・禁制品供給等の嫌疑ある船舶を査問すること。さかき (名) 木格子 (名) 木にて造りたる格子。竹格子等の對。

さかき 木格子窓 (名) 木格子を取り附けたる窓(竹格子の窓などの對)

さかき 機巧船 (名) 兵船の一種。厚さ五分の板に布をせ、紙を張り、漆ぬりとし、螺番(ろばん)・漆金(しきん)等にて綴ぎ合はせて船の形となし、ちやん(煙)の厚紙にて被ふ。解きて更(た)め組めば箱となる。昔、三河國の人、伊東伊織始めて作りたりといふ。

さかき 寄港地 (名) 船舶の寄港したる土地。日露通商航海條約、三、寄港地の規則。風虎胎胎(ふうと)免許規則、三、寄港地管轄の警察本分署。

さかき 紀行文 (名) 紀行に關したる文章。

さかき 揮毫料 (名) じゆんびつ(潤筆料)に同じ。

さかき 幾何學 (名) 〔數〕物の形・大き及び位置に關する眞理を攻究する科學。

さかき 幾何學公理 (名) 〔數〕幾何學にのみ用ふる公理。(一)二點を通過して一直線を引くことを得。而して唯一に限る。(二)圓形は其の形及び大きを變ぜずして、位置のみを變ずることを得。(三)全く重ね合はすことを得る圓形は、其の大き相等し。(四)一點を通過して、一直線に平行なる直線は一あり、而して唯一に限る等の類。幾何公理。

さかき 氣掛 (名) 氣にかかると。心がかかり。けん(掛念)。心配。大體狂言・遣りつけた物を遣らねば氣掛りな(國姓爺後日合戦)在所の門出て、血を見ぬも氣がかり。

さかき 動昆蟲類中、雙翅類の一種。蚊に似て大形、全體黃色にして黒斑を有す。夏季、本邦各地に産す。

さかき (名) 古語。さく(掃)に同じ。皇極紀、家外作、城掃、門傍作、兵庫。

さかき (名) 幾何級數 (名) 〔數〕級數にて、相隣れる前後の二項が、常に一定の比をなすもの。例、 $1, 2, 4, 8, 16, \dots$ の如し。其の比を公比・等比などといふ。等比級數。

さかき (名) 規格 (名) 規則と格式と。規定。手続に關する規則。明治三十一年十月勅令第二百二十六號陸軍士官學校條例、三、卒業試験規格。

さかき (名) 軌隔 (名) さかん(軌間)に同じ。

さかき (名) 基客 (名) 基を打つ人。うち。

さかき (名) 寄客 (名) 寄寓して客となること。又、其の人。ささふらふ。食客。

さかき (名) 持角 (名) 持は後尾をとる。かか(角)は前より角をとる義。前後より敵を撃つこと。左傳、公、上、備如捕鹿、晉人角之、諸戎皆之、與、皆持之。雙方對峙すること。各一方に據ること。北史、劉、欲爲持角勢。

さかき (名) 聞 (名) 〔動〕聞くの延。萬夕さらすかはづ鳴くなるみわ川の、清き瀬の音を聞(き)しよしも。古今、五、それだと思ふこととて、我が宿を見せたいひそ、人のさかきに。

さかき (名) 器樂 (名) 樂器のみにて奏する音樂。樂樂の對。

さかき (名) 伎樂 (名) 〔動〕くればく(異樂)に同じ。令義、解、具、伎樂、異。音樂。樂華、諸の菩薩・聖衆・音聲・伎樂をして、喜び迎へたり給ふ。十訓、諸の天女樂樂に乘りて伎樂をなし。法華經、香華伎樂、常以供養。

さかき (名) 妓樂 (名) 妓女の樂舞。孔子家語、齊、君爲國、齊、乎臺榭淫、乎苑圃。

さかき (名) 寄航 (名) 船舶が、航海の途中、他の港に寄泊すること。明治四十年外務省告示第十三號之三、内地航行中他の條約港に寄航するとき。

さかき (名) 寄港 (名) 前條に同じ。明治四十年外務省告示第十三號之三、免許を得たる汽船は、寄港したる場所又は寄港すべき場所を報告し。

さかき (名) 歸港 (名) 船舶が、出發せる港に歸すること。

さかき (名) 歸航 (名) 船舶の歸路の航海。許法、五、八、雇入港まで歸航するに必要な期間に對する給料。

さかき (名) 歸向 (名) おもむくこと。むかふこと。

さかき (名) 歸耕 (名) 官職などを辭し、郷里に歸りて耕作に従事すること。戰國策、一、虞無爲之事、歸耕乎周之土地、耕而食之、織而衣之。

さかき (名) 歸降 (名) かうさん(降参)に同じ。盛衰記、四、内侍所中、藤原上、歸降。

さかき (名) 歸校 (名) 學校へ歸ること。

さかき (名) 貴幸 (名) 天子の恩寵を蒙ること。史記、六、蕭何爲內史、貴幸用事。

さかき (名) 奇巧 (名) にくすくしたくみなること。莊子、馬、泰至則多奇巧。

さかき (名) 記號 (名) 記號 (名) 文字の他、人の思想を代表せる標章・符號。ふてふ。しるし。刑法、百六、公務所の記號、名稱、表題、蔡憲文、蔡相呂不韋著書、取、月令、爲記號。

さかき (名) 旗號 (名) 旗のしるし。はたしるし。旗章。

さかき (名) 徵號 (名) 前條に同じ。禮記、魚、服色、殊徽號、旌旗之屬、徽之號、如、如之、太白、周之大赤之類也。

さかき (名) 貴號 (名) 榮譽を表はす稱號。即ち學位・爵位の類。舊刑法、三十三、勳章年位記號恩給を有する權。

さかき (名) 鬼號 (名) かみやう(戒名)に同じ。

さかき (名) 揮毫 (名) 書又は畫を書くこと。さかき (名) 僧官。三會(三)の講師を命ぜられて、其の勤めの未だ済まざる間の稱。

さかき (名) 技巧 (名) 細工の上手なること。手藝のたくみ。史記、百、極技巧、通魚鹽、則人物歸之。

さかき (名) 寄稿家 (名) 寄稿をなす人。

さかき (名) 技巧家 (名) 技巧に巧みなる人。

さかき (名) 寄航港 (名) 船舶の寄航する港。

さかき (名) 記號偽造罪 (名) 〔法〕行使の目的にて、公務所の記號を偽造したるにより成立する犯罪。

さかき (名) 記號切手 (名) 〔商〕其の記載金額の正確を保證するため、切手の面に記號せる切手。

さかき (名) 旗號査問 (名) 〔法〕軍艦が公海にて、海賊・密航・禁制品供給等の嫌疑ある船舶を査問すること。さかき (名) 木格子 (名) 木にて造りたる格子。竹格子等の對。

さかき (名) 木格子窓 (名) 木格子を取り附けたる窓(竹格子の窓などの對)

さかき (名) 機巧船 (名) 兵船の一種。厚さ五分の板に布をせ、紙を張り、漆ぬりとし、螺番(ろばん)・漆金(しきん)等にて綴ぎ合はせて船の形となし、ちやん(煙)の厚紙にて被ふ。解きて更(た)め組めば箱となる。昔、三河國の人、伊東伊織始めて作りたりといふ。

さかき (名) 寄港地 (名) 船舶の寄港したる土地。日露通商航海條約、三、寄港地の規則。風虎胎胎(ふうと)免許規則、三、寄港地管轄の警察本分署。

さかき (名) 紀行文 (名) 紀行に關したる文章。

さかき (名) 揮毫料 (名) じゆんびつ(潤筆料)に同じ。

さかき (名) 幾何學 (名) 〔數〕物の形・大き及び位置に關する眞理を攻究する科學。

さかき (名) 幾何學公理 (名) 〔數〕幾何學にのみ用ふる公理。(一)二點を通過して一直線を引くことを得。而して唯一に限る。(二)圓形は其の形及び大きを變ぜずして、位置のみを變ずることを得。(三)全く重ね合はすことを得る圓形は、其の大き相等し。(四)一點を通過して、一直線に平行なる直線は一あり、而して唯一に限る等の類。幾何公理。

さかき (名) 氣掛 (名) 氣にかかると。心がかかり。けん(掛念)。心配。大體狂言・遣りつけた物を遣らねば氣掛りな(國姓爺後日合戦)在所の門出て、血を見ぬも氣がかり。

さかき (名) 動昆蟲類中、雙翅類の一種。蚊に似て大形、全體黃色にして黒斑を有す。夏季、本邦各地に産す。

さかき (名) 幾何中項 (名) 〔數〕三つの數が幾何級數をなすとき、他の二の數に對する中間の數。等比中項。幾何平均。相乘平均。比例中項。

さかき (名) 飢渴 饑渴 (名) 又、渴(さか)く。飲食物の缺乏すること。太平記、十六、朝の食飢渴して、夜の寐覺め蒼蒼たり。時經、君子、夜、荷、飢渴。史記、百、知、善水草之虞、車得、以、無、飢渴。足動物、蜘蛛類の目。腹部は廣闊にして十節乃至十一節なり成り、頭胸部には往々二條の横溝あり。絲腺を有し、氣管を以て呼吸を營む。あとびさりの類これに屬す。

さかき (名) 句 (名) やくたいなしをいふ、南部の方言。

さかき (名) 生金巾 (名) 金巾の名。白色の薄地の綿布にして、まだ晒さざるもの。

さかき (名) 不開顔 (名) 開かぬ様子。開かぬふり。枕、耳な草中、うべなり、さかぬはなるはなど笑ふに。源、松の下紅葉など、香にのみ秋をさかぬがほなり。

さかき (名) 黃金 (名) こがね(黄金)に同じ。名義抄、金、黄金。

さかき (名) 氣兼 (名) 他に對して、氣をかけること。こころづかひ。きぐらう。きくぱり。遠慮。傾城酒童子、親方と思ひ、氣兼は無用。

さかき (名) 木尺 木矩 (名) 表具屋の用ふる木の定木。模様のゆがめるや否やを検するに用ふ。

さかき (名) ふいご(種)に同じ。字鏡集、輪、ふいご。

さかき (名) 著重 (名) 衣類など、一句の内に、同じ季節の景物二つ以上あること。

さかき (名) 來懸 (名) くるとき。くるついで。くるみち。

さかき (名) 幾何公理 (名) 〔數〕さかき (名) 幾何學公理に同じ。

さかき (名) 氣高 (名) 負けぬ氣。かちさかき (名) 季重 (名) 俳諧の語。一句の内に、同じ季節の景物二つ以上あること。

さかき (名) 著重 (名) 衣類など、一句の内に、同じ季節の景物二つ以上あること。

さかき (名) 不開顔 (名) 開かぬ様子。開かぬふり。枕、耳な草中、うべなり、さかぬはなるはなど笑ふに。源、松の下紅葉など、香にのみ秋をさかぬがほなり。

さかき (名) 氣高 (名) 負けぬ氣。かちさかき (名) 季重 (名) 俳諧の語。一句の内に、同じ季節の景物二つ以上あること。

さかき (名) 著重 (名) 衣類など、一句の内に、同じ季節の景物二つ以上あること。

さかは 黄皮 橘皮 (名) 橘の實の皮。きざみて料理に用ふ。和名甘皮。本草云、橘皮。一名、甘皮。一名、義抄。橘皮。一名、厨事類記。海月。中きさみ物に入るべし。きかはとて、橘皮をもさす也。

さかふ 著被 (名) 著ること、かぶること。服装。又、著替 (名) 着替る事。きかふ事。其のために備へ置く服。宇治拾遺抄「きかふ取り着せてきかへて」雅亮装束抄「七月七日より、きかへす」

さか 生紙 (名) 糊か加へずして漉したる紙。黄紙 (名) 江戸時代、裁判官より老中の指押を仰ぐ書。張紙の黄色なるを以て名づく。

すくしたる醬油、又はこれに酒など加へて炊きたる飯。其の色の黄枯茶なるよりいふ。茶飯。

さかはら 木瓦 (名) 木にて、瓦の如く製したるもの。

さかへい 著替 (名) 著替る事。きかふ事。其のために備へ置く服。宇治拾遺抄「きかふ取り着せてきかへて」雅亮装束抄「七月七日より、きかへす」

さか 生紙 (名) 糊か加へずして漉したる紙。黄紙 (名) 江戸時代、裁判官より老中の指押を仰ぐ書。張紙の黄色なるを以て名づく。

すくしたる醬油、又はこれに酒など加へて炊きたる飯。其の色の黄枯茶なるよりいふ。茶飯。

さかはらけ 黄川原毛 黄土器毛 (名) 馬の毛色。川原毛の黄はみたるもの。保元平治の戦い、黄土器なる馬に、具鞍置いて乗ったる者が、同白河院「二所條の弓持て黄土器なる馬に乗り」黄枯。

さかへい 著替 (名) 著替る事。きかふ事。其のために備へ置く服。宇治拾遺抄「きかふ取り着せてきかへて」雅亮装束抄「七月七日より、きかへす」

さか 生紙 (名) 糊か加へずして漉したる紙。黄紙 (名) 江戸時代、裁判官より老中の指押を仰ぐ書。張紙の黄色なるを以て名づく。

すくしたる醬油、又はこれに酒など加へて炊きたる飯。其の色の黄枯茶なるよりいふ。茶飯。

さか 著替 (他動) 取り替へて著る。更衣。源氏物語「へんの御ぞほころびたる。きかへなどし給ひても」

さかへい 著替 (名) 著替る事。きかふ事。其のために備へ置く服。宇治拾遺抄「きかふ取り着せてきかへて」雅亮装束抄「七月七日より、きかへす」

さか 生紙 (名) 糊か加へずして漉したる紙。黄紙 (名) 江戸時代、裁判官より老中の指押を仰ぐ書。張紙の黄色なるを以て名づく。

すくしたる醬油、又はこれに酒など加へて炊きたる飯。其の色の黄枯茶なるよりいふ。茶飯。

さか 錯 (自動) 古語。きりり合ふ。すれあふ。當たりあふ。祝詞式「御事無事。柱・梁・戸・欄乃錯比」

さかへい 著替 (名) 著替る事。きかふ事。其のために備へ置く服。宇治拾遺抄「きかふ取り着せてきかへて」雅亮装束抄「七月七日より、きかへす」

さか 生紙 (名) 糊か加へずして漉したる紙。黄紙 (名) 江戸時代、裁判官より老中の指押を仰ぐ書。張紙の黄色なるを以て名づく。

すくしたる醬油、又はこれに酒など加へて炊きたる飯。其の色の黄枯茶なるよりいふ。茶飯。

さか 柵養 (他動) 古語。柵の中に、存囚などを養ひ置く。齊明紀「柵養に、蝦夷」

さかへい 著替 (名) 著替る事。きかふ事。其のために備へ置く服。宇治拾遺抄「きかふ取り着せてきかへて」雅亮装束抄「七月七日より、きかへす」

さか 生紙 (名) 糊か加へずして漉したる紙。黄紙 (名) 江戸時代、裁判官より老中の指押を仰ぐ書。張紙の黄色なるを以て名づく。

すくしたる醬油、又はこれに酒など加へて炊きたる飯。其の色の黄枯茶なるよりいふ。茶飯。

さか 著替 (他動) 取り替へて著る。更衣。源氏物語「へんの御ぞほころびたる。きかへなどし給ひても」

さかへい 著替 (名) 著替る事。きかふ事。其のために備へ置く服。宇治拾遺抄「きかふ取り着せてきかへて」雅亮装束抄「七月七日より、きかへす」

さか 生紙 (名) 糊か加へずして漉したる紙。黄紙 (名) 江戸時代、裁判官より老中の指押を仰ぐ書。張紙の黄色なるを以て名づく。

すくしたる醬油、又はこれに酒など加へて炊きたる飯。其の色の黄枯茶なるよりいふ。茶飯。

さか 錯 (自動) 古語。きりり合ふ。すれあふ。當たりあふ。祝詞式「御事無事。柱・梁・戸・欄乃錯比」

さかへい 著替 (名) 著替る事。きかふ事。其のために備へ置く服。宇治拾遺抄「きかふ取り着せてきかへて」雅亮装束抄「七月七日より、きかへす」

さか 生紙 (名) 糊か加へずして漉したる紙。黄紙 (名) 江戸時代、裁判官より老中の指押を仰ぐ書。張紙の黄色なるを以て名づく。

すくしたる醬油、又はこれに酒など加へて炊きたる飯。其の色の黄枯茶なるよりいふ。茶飯。

さか 柵養 (他動) 古語。柵の中に、存囚などを養ひ置く。齊明紀「柵養に、蝦夷」

さかへい 著替 (名) 著替る事。きかふ事。其のために備へ置く服。宇治拾遺抄「きかふ取り着せてきかへて」雅亮装束抄「七月七日より、きかへす」

さか 生紙 (名) 糊か加へずして漉したる紙。黄紙 (名) 江戸時代、裁判官より老中の指押を仰ぐ書。張紙の黄色なるを以て名づく。

すくしたる醬油、又はこれに酒など加へて炊きたる飯。其の色の黄枯茶なるよりいふ。茶飯。

さか 著替 (他動) 取り替へて著る。更衣。源氏物語「へんの御ぞほころびたる。きかへなどし給ひても」

さかへい 著替 (名) 著替る事。きかふ事。其のために備へ置く服。宇治拾遺抄「きかふ取り着せてきかへて」雅亮装束抄「七月七日より、きかへす」

さか 生紙 (名) 糊か加へずして漉したる紙。黄紙 (名) 江戸時代、裁判官より老中の指押を仰ぐ書。張紙の黄色なるを以て名づく。

すくしたる醬油、又はこれに酒など加へて炊きたる飯。其の色の黄枯茶なるよりいふ。茶飯。

さか 錯 (自動) 古語。きりり合ふ。すれあふ。當たりあふ。祝詞式「御事無事。柱・梁・戸・欄乃錯比」

さかへい 著替 (名) 著替る事。きかふ事。其のために備へ置く服。宇治拾遺抄「きかふ取り着せてきかへて」雅亮装束抄「七月七日より、きかへす」

さか 生紙 (名) 糊か加へずして漉したる紙。黄紙 (名) 江戸時代、裁判官より老中の指押を仰ぐ書。張紙の黄色なるを以て名づく。

すくしたる醬油、又はこれに酒など加へて炊きたる飯。其の色の黄枯茶なるよりいふ。茶飯。

さか 柵養 (他動) 古語。柵の中に、存囚などを養ひ置く。齊明紀「柵養に、蝦夷」

さかへい 著替 (名) 著替る事。きかふ事。其のために備へ置く服。宇治拾遺抄「きかふ取り着せてきかへて」雅亮装束抄「七月七日より、きかへす」

さか 生紙 (名) 糊か加へずして漉したる紙。黄紙 (名) 江戸時代、裁判官より老中の指押を仰ぐ書。張紙の黄色なるを以て名づく。

すくしたる醬油、又はこれに酒など加へて炊きたる飯。其の色の黄枯茶なるよりいふ。茶飯。

さか 著替 (他動) 取り替へて著る。更衣。源氏物語「へんの御ぞほころびたる。きかへなどし給ひても」

さかへい 著替 (名) 著替る事。きかふ事。其のために備へ置く服。宇治拾遺抄「きかふ取り着せてきかへて」雅亮装束抄「七月七日より、きかへす」

さか 生紙 (名) 糊か加へずして漉したる紙。黄紙 (名) 江戸時代、裁判官より老中の指押を仰ぐ書。張紙の黄色なるを以て名づく。

すくしたる醬油、又はこれに酒など加へて炊きたる飯。其の色の黄枯茶なるよりいふ。茶飯。

さか 錯 (自動) 古語。きりり合ふ。すれあふ。當たりあふ。祝詞式「御事無事。柱・梁・戸・欄乃錯比」

さかへい 著替 (名) 著替る事。きかふ事。其のために備へ置く服。宇治拾遺抄「きかふ取り着せてきかへて」雅亮装束抄「七月七日より、きかへす」

さか 生紙 (名) 糊か加へずして漉したる紙。黄紙 (名) 江戸時代、裁判官より老中の指押を仰ぐ書。張紙の黄色なるを以て名づく。

すくしたる醬油、又はこれに酒など加へて炊きたる飯。其の色の黄枯茶なるよりいふ。茶飯。

容易くは解し難き俳句。ききほつ。
黄菊(名) 黄色の花を
開く。...

利駒(名) 将棋にて、金将
銀將など有力なるききめある駒。
開込(他動) 聞き知る。

開上手の話を下手 人 談話を聞くに
巧みな人は自ら語る。拙きこと。
開知顔(名) 聞きし

開初(他動) はじめて聞
く。後撰集に「ききつかなる音をき
きそめて、あらぬもれとおぼめかれつ

開度(名) 聞ききたが
り。新大橋「我が宿をきたが(て)ぞき
たらん、あるべきもか今朝の玉づき」

開茶(名) かぎちや(喫茶)
に同じ。
開賃(名) 話を聞くだけ

開傳(他動) 人づてに
開く。つたなく。傳開す。源朝平「き
きそめて、あらぬもれとおぼめかれつ

開所(名) ききとこ
。源朝平「ききとこある。世のものがたりなどし
て、おとどの君の御ありさま、世にかしつ

開

開

開

開

1057

きくあざみ (名) 〔植〕菊科、泥胡菜の多年生草本。莖の高さ二三尺。葉は廣卵形、鋭頭、缺刻及び鋸齒ありて、稍きくに類す。秋季、淡紅紫色の花を開き、頭狀花序に排列す。我が國、各地の山地に自生す。いたちあざみ。ちやうじひごたひ。ひごたひもどき。みかはあざみ。

きくあはせ 菊合 (名) 人数を左右に番ひ、雙方より菊花を出だし、歌などを附けて、優劣を争ふ遊戯。古今和上寛平の御時中御時せられける菊合せに榮華殿中宮には前裁合せ、菊合せなどせさせ給ひて、をかしき事多かり。

きくいし 〔鞠育〕 (名) 〔鞠〕は養ふ義、やうい (養育) に同じ。詩經ハ鳥父兮生我、母兮鞠我中長我育我。

きくいし 菊石 (名) 菊の花の如き模様ある化石などの總稱。

きくいし 菊石昆布 (名) 〔植〕藻類中、褐色藻類の一種。根は絲狀をなし、これに分岐せる莖を具ふ。葉は扇形にして小孔あり。全株の長さ一二尺乃至四五尺に達す。本邦、千島の沿海潮線附近の岩石上に自生す。きくめい、いしこんぶ。

きくいたたき 菊戴 (名) 〔動〕鳥類中、燕類の一種。體甚だ小なる鳥。體は上面灰綠色を帯び、下面は白色なり。翼には白點を交し、頭上には黄色の羽毛簇生し、其の狀菊の花に似たるを以て此の名あり。本邦、各地に産す。銀歌加留多鳥、菊いたたきが菊のませ垣。

きくいはひ 菊祝 (名) 菊の節句、即ち九月九日のいひ。



(きくいたたき)

きくいばら (名) 〔植〕とんいばら、茶花をいふ、西國の方言。植物。

きくいも (名) 〔植〕菊科、向日莖の多年生草本。地下に塊莖を有す。地上莖はよく七八尺を越ゆるものあり。葉は長橢圓形、鋸齒を有す。花は黄色にして、大なる頭狀花序に排列し、夏秋の間に栽培せらる。塊莖は食用となる。いつきしやういも。

きくいり 奇偶 (名) 奇と偶と。奇數と偶數と。

きくいり 奇遇 不思議なる會合。思ひ設けぬてあり。

きくいり 寄寓 身を他處に寄すること。かりすまひ。寓居。又、其の人。國語「司里不授館、國無寄寓」韓非子「寄寓」正戸寄寓寄寓。

きくいり 一騎當千 たびすまひすること。たびすまひの異名。

きくいり 一騎當千 (名) 〔植〕こごめうつぎの異名。

きくいり 一騎當千 (名) 〔植〕あきのきりんさう二枝黄花の異名。

きくいり 一騎當千 (名) 〔植〕わうれん (黃蓮) の異名。

きくいり 一騎當千 (名) 〔動〕きくがしら菊頭の異名。

きくいり 一騎當千 (名) 〔動〕きくがしら菊頭の異名。

きくいり 一騎當千 (名) 〔動〕きくがしら菊頭の異名。

きくがしら 菊頭 (名) 〔動〕哺乳類中、翼手類の一種。全形他のかうもり類と同一なれども、鼻孔の周圍に異なり、皮膚突起物を有するを特徴とす。本邦に産し、歐亞大陸にも廣まれり。きくかうもり。

きくがた 菊形 (名) 〔動〕菊の花のかたち。きくがたに同じ。

きくがたりんぼう 菊形輪鋒 (名) 紋所の名。りんぼう (輪鋒) を見よ。

きくがね 菊金 (名) 銚子の柄にある星。其の上に菊の花の紋ある故に名づく。貞正。

きくがばら 菊瓦 (名) 菊の紋の附きたる瓦瓦。主として大棟の飾りに用ふ。

きくがめ 菊瓶 (名) 古貴、禁中重陽の宴に菊花を挿して御前に置く花瓶。

きくがら 菊唐草 (名) 〔植〕ほろきく (鐵線蓮) の異名。〔植〕ほろきく (鐵線蓮) の異名。菊花を唐草模様にしたるもの。相國寺供養記「頭左大辨齊應朝臣唐草唐草」故實拾要「御下製唐草唐草唐草唐草」。

きくがら 菊竹 (名) 木にて作りたる釘。金釘、竹釘などの對、和名竹釘。四聲字苑云「松竹菊梅」江次第七「竹釘」木面、以銀鍍之、以木釘指之。

きくがら 菊竹 (名) 物の節目などの、折れ曲がるさまに、いふ。

きくがら 菊竹 (名) 前後に同じ。〔言〕語、動作など、圓滑ならざるさまにいふ。

きくがら 菊竹 (名) 〔動〕はかがむ。身をかがめ、つし、み畏まること。論語「入公門、鞠躬如也、如不容」後漢書「李膺拜司隸校尉、捕張讓弟朝」。

きくがら 菊竹 (名) 〔動〕はかがむ。身をかがめ、つし、み畏まること。論語「入公門、鞠躬如也、如不容」後漢書「李膺拜司隸校尉、捕張讓弟朝」。

きくがら 菊竹 (名) 〔動〕はかがむ。身をかがめ、つし、み畏まること。論語「入公門、鞠躬如也、如不容」後漢書「李膺拜司隸校尉、捕張讓弟朝」。

きくがら 菊竹 (名) 〔動〕はかがむ。身をかがめ、つし、み畏まること。論語「入公門、鞠躬如也、如不容」後漢書「李膺拜司隸校尉、捕張讓弟朝」。

きくがら 菊竹 (名) 〔動〕はかがむ。身をかがめ、つし、み畏まること。論語「入公門、鞠躬如也、如不容」後漢書「李膺拜司隸校尉、捕張讓弟朝」。

きくがら 菊竹 (名) 〔動〕はかがむ。身をかがめ、つし、み畏まること。論語「入公門、鞠躬如也、如不容」後漢書「李膺拜司隸校尉、捕張讓弟朝」。

きくがら 菊竹 (名) 〔動〕はかがむ。身をかがめ、つし、み畏まること。論語「入公門、鞠躬如也、如不容」後漢書「李膺拜司隸校尉、捕張讓弟朝」。

きくわかしやうびざり 菊花章頭飾 (名) 大勳位に敘せられたる者に特別に賜ふ頭飾。明治二十一年勳章第一號「大勳位菊花章頭飾」同年勳令第二十一號「大勳位菊花章頭飾」。

きくわかしやう 菊花大綬章 (名) 大勳位に叙せられたる者に賜ふ勳章。明治十年十二月第九十七號達「菊花大綬章」。

きくわかしやう 菊花大綬章 (名) 大勳位に叙せられたる者に賜ふ勳章。明治十年十二月第九十七號達「菊花大綬章」。

きくわかしやう 菊花大綬章 (名) 大勳位に叙せられたる者に賜ふ勳章。明治十年十二月第九十七號達「菊花大綬章」。

きくわかしやう 菊花大綬章 (名) 大勳位に叙せられたる者に賜ふ勳章。明治十年十二月第九十七號達「菊花大綬章」。

きくわかしやう 菊花大綬章 (名) 大勳位に叙せられたる者に賜ふ勳章。明治十年十二月第九十七號達「菊花大綬章」。

きくわかしやう 菊花大綬章 (名) 大勳位に叙せられたる者に賜ふ勳章。明治十年十二月第九十七號達「菊花大綬章」。

きくわかしやう 菊花大綬章 (名) 大勳位に叙せられたる者に賜ふ勳章。明治十年十二月第九十七號達「菊花大綬章」。

きくわかしやう 菊花大綬章 (名) 大勳位に叙せられたる者に賜ふ勳章。明治十年十二月第九十七號達「菊花大綬章」。

きくわかしやう 菊花大綬章 (名) 大勳位に叙せられたる者に賜ふ勳章。明治十年十二月第九十七號達「菊花大綬章」。

きくわかしやう 菊花大綬章 (名) 大勳位に叙せられたる者に賜ふ勳章。明治十年十二月第九十七號達「菊花大綬章」。

きくわかしやう 菊花大綬章 (名) 大勳位に叙せられたる者に賜ふ勳章。明治十年十二月第九十七號達「菊花大綬章」。

きくわかしやう 菊花大綬章 (名) 大勳位に叙せられたる者に賜ふ勳章。明治十年十二月第九十七號達「菊花大綬章」。

きくわかしやう 菊花大綬章 (名) 大勳位に叙せられたる者に賜ふ勳章。明治十年十二月第九十七號達「菊花大綬章」。

きくわかしやう 菊花大綬章 (名) 大勳位に叙せられたる者に賜ふ勳章。明治十年十二月第九十七號達「菊花大綬章」。

きくわかしやう 菊花大綬章 (名) 大勳位に叙せられたる者に賜ふ勳章。明治十年十二月第九十七號達「菊花大綬章」。

きくわかしやう 菊花大綬章 (名) 大勳位に叙せられたる者に賜ふ勳章。明治十年十二月第九十七號達「菊花大綬章」。

きくわかしやう 菊花大綬章 (名) 大勳位に叙せられたる者に賜ふ勳章。明治十年十二月第九十七號達「菊花大綬章」。

きくわかしやう 菊花大綬章 (名) 大勳位に叙せられたる者に賜ふ勳章。明治十年十二月第九十七號達「菊花大綬章」。

きくわかしやう 菊花大綬章 (名) 大勳位に叙せられたる者に賜ふ勳章。明治十年十二月第九十七號達「菊花大綬章」。

きくわかしやう 菊花大綬章 (名) 大勳位に叙せられたる者に賜ふ勳章。明治十年十二月第九十七號達「菊花大綬章」。

きくわかしやう 菊花大綬章 (名) 大勳位に叙せられたる者に賜ふ勳章。明治十年十二月第九十七號達「菊花大綬章」。

きくわかしやう 菊花大綬章 (名) 大勳位に叙せられたる者に賜ふ勳章。明治十年十二月第九十七號達「菊花大綬章」。

きくわかしやう 菊花大綬章 (名) 大勳位に叙せられたる者に賜ふ勳章。明治十年十二月第九十七號達「菊花大綬章」。

きくわかしやう 菊花大綬章 (名) 大勳位に叙せられたる者に賜ふ勳章。明治十年十二月第九十七號達「菊花大綬章」。

きくわかしやう 菊花大綬章 (名) 大勳位に叙せられたる者に賜ふ勳章。明治十年十二月第九十七號達「菊花大綬章」。

に産す。東海道名所記「薬師如来中門の御體は、金輪際よりはえ出でたる菊面石なり」

きんせも (名) 〔植〕玄參科、きくも屬の草本。莖の高さ三四寸乃至尺許に達す。葉は輪生にして三葉乃至六葉より成り、各葉は羽状に淺裂すれども、大小・形状等しからず。沈水葉は細絲状をなす。夏日、淡紅紫色の唇形花を葉腋に開き、無柄なり。我が國、各地の水田・池沼等に自生す。きつねの毛。

きんせも (名) 〔鞠問〕罪狀をしらぶること。鞠訊。

きんせや 菊屋 (名) 菊花を賣る家。又、其の人。又、其れを賣る店。

きんせや 木具屋 (名) 木具を造るを業とする人。又、其れを賣る店。

きんせやう 鞠養 (名) そだてやしなふこと。鞠育。

きんせやう (名) 〔植〕いぬよもぎ(菴闍)の異名。〔し〕たんよもぎの異名。

きんせう 木蔵 (名) 材木を容れ置く蔵。唐船新國姓爺(雜藏・木藏)残らず餘さずがせども。

きんせう (名) 〔氣〕苦勞 (名) 精神上の苦痛。心配。博多小女郎波枕(氣苦勞)の顔色ぢや。

きんせう (名) 氣苦勞 (名) きくらうなること。きくらうなる度合。大織冠(見せまい知らすまい、隠さうとする氣苦勞)。

きんせう 木耳 (名) 〔植〕擔子菌類、木耳屬の菌類。太さ二三寸。全形扁圓にしてやや入耳に似、膠質なり。これ此の菌の生殖器なり。我が國、各地の山中の朽木、殊に接骨木(桑)等に寄生す。之を採り乾かして食用となす。きのた

け。きのみみ。日本振袖始「耳はきくらげ」(みみ)を嘲りいふ語。

きんせいの (名) 氣位 (名) 心の持ち方。氣のかまへ方。氣品。

きんせいの (名) 鞠 (名) 物の折れ曲がるさまに喩ふ語。鞠(て)自れ自ら答むるさま、不意に驚きて行きつまるさまに喩ふ語。

きんせいの (名) 鞠 (名) きくら(鞠)に同じ。

きんせいの (名) 菊輪葵 (名) 紋所の名。菊の花の内に葵の紋を描けるもの。

きんせいの (名) 菊輪葵 (名) 紋所の名。菊の花の内に葵の紋を描けるもの。

きんせいの (名) 菊輪葵 (名) 紋所の名。菊の花の内に葵の紋を描けるもの。

きんせいの (名) 菊輪葵 (名) 紋所の名。菊の花の内に葵の紋を描けるもの。

きんせいの (名) 菊輪葵 (名) 紋所の名。菊の花の内に葵の紋を描けるもの。

きんせいの (名) 菊輪葵 (名) 紋所の名。菊の花の内に葵の紋を描けるもの。

きんせいの (名) 菊輪葵 (名) 紋所の名。菊の花の内に葵の紋を描けるもの。

きんせいの (名) 菊輪葵 (名) 紋所の名。菊の花の内に葵の紋を描けるもの。

きんせいの (名) 菊輪葵 (名) 紋所の名。菊の花の内に葵の紋を描けるもの。

きんせいの (名) 菊輪葵 (名) 紋所の名。菊の花の内に葵の紋を描けるもの。

きんせいの (名) 菊輪葵 (名) 紋所の名。菊の花の内に葵の紋を描けるもの。

きんせいの (名) 菊輪葵 (名) 紋所の名。菊の花の内に葵の紋を描けるもの。

きんせいの (名) 菊輪葵 (名) 紋所の名。菊の花の内に葵の紋を描けるもの。

きんせいの (名) 菊輪葵 (名) 紋所の名。菊の花の内に葵の紋を描けるもの。

きんせいの (名) 菊輪葵 (名) 紋所の名。菊の花の内に葵の紋を描けるもの。

きんせいの (名) 菊輪葵 (名) 紋所の名。菊の花の内に葵の紋を描けるもの。

きんせいの (名) 菊輪葵 (名) 紋所の名。菊の花の内に葵の紋を描けるもの。

きんせいの (名) 菊輪葵 (名) 紋所の名。菊の花の内に葵の紋を描けるもの。

きんせいの (名) 菊輪葵 (名) 紋所の名。菊の花の内に葵の紋を描けるもの。

きんせいの (名) 菊輪葵 (名) 紋所の名。菊の花の内に葵の紋を描けるもの。

きんせいの (名) 菊輪葵 (名) 紋所の名。菊の花の内に葵の紋を描けるもの。

きんせいの (名) 菊輪葵 (名) 紋所の名。菊の花の内に葵の紋を描けるもの。

きんせいの (名) 菊輪葵 (名) 紋所の名。菊の花の内に葵の紋を描けるもの。

きんせいの (名) 菊輪葵 (名) 紋所の名。菊の花の内に葵の紋を描けるもの。

きんせいの (名) 菊輪葵 (名) 紋所の名。菊の花の内に葵の紋を描けるもの。

明如火而非火

きんせいの (名) 菊輪葵 (名) 紋所の名。菊の花の内に葵の紋を描けるもの。

きんせいの (名) 菊輪葵 (名) 紋所の名。菊の花の内に葵の紋を描けるもの。

きんせいの (名) 菊輪葵 (名) 紋所の名。菊の花の内に葵の紋を描けるもの。

きんせいの (名) 菊輪葵 (名) 紋所の名。菊の花の内に葵の紋を描けるもの。

きんせいの (名) 菊輪葵 (名) 紋所の名。菊の花の内に葵の紋を描けるもの。

きんせいの (名) 菊輪葵 (名) 紋所の名。菊の花の内に葵の紋を描けるもの。

きんせいの (名) 菊輪葵 (名) 紋所の名。菊の花の内に葵の紋を描けるもの。

きんせいの (名) 菊輪葵 (名) 紋所の名。菊の花の内に葵の紋を描けるもの。

きんせいの (名) 菊輪葵 (名) 紋所の名。菊の花の内に葵の紋を描けるもの。

きんせいの (名) 菊輪葵 (名) 紋所の名。菊の花の内に葵の紋を描けるもの。

きんせいの (名) 菊輪葵 (名) 紋所の名。菊の花の内に葵の紋を描けるもの。

きんせいの (名) 菊輪葵 (名) 紋所の名。菊の花の内に葵の紋を描けるもの。

きんせいの (名) 菊輪葵 (名) 紋所の名。菊の花の内に葵の紋を描けるもの。

きんせいの (名) 菊輪葵 (名) 紋所の名。菊の花の内に葵の紋を描けるもの。

きんせいの (名) 菊輪葵 (名) 紋所の名。菊の花の内に葵の紋を描けるもの。

きんせいの (名) 菊輪葵 (名) 紋所の名。菊の花の内に葵の紋を描けるもの。

きんせいの (名) 菊輪葵 (名) 紋所の名。菊の花の内に葵の紋を描けるもの。

きんせいの (名) 菊輪葵 (名) 紋所の名。菊の花の内に葵の紋を描けるもの。

きんせいの (名) 菊輪葵 (名) 紋所の名。菊の花の内に葵の紋を描けるもの。

きんせいの (名) 菊輪葵 (名) 紋所の名。菊の花の内に葵の紋を描けるもの。

きんせいの (名) 菊輪葵 (名) 紋所の名。菊の花の内に葵の紋を描けるもの。

きんせいの (名) 菊輪葵 (名) 紋所の名。菊の花の内に葵の紋を描けるもの。

きんせいの (名) 菊輪葵 (名) 紋所の名。菊の花の内に葵の紋を描けるもの。

きんせいの (名) 菊輪葵 (名) 紋所の名。菊の花の内に葵の紋を描けるもの。

きんせいの (名) 菊輪葵 (名) 紋所の名。菊の花の内に葵の紋を描けるもの。

きんせいの (名) 菊輪葵 (名) 紋所の名。菊の花の内に葵の紋を描けるもの。

きんせいの (名) 菊輪葵 (名) 紋所の名。菊の花の内に葵の紋を描けるもの。

きんせいの (名) 菊輪葵 (名) 紋所の名。菊の花の内に葵の紋を描けるもの。

り。はづみ。まきは。まあひ。唐書「疾徐失宜則機會不及、機會不及則氣勢自衰」

きんせいの (名) 菊輪葵 (名) 紋所の名。菊の花の内に葵の紋を描けるもの。

きんせいの (名) 菊輪葵 (名) 紋所の名。菊の花の内に葵の紋を描けるもの。

きんせいの (名) 菊輪葵 (名) 紋所の名。菊の花の内に葵の紋を描けるもの。

きんせいの (名) 菊輪葵 (名) 紋所の名。菊の花の内に葵の紋を描けるもの。

きんせいの (名) 菊輪葵 (名) 紋所の名。菊の花の内に葵の紋を描けるもの。

きんせいの (名) 菊輪葵 (名) 紋所の名。菊の花の内に葵の紋を描けるもの。

きんせいの (名) 菊輪葵 (名) 紋所の名。菊の花の内に葵の紋を描けるもの。

きんせいの (名) 菊輪葵 (名) 紋所の名。菊の花の内に葵の紋を描けるもの。

きんせいの (名) 菊輪葵 (名) 紋所の名。菊の花の内に葵の紋を描けるもの。

きんせいの (名) 菊輪葵 (名) 紋所の名。菊の花の内に葵の紋を描けるもの。

きんせいの (名) 菊輪葵 (名) 紋所の名。菊の花の内に葵の紋を描けるもの。

きんせいの (名) 菊輪葵 (名) 紋所の名。菊の花の内に葵の紋を描けるもの。

きんせいの (名) 菊輪葵 (名) 紋所の名。菊の花の内に葵の紋を描けるもの。

きんせいの (名) 菊輪葵 (名) 紋所の名。菊の花の内に葵の紋を描けるもの。

きんせいの (名) 菊輪葵 (名) 紋所の名。菊の花の内に葵の紋を描けるもの。

きんせいの (名) 菊輪葵 (名) 紋所の名。菊の花の内に葵の紋を描けるもの。

きんせいの (名) 菊輪葵 (名) 紋所の名。菊の花の内に葵の紋を描けるもの。

きんせいの (名) 菊輪葵 (名) 紋所の名。菊の花の内に葵の紋を描けるもの。

きんせいの (名) 菊輪葵 (名) 紋所の名。菊の花の内に葵の紋を描けるもの。

きんせいの (名) 菊輪葵 (名) 紋所の名。菊の花の内に葵の紋を描けるもの。

きんせいの (名) 菊輪葵 (名) 紋所の名。菊の花の内に葵の紋を描けるもの。

きんせいの (名) 菊輪葵 (名) 紋所の名。菊の花の内に葵の紋を描けるもの。

きんせいの (名) 菊輪葵 (名) 紋所の名。菊の花の内に葵の紋を描けるもの。

きんせいの (名) 菊輪葵 (名) 紋所の名。菊の花の内に葵の紋を描けるもの。

きんせいの (名) 菊輪葵 (名) 紋所の名。菊の花の内に葵の紋を描けるもの。

きんせいの (名) 菊輪葵 (名) 紋所の名。菊の花の内に葵の紋を描けるもの。

きんせいの (名) 菊輪葵 (名) 紋所の名。菊の花の内に葵の紋を描けるもの。

きんせいの (名) 菊輪葵 (名) 紋所の名。菊の花の内に葵の紋を描けるもの。

寺・仁和寺の僧にて、勅額結縁准阿闍梨の宣下を蒙りて、未だ勤仕せぬ間の稱。位は三會の講師に準ず。

きくわんほう 機關砲 (名) 裝藥より生ずる瓦斯の一類を利用し、少數の人員にて、短少時間に多數の彈丸を發射し得る火砲。

きくわんへい 機關兵 (名) 海軍卒の一。機關に關する軍務に従事するもの。一等・二等・三等・四等・五等の等級あり。

きくわんほけん 汽罐保險 (名) 損害保險の一。汽罐又は汽機、並びに其の附屬物の損害填補を目的とするもの。

きくわんもん 祈願文 (名) ぐわんもん (願文) に同じ。

きくをりえだ 菊折枝 (名) 紋所の名。

きくせん 奇勳 (名) めづらしきいさを。奇功。李白詩「麟閣著奇勳」。

きくせん 貴君 (代) 同輩又は其の以上を用ふる對稱の代名詞。あたな。

きくせん 義軍 (名) きい (義兵) に同じ。

きくせん 蟻群 (名) 蟻のむれ。

きくせん 偽君子 (名) 君子らしき舉動をして、内實は然らざる人。にせのくし。

きくせん 擬郡司 (名) 假りに郡司に任ずる者。其の任に堪ふる者と認むるときは、郡司に任ず。

きくせん 義解 (名) 義解に同じ。一合義解。宋史王作老子訓傳、及佛書義解、亦數萬言。

きくせん 奇計 (名) 不思議なる計略。めづらしきはかりごと。川中島合戦「如何なる軍師が敵に組みし、かかる奇計をなしけるぞ」史記卷六、賓客群臣、有

能出奇計。張敖者、吾且尊官與之分土。○天條に同じ。史記卷六、賓客群臣、有奇計。○同。其事多兵權與奇計。○詐奇計。○詭計 (名) いつはりのはかりごと。晉書王猛、吳石城守、去襄陽七百里、每爲邊害、猛患之、竟以詭計、令吳罷守。

きくせん 龜鏡 (名) ききやう (龜鏡) に同じ。運歩色葉。龜鏡。

きくせん 氣形 (名) 鳥獸・蟲魚の類。下學集「氣形門」。

きくせん 奇形 (名) めづらしきかたち。異様のすがた。盛衰記卷八、此の下に兒あり。奇形妙なる粧ひ、敢へて人類に等しからず。

きくせん 鬼形 (名) きぎやう (鬼形) に同じ。

きくせん 畸型 畸形 (名) 動物體胚種の成熟する間に、異常の發育をなすによりて生ずる不整齊の形體。かたは。不具。

きくせん 忌景 (名) きにち (忌日) に同じ。曾我十、所末だやまざるに、百日のきけい既に満てり。

きくせん 鬼卿 (名) 植かきもち (桑本の異名)。

きくせん 氣莖 (名) 植植物學上の用語。ちじやうけい (地上莖) の異名。

きくせん 基形 (名) 鐵標軸面より成る結晶形の稱。總べての結晶はこれを基礎として論ず。

きくせん 歸敬 (名) ききやう (歸敬) に同じ。

きくせん 奇警 (名) すぐれてすぐとく、普通思ひより奇ること。奇拔。

きくせん 機警 (名) 機智ありて物事にさきとこと。魏志武、太祖少機警、有權數、而任俠放蕩。

きくせん 幾慧 (前條に同じ)。

きくせん 貴兄 (代) きくせん (貴君) に同じ。あなた。

きくせん 奇藝 (名) 不思議の藝當。妙技。

きくせん 義兄 (名) 義を結びて假りに契約したる兄。○義理ある兄。姉の夫、又は妻の兄の稱。

きくせん 義卿 (名) きせう (義卿) に同じ。東鑑卷六、政道之事、殊可致、興行之難、附議卿、令奏聞、給了。

きくせん 偽計 (名) いつはりの手段。舊刑法卷三、偽計又は威力、刑法卷三、虚偽の風説を流布し、又は偽計を用ひ人の信用を毀損し、若くは其業務を妨害したる者。

きくせん 儀刑 儀型 儀形 (名) ありあるさま。手本。模範。平家、太政大臣は、一じんに師範として、四海に儀刑せり。太平記卷三、和漢の藝を仰ぎて、四海の儀形。詩經、大雅、儀刑文王、萬邦作孚。一北史、儀形、風德人之師表。齊書、儀儀、儀儀、永眉、眉壽。

きくせん 祇敬 (名) 神に對して、つつしみうやまふこと。

きくせん 伎藝 伎藝 (名) わざ。藝能。げい。釋迦如來誕生會、習はずして、諸の伎藝に達し、戰國策、異敏、技藝之所試也。左傳、百工、獻藝。註、獻、其技藝、以獻政事。

きくせん 技藝學校 (名) 明治三十二年四月以前の實業學校の稱。實業學校令、他、法令中に技藝學校とあるは、本令施行の日より當然實業學校と看做す。

きくせん 畸形兒 (名) 畸形をな

せる小兒。かたはなる小兒。

きくせん 義兄弟 (名) ききやう (義兄) に同じ。

きくせん 伎藝天 (名) 佛語。佛の名。摩訶首羅天王、伎藝の髮際より化生せりとする天女。諸の伎藝を守護す。

きくせん 奇矯 (名) 強ひて人と異なりたる言行をなすこと。言行の中庸を得ざること。放陶孫詩評、鮑明遠如饑鷹獨出、奇矯無前。

きくせん 乞巧奠 (名) ききやう (乞巧奠) に同じ。

きくせん 聞顔 (名) わざと聞き知れといはぬばかりの顔つき。曾我我、わざと聞きがほに、聲高に申しけるは。

きくせん 喜劇 (名) 滑稽的興味などを雜じて、看客をして喜び興せしむる脚色の演劇 (悲劇の對) 三人をして、覺えず笑ひ興せしむる如き事。

きくせん 詭激 (名) 言行の中正を失ひてはげしきこと。後漢書、再好、進時、絕俗、爲詭激之行。

きくせん 生下戸 (名) 全くの下戸。かなげこ。千紅萬紫、三つ巴、一つ巴はき下戸にて、二つ巴はゆらゆらの助。

きくせん 氣血 (名) 氣と血と。血の循環。當流小栗判官、六魂、氣血通はねば、けんもん間に異ならず。

きくせん 奇傑 (名) ふうがはりの豪傑。

きくせん 起結 (名) 起りと結びと。詩又は文の起句と結句。

きくせん 割腕 (名) けい (割腕) は曲がりたる刀、けつ (割腕) は曲がりたる鬚の義。原本、割腕、割腕不用、割腕刀、割腕鬚。

きくせん 既決 已決 (名) 既に決定すること。已に決したること。○(法)判決の、既に確定したること。○(法)判決「既決未決の囚人」。

きくせん 歸結 (名) おちつくこと。をばり。結著。落着。

きくせん 匱竭 (名) 物の乏しく盡くること。漢書、天下匱竭。

きくせん 詭譎 (名) いつはりて正しからぬこと。めづらしくあやしきこと。漢書、詭譎、規、規、規、存乎五威。○詭譎、天祭地事、其異物殊怪、存乎五威。○詭譎、天祭也者、詭譎、動止陰險。

きくせん 期月 (名) 満一箇月。又、豫め定めたる期限の月。中庸、擇乎中庸、而不能期月守也。○論語、吾有用于我者、期月而已可也。

きくせん 忌月 (名) 忌日のある月。源氏物語、三月はた御き月なれば。○同野分、八月は故前坊の御忌月なれば。

きくせん 虧月 (名) 満月より新月になる間の月。

きくせん 蟻穴 (名) ありのあな。○(法)合議して、或る事柄に對する意思を決定すること。又は、決定したる意思。大日本帝國憲法、三、兩議院は政府の提出する法律案を議決し、同議院は各其の總議員三分の一以上出席するに非ざれば議事を開き議決を爲すことを得ず。○(法)甲議院に於て政府の議案を可決し又は修正して議決したるときは乙議院に之を移すへし乙議院に於て甲議院の議決に同意し又は否決したるときは之を奏上すると同時に甲議院に通知すへし。漢書、田延年按劍延叱群臣、即日議決。

きくせん 已決監 (名) 舊陸軍監獄期によりて設けし陸軍監獄の一。陸

軍軍法會議所所在地に置き、禁錮・拘留の刑に處せられたる者、及び罰金・科料を禁錮・拘留に換へたる者を拘禁し、並びに集治監・拘留監・地方監獄に送付すべき者を一時留置せし所。明治二十七年一月勅令第三號陸軍監獄條例第五條、已決監。

きくせん 議決機關 (名) 議決権を決定するために設けたる合議制の機關。即ち、帝國議會・府縣會・郡會・市會・町村會・株主總會の類。執行機關の對)。

きくせん 議決權 (名) 議決することを得る權利。商法、總會の決議は出席したる株主の議決權の過半數を以て之を爲す。○同、無記名式の株券を有する者は會日より一週間前に其株券を會社に供託するに非ざれば其議決權を行ふことを得ず。○合議制の機關が、或る事項を議決する權利又は權限。

きくせん 胡嗣氏 (名) はんきし (版木師) に同じ。

きくせん 已決囚 (名) (法)有罪の裁判の確定せる囚人。(未決囚の對) 明治十四年七月內務大藏兩省乙第三十四號「本年十七號公布を以て已決囚に係る經費區分等被定」。

きくせん 鬼氣祭 (名) 惡鬼の祟りを除くために行ふ祭。東北院職人歌合、思ひ餘り君には鬼氣の祭して、しるも見えぬ御神樂ぞうき。東鑑卷八、於即異方可修、鬼氣の祭。

きくせん 基業 (名) 基礎となる事業。後漢書、基業已定、大勳方緝。釋名、基業也、在下物所依據也。業捷也、事捷乃有功業也。

きくせん 機業 (名) 布帛を織り出

だす事業。はたおりのわざ。織物の事業。

きくせん 起業 (名) 新たに、一事業を起すこと。

きくせん 企業 (名) 事業をくだつること。又、くはだつる事業。○(經)自己の計算にて、生産・賣買・運輸等の營業を企圖・實行すること。其の規模を標準として大企業と小企業とに分ち、人を標準として單獨企業と共同企業とに分ち、公私を標準として公企業と私企業とに分ち、需要に應ずる情態を標準として完全企業と不完全企業とに分ち、各條を見よ。

きくせん 義俠 (名) をとこだて。をとこぎ。任俠。

きくせん 機業家 (名) 機業を營む人。

きくせん 企業家 (名) きげふし (企業者) に同じ。

きくせん 企業家合同 (名) (經)協同企業の一。各企業家が、各自の事業を全く合同し、中央機關を設けて、其の總指揮の下に全企業を營むもの。とらふ。

きくせん 企業家聯合 (名) (經)協同企業の一。獨立せる各企業家が、相協同・聯絡して企業を行ふもの。

きくせん 起業公債 (名) (經)起業に必要な資金を得んために募集する公債。即ち、鐵道公債、北海道鐵道公債、臺灣事業公債の類。○我が國の國債の一。內國運輸の便を開き、農工商百般の事業を發達、伸張せしめ、併せて當時の假設にかかると國立銀行の事業を發展せしむる目的にて、明治十一年五月に募

集せしもの。明治十一年四月第七號布告「起業公債」同年五月大藏省甲第十三號布告「起業公債」。

きくせん 起業式 (名) 起業をなす時に行ふ儀式。

きくせん 企業者 (名) 企業をなす人。企業家。

きくせん 起業者 (名) 起業をなす者。官吏服務紀律、官廳の補助金を受くる起業者。

きくせん 起業殖民地 (名) 本國の政府又は私人が資本を放下し、産業を經營するを主たる目的とする殖民地。其の産業の、商業たるは、農業たるは、工業たるは、商業的殖民地、農業的殖民地及び工業的殖民地の三種に分ち、投資殖民地。

きくせん 企業所得 (名) (經)企業者の總所得。

きくせん 企業熱 (名) 經濟的事業を企つる人氣の盛んなること。

きくせん 企業利益 (名) (經)企業者の勤勞に對する報酬として、企業者の所得となる利益。

きくせん 黃董 (名) 植器粟科、紫葉の多年生草本。莖の高き一二尺。葉は二三回羽狀に深裂して、最終裂片また缺刻を有す。花序の苞は披針形、若しくは卵形、全縁又は少し分裂す。春季、距を有する黄色花を開き、總狀花序に排列す。我が國、各地の山野陰濕の地に自生す。莖を切れば一種服ふべき臭氣を發す。有毒植物なり。うばころし。

きつな (名) きつなしの語幹。源氏物語「折なう、きつなの人や」

きつなげ (副) きつなきやう。きつなげ。堀河波鼓「下女の聲して、忙がしい通やと、きつなげにも高聲なり」

きつなき (名) きつなきさま。きつなき度合。きつなき。

きつなし (形) ぶこつなり。斟酌なし。愛想なし。圓滑ならず。きつなし。田舎男にて、きつなきさまの風情にて、舞を舞ひ給へとこそ申しつらめ。丹波與作「そなきねんじやうめ、語りをらうと、きつなき」

きつなし (名) きつなきこと。きつなきすふり。五人女「皮うすに色白く、衣類のきつなきしあるべからず」

きつなき (他動) 身體につり合ふやうに衣服を著けらす。一代女「三つ重ねの衣裳きつなき」

きつなき (名) 植きんせんくわ(金盞草)の異名。

きつなき (名) 歸忌日 歸己日 (名) 舊暦にて、他出したる者の歸るを忌み、又、嫁娶等をも忌むといふ日。東鑑「三十三日御返留遠州亭今日依爲歸己日」也「拾芥抄下志 歸忌日 四五丑、在丑、四仲二、在寅、四季、三六、在子、其日、行御祭、貞享四年伊勢曆、三十二日、わらま、此の二箇日は、かど出てにわろし。旅よりかへるにわろし。入ぶにわろし。嫁とりわろし。ただ、きこはかへる者いみ、わらまはゆきてほろぶ也」

きつなき (名) 騎虎勢 (句) 虎に騎りたるもの、中途にて下たることを得ざる如く、物事の行き掛かり上中止す

きつなき (名) 木子大工 (名) 木子は木工の義か。昔内裏の御大工をいふと。萬物語「要決、内裏の御大工に、きこの大工と云ふ如何」

きつなき (名) 木強 (名) 次條の語幹。しなやかならず。

きつなき (名) 鐵八面體・五角十二面體等に結晶し、粒状又は塊状をなして産出する礦物。比重や重く、金屬光澤を有し、銀白色乃至銀赤色或は鐵色なり。成分は砒素及びヒ素と。硫化物なり。本邦にては但馬國生野銀山に産す。

きつなき (名) 擬古文 (名) 擬古體の文章。

きつなき (他動) 衣を着て、他にあらはれ出づるやうにす。枕「車中白ききぬどもあまた、山吹・くれなゐなどきこぼして」

きつなき (名) 植きま(胡麻)の異名。

きつなき (名) 木小舞 (名) 木を用いたの小舞(竹の小舞に別かちていふ)。

きつなき (名) 著込 著籠 (名) きこむこと。山槐記「著込、著込、今日不出衣著籠也」甲陽軍鑑「早早、打ち立たん支度をし、足袋はばき、物の具をもきこみにし」

きつなき (名) 著籠 (名) 上著の下に重ねて著る、鐘帷子(かき)などの稱。傾城反魂香「著込の兵百騎ばかり」衷甲。

きつなき (名) 氣籠 (名) 氣を籠むること。一心になること。意氣込み。氣勢。

きつなき (自動) 來て入り込

きつなき (名) 植かうやのまんねんすぎの異名。漢草馬馬草。

きつなき (名) 著心地 (名) 次條に同じ。

きつなき (名) 著心 (名) 衣服を着たる心地。博多小女郎波枕「戀と小袖は一様、襟身に引締めて合せてこそ、寝心もよく、著心もよく」

きつなき (名) 氣心 (名) 心。氣。心もち。氣質。「氣心がよ」氣心も知れぬ。

きつなき (名) 黃腰 (名) 直垂の腰の部分。黄色に染めたるもの。太平記「黄腰に銀箔にて撰麥を押ししたる黄腰に、鱧の太刀を佩いたり」

きつなき (名) 木輿 (名) いたこし(板輿)に同じ。

きつなき (名) 開召物 (名) きこしめすもの。めしあがりもの。榮華貴族「きこしめし物など参りたり」

きつなき (名) 開召 (他動) 開ききく(開)の敬語。きこしす。きこす。後紀「紀紀あけ述べて講りし誠は、ねもころに開き(食)てむ」竹取「かやや、かちめ世に似ずめでたき事を、かかどきこしめして」同「是れを聞きこしめして、仰せ給ふやう」同「吹ひ・食ふ・行ふ・治むなどの敬語。萬葉「伎己之米須(結)よもの國より奉るみつぎの船は」竹取「きたなき所の物きこしめしたれば、御こち悪しからんものぞ」同、物もきこしめし、御遊びなどもなかりけり」藤木酒中「つきこしめされし」所御「御開き入ればなる。御承知なる。榮華貴族上達部御前に召さんと啓し給ふ。きこしめすとあれば」同「一杯く。うまうまだまざる。百日曾我三辨慶親辨眞と偽りしと、鎌倉中の大名小名の口口、うまうまときこしめしたるをかしきよ」

きつなき (名) 今昔丁子の香はやうきこえ」

きつなき (他動) 申しあぐ。申す。源氏物語「いざいと心やすき所にて、のどかにきこえんなど語らひ給へば」榮華貴族「きこえ給ふべき事を、この度は忘れて教へ奉り給はずなり」同「や・おくるの敬語。國基集「同じ人に、おほえびきこえさす」と」

きつなき (助動) 敬意を表はす語。たてまつる。まつる。まゐらす。竹取「竹の中より見つけきこえたりしかど中何にかあむかへん」枕「いかやうなる人かあると、問ひきこえさせ給へば」源相傳「疑ひなきまらけの君と、世にもてかしづききこゆれど」同「右大将殿をばじめきこえて、御をぢの殿ばら」

きつなき (名) 樵 (名) きこること。又、其れを業とする人。宇津保歌「炭やき木こり」曾丹集「春山にきこる木こりの腰にさす、よきつつきれや花のあたりは」

きつなき (名) 樵 (名) 樵 (名) 動「毛蟲の類なるべし。新六帖「いかなりし世世の報いぞ木こり蟲、みにおふ程の宿はかなし」

きつなき (自動) 山林の木を伐る。薪を伐採す。持統紀「不得漁採」山林池澤「宇治拾遺三木こるわらはの、曉、山(ゆくとて)」

きつなき (名) 著殺 (名) きこること。浮世風呂「なげなしの一張羅を、著殺しに著切て」

きつなき (他動) 一つの衣服を破るまで著る。

きつなき (名) 基根 (名) もと。ねも

きつなき (名) 機根 (名) 佛語。

きつなき (名) きつなきこと。きつなきすふり。五人女「皮うすに色白く、衣類のきつなきしあるべからず」

きつなき (他動) 身體につり合ふやうに衣服を著けらす。一代女「三つ重ねの衣裳きつなき」

きつなき (名) 植きんせんくわ(金盞草)の異名。

きつなき (名) 歸忌日 歸己日 (名) 舊暦にて、他出したる者の歸るを忌み、又、嫁娶等をも忌むといふ日。東鑑「三十三日御返留遠州亭今日依爲歸己日」也「拾芥抄下志 歸忌日 四五丑、在丑、四仲二、在寅、四季、三六、在子、其日、行御祭、貞享四年伊勢曆、三十二日、わらま、此の二箇日は、かど出てにわろし。旅よりかへるにわろし。入ぶにわろし。嫁とりわろし。ただ、きこはかへる者いみ、わらまはゆきてほろぶ也」

きつなき (名) 騎虎勢 (句) 虎に騎りたるもの、中途にて下たることを得ざる如く、物事の行き掛かり上中止す

きつなき (名) 木子大工 (名) 木子は木工の義か。昔内裏の御大工をいふと。萬物語「要決、内裏の御大工に、きこの大工と云ふ如何」

きつなき (名) 木強 (名) 次條の語幹。しなやかならず。

きつなき (名) 鐵八面體・五角十二面體等に結晶し、粒状又は塊状をなして産出する礦物。比重や重く、金屬光澤を有し、銀白色乃至銀赤色或は鐵色なり。成分は砒素及びヒ素と。硫化物なり。本邦にては但馬國生野銀山に産す。

きつなき (名) 擬古文 (名) 擬古體の文章。

きつなき (他動) 衣を着て、他にあらはれ出づるやうにす。枕「車中白ききぬどもあまた、山吹・くれなゐなどきこぼして」

きつなき (名) 植きま(胡麻)の異名。

きつなき (名) 木小舞 (名) 木を用いたの小舞(竹の小舞に別かちていふ)。

きつなき (名) 著込 著籠 (名) きこむこと。山槐記「著込、著込、今日不出衣著籠也」甲陽軍鑑「早早、打ち立たん支度をし、足袋はばき、物の具をもきこみにし」

きつなき (名) 著籠 (名) 上著の下に重ねて著る、鐘帷子(かき)などの稱。傾城反魂香「著込の兵百騎ばかり」衷甲。

きつなき (名) 氣籠 (名) 氣を籠むること。一心になること。意氣込み。氣勢。

きつなき (自動) 來て入り込

きつなき (名) 植かうやのまんねんすぎの異名。漢草馬馬草。

きつなき (名) 著心地 (名) 次條に同じ。

きつなき (名) 著心 (名) 衣服を着たる心地。博多小女郎波枕「戀と小袖は一様、襟身に引締めて合せてこそ、寝心もよく、著心もよく」

きつなき (名) 氣心 (名) 心。氣。心もち。氣質。「氣心がよ」氣心も知れぬ。

きつなき (名) 黃腰 (名) 直垂の腰の部分。黄色に染めたるもの。太平記「黄腰に銀箔にて撰麥を押ししたる黄腰に、鱧の太刀を佩いたり」

きつなき (名) 木輿 (名) いたこし(板輿)に同じ。

きつなき (名) 開召物 (名) きこしめすもの。めしあがりもの。榮華貴族「きこしめし物など参りたり」

きつなき (名) 開召 (他動) 開ききく(開)の敬語。きこしす。きこす。後紀「紀紀あけ述べて講りし誠は、ねもころに開き(食)てむ」竹取「かやや、かちめ世に似ずめでたき事を、かかどきこしめして」同「是れを聞きこしめして、仰せ給ふやう」同「吹ひ・食ふ・行ふ・治むなどの敬語。萬葉「伎己之米須(結)よもの國より奉るみつぎの船は」竹取「きたなき所の物きこしめしたれば、御こち悪しからんものぞ」同、物もきこしめし、御遊びなどもなかりけり」藤木酒中「つきこしめされし」所御「御開き入ればなる。御承知なる。榮華貴族上達部御前に召さんと啓し給ふ。きこしめすとあれば」同「一杯く。うまうまだまざる。百日曾我三辨慶親辨眞と偽りしと、鎌倉中の大名小名の口口、うまうまときこしめしたるをかしきよ」

きつなき (名) 今昔丁子の香はやうきこえ」

きつなき (他動) 申しあぐ。申す。源氏物語「いざいと心やすき所にて、のどかにきこえんなど語らひ給へば」榮華貴族「きこえ給ふべき事を、この度は忘れて教へ奉り給はずなり」同「や・おくるの敬語。國基集「同じ人に、おほえびきこえさす」と」

きつなき (助動) 敬意を表はす語。たてまつる。まつる。まゐらす。竹取「竹の中より見つけきこえたりしかど中何にかあむかへん」枕「いかやうなる人かあると、問ひきこえさせ給へば」源相傳「疑ひなきまらけの君と、世にもてかしづききこゆれど」同「右大将殿をばじめきこえて、御をぢの殿ばら」

きつなき (名) 樵 (名) きこること。又、其れを業とする人。宇津保歌「炭やき木こり」曾丹集「春山にきこる木こりの腰にさす、よきつつきれや花のあたりは」

きつなき (名) 樵 (名) 樵 (名) 動「毛蟲の類なるべし。新六帖「いかなりし世世の報いぞ木こり蟲、みにおふ程の宿はかなし」

きつなき (自動) 山林の木を伐る。薪を伐採す。持統紀「不得漁採」山林池澤「宇治拾遺三木こるわらはの、曉、山(ゆくとて)」

きつなき (名) 著殺 (名) きこること。浮世風呂「なげなしの一張羅を、著殺しに著切て」

きつなき (他動) 一つの衣服を破るまで著る。

きつなき (名) 基根 (名) もと。ねも

きつなき (名) 機根 (名) 佛語。

岸道 (名) 岸に沿ひたる道。又、がけ道。保元平治の戦いは今宵ばかりぞ佳の江の、きし道おりのみかてつみ見し。夫木きし道き生ふる片山藤のきしみちは、しぐれにたへぬ秋の色かな。鹽草岸水。

きしな 木品 (名) 木のしな。木材の品質又は品位。来る途。きしな。来るとき。くるついで。きしな (名) 著るついで。著るをり。きしな (名) 〔植〕菊科、黄鶯菜(Scorzonera)属の多年生草本。根生葉は叢生し、葉形にして、缺刻及び歯牙を有し、稍たばらに似たり。質は柔滑にして、折る時は白色の乳液を出す。花莖は数寸、莖形の葉を互生し、花は黄色、頭状花序に排列し、花莖頂に十数箇の花序を著生し、秋季開く。我が國、各地の山野に自生す。いはにがな。

岸道 (名) 岸に沿ひたる道。又、がけ道。保元平治の戦いは今宵ばかりぞ佳の江の、きし道おりのみかてつみ見し。夫木きし道き生ふる片山藤のきしみちは、しぐれにたへぬ秋の色かな。鹽草岸水。

こと。又、其の品。まがひもの。【きせい】
 どうぶ(擬製豆腐)の時。
きせい (一) 偽製 偽物を製造すること。
 又、其の品。にせもの。
きせい (二) 擬制受取人
 【商】擬通手形を發行するに、假
 想せる受取人。
きせい (三) 基性岩 (名) 【地】火
 成岩にして、硫酸の含量五〇%に達せ
 るもの。即ち、玄武岩、橄欖岩等の類。
きせい (四) 氣成岩 (名) 【地】ふ
 うせい(風成岩)の異名。
きせい (五) 寄生火山 (名) 【地】火
 【地】火山の山腹、若しくは麓に噴出した
 る小火山。側火山。
きせい (六) 議政官 (名) 明治
 元年に設けし太政官七官の一。上下二局
 に分かれ、主として立法を司り、後廢
 す。
きせい (七) 一期成原因 (名)
 結果の必然あらはるべき原因。
きせい (八) 擬聲語 (名) 【語】事物
 の音響に擬して成れる語。そよばらば
 ら、颯颯等の類。
きせい (九) 氣生根 (名) 【植】き
 こん(氣根)の異名。
きせい (一〇) 寄生根 (名) 【植】植
 物學上の用語。寄生植物の根。根毛を缺
 き、他の植物に附着して其の組織内に侵
 入し、其の養分を奪取するもの。つくば
 ね(擬寄生)等の類。
きせい (一一) 氣生植物 (名) 【植】植
 物學上の用語。他の樹木、又は其の
 枝上に附着して生活し、土壤と何等の
 連絡なき植物。かくの如き植物は、養
 分を専ら空氣中に仰ぐ。多くは氣根を有
 し、之にて他物に固著し、且つ空中より濕
 氣を吸收す。石盤(苔)ふらん(類)空

氣植物。
きせい (一二) 寄生植物 (名) 【植】植
 物學上の用語。寄生生活を營む植
 物の總稱。他物より養分を奪取するを以
 て、葉及び莖退化して葉綠質を缺き、白
 色なるもの多し。殊に下等植物には此の
 種のもの最も多し。【微】細菌(細菌)等の
 類。
きせい (一三) 寄生生活 (名) 【動】動
 物學上の用語。又は生物の生産物に寄
 生して生活すること。
きせい (一四) 寄生動物 (名) 【動】動
 物學上の用語。他の動物體に寄生
 して生活を營むもの。何れも下等動物に
 屬し、體制甚しく退化せるを常とす。條
 蟲、蠅、蠅、蠅、蠅等の類。寄生蟲。
きせい (一五) 一期成同盟 (名)
 或る事件の成就を目的として同盟するこ
 と。又、其の同盟。
きせい (一六) 寄生蜂 (名) 【動】昆
 蟲類、膜翅類の一群。小形の蜂。其の幼
 蟲は何れも他の昆蟲の幼蟲の體内に寄生
 し、遂に之を斃す。馬尾蜂(蜂)の類。
きせい (一七) 擬聲法 (名) 修辭法
 の語。事物の音響を模するもの。態度・
 狀態等にもいふ。水がさらさら流る、鴉
 がかあかあ鳴く、又、くわつと怒る、ぶんと
 匂ふ、などの類。
きせい (一八) 寄生生物 (名) 【生物】

生物學上の用語。寄生生活を營む生物。
きせい (一九) 寄生木 (名) 【植】や
 どり(寄生)の類。
きせい (二〇) 奇靜脈 (名) 【醫】
 胸部に在る靜脈管の名。主として肋間靜
 脈を受容し、上端は上大靜脈管に連接し、
 下端は僅かに腰靜脈と交通す。右を奇靜
 脈と稱し、左を奇靜脈といふ。
きせい (二一) 著少 (名) 老いたること
 若きこと。運歩色著少。
きせい (二二) 騎哨 (名) 騎馬の哨兵。
きせい (二三) 嘻笑 (名) 嘻嘻として笑ふこと
 よろこび笑ふこと。
きせい (二四) 稀少 (名) まれなるこ
 と。少なきこと。まばらなること。【人
 烟稀少】
きせい (二五) 戲笑 (名) たはむれ笑ふこと
 【おどけ】滑稽。諧謔。
きせい (二六) 稀少元素 (名) 【化】
 地球上に存在する量の極めて少なき元
 素。ねおん(セリウム)とリウム等の類。
きせい (二七) 稀硝酸 (名) 【化】硝
 酸に多量の水を加へて稀釋したるもの。
きせい (二八) 器世界 (名) 佛語。き
 せけん(器世間)の同。楞嚴經「器世界
 有二種、一、衆世界、是正報。二、器世界、
 是依報」
きせい (二九) 貴戚 (名) 高貴なる人の親
 戚。又、貴族。
きせい (三〇) 鬼籍 (名) くわこちやう
 (過去帳)の同。
きせい (三一) 鬼籍 (名) 死して亡者
 の籍に記入せらる。死亡す。死す。
きせい (三二) 鬼責 (名) 鬼神のせめ。神
 罰。莊子「天運故知天樂者無天怨、無人
 非、無物累、無鬼責」

きせい (三三) 奇蹟 奇跡 (名) 不思議
 なる事ありし跡。靈蹟。
きせい (三四) 奇績 (名) 珍らしき功績。
きせい (三五) 奇石 (名) 奇妙なる石。珍
 らしき石。
きせい (三六) 基石 (名) がい(基石)に
 同。
きせい (三七) 貴石 (名) 磨り研きなどし
 て身のまはりの粧飾品に用ひらるる鑽
 石。金剛石・水晶・瑪瑙等の類。
きせい (三八) 輝石 (名) 【礦】透輝物中、
 最も普通なるもの。成分はカルシウ
 ム・マグネシウム・鉄等の硫酸鹽類の混
 合物。種類甚だ多く、頑火石・古銅石・紫蘇
 輝石・磁石・透輝石などは其の類なり。
きせい (三九) 軌跡 (名) 【數】或る線上
 の總べての點は皆或る條件に適し、其の
 他は皆此の條件に適さざる時、其の
 軌を此の條件に適する點の軌跡と云
 ふ。
きせい (四〇) 歸籍 (名) ふくせき(復籍)に同
 じ。
きせい (四一) 毀瘠 悲しみに過ぎること
 として、身體が損はれ瘠ること。禮記曲禮
 「居喪之禮、毀瘠不形、視聽不衰」左傳
 莊十「癸巳卒毀也。注過哀毀瘠、以致滅
 性」
きせい (四二) 氣急 (名) 氣のせきこと。
 心せはなきこと。
きせい (四三) 議席 (名) 議場に於ける議
 員の席。貴族院令第三皇族の男子成年に
 達したるときは議席に列す。樞密院官制
 第十、各大臣は其職權上より樞密院に於て
 顧問たるの地位を有し議席に列し表決の
 權を有す。
きせい (四四) 輝石安山岩 (名) 【地】安山岩中、最も普通なるもの。
 本邦、到る處の火山地方に之を見る。主

として流狀構造の石基中に斜長石・雲母
 及び輝石を主成分となすもの。石材とし
 て著く使用せらる。輝石安山岩。
きせい (四五) 著衣 (名) うまぎぬ(馬
 衣)の同。馬具寸法記「きせいぬの寸法
 事。三尺八寸のわ五のにつづけて縫ふべ
 き也」
きせい (四六) 輝石富士岩 (名) 【地】き
 せき(輝石)あんざん(輝石安山岩)の
 異名。
きせい (四七) 黃鶉 (名) 【動】鳥類
 中燕雀類の一種。頭上より背部一體は
 灰黒色にして、眼上に類白色の眉あり。
 下面は胸部より尾根に至る迄鮮黄色な
 り。翼は殆ど黒色、尾羽は中部黒色、兩側
 白色なり。本邦、各地に普通なり。
きせい (四八) 器世間 (名) 佛語。生
 物の生息する國土。この世。器世界。器
 界。
きせい (四九) 器世間境 (名) 前條に同。
きせい (五〇) (形) なきけなし(情無)
 をいふ。東國の方言。【きせいなし(氣
 急)をいふなるべし】道善清十郎奴侍語
 「あちらこちらとするはどろばうのき
 せちなきけなしがしげにも壁著語」
きせい (五一) 季節 (名) をり。時節。
きせい (五二) 氣節 (名) 氣概ありて節
 操の堅きこと。氣骨。漢書高帝紀「陰陽
 之氣節」
きせい (五三) 基節 (名) 【動】動物學上の
 用語。節足動物の脚の根元をなす半球狀
 ・狀の突起。轉節之に關節す。
きせい (五四) 既設 既に設けてあること。
 前に設置しあること。未設の對「既設の
 電話」
きせい (五五) 氣絶 息のたゆること。目

をまはすこと。絶息。卒倒。菅書「被」
 四創氣絶」
きせい (五六) 奇絶 すぐれて奇なること。
 絶對に奇妙なること。浮世風呂「各各は
 たく内が奇絶だの」
きせい (五七) 儀節 (名) ほどよくするこ
 と。節制。左傳「君子之近琴瑟以儀
 節也、非以信也」
きせい (五八) 義絶 義理のため、君臣又
 は父子・兄弟などの縁を絶つこと。東鑑
 六文「義絶」爲安樂寺別當澄聖、菅氏舉、依
 起「大業義絶事」
きせい (五九) 木雪踏 (名) 草履の裏に、
 横に目を挽きたる板(雪踏)を附けたるも
 の。
きせい (六〇) 季節違 (名) きちが
 ひ(季節)に同。
きせい (六一) 季節風 (名) 【地】き
 こうふう(季節風)の同。
きせい (六二) 黃瀬戸 (名) 陶器に黄色の
 釉を施したる瀬戸焼の一種。二代目藤四
 郎の發明にて、尾張國春日井郡瀬戸村に
 て製出せるもの。
きせい (六三) ぎせいどうぶ(擬製豆
 腐)の同。
きせい (六四) 著脊長 著長 著背
 (名) 【著長】(著)の義にて、腹巻胴丸などよ
 り草摺長きよりいふ。一説、著背中(著)の
 義にて、腹巻・腹當など、脊の方明きたる
 と異なるよりいふ。【著背】(著)の義にて、常
 の體を、大將の著るに就きて稱すともい
 ふ。【著背】(著)の義にて、御きせながを被「取出」
 て、つらぬき奉り、御馬に被置(被)の同也。
 平家「亂狂歌の狩衣の菊とち大さらか
 て」したるに、重代のきせなが緋緞の體著
きせい (六五) 著剣 (名) 芝居にて、興行
 主が俳優に給する衣裳。演劇終れば返

附せしむるもの。
きせい (六六) 氣急 (形) 心いそがし。
 氣短し。性急なり。
きせい (六七) 奇捷 (名) 不思議の勝。思
 ひ掛けぬ勝利。
きせい (六八) 被物 (名) 【物】物など、き
 しむる品物。【被】或る物を覆として、他の
 物を被る。【被せ】包み、其れと見せかけたる
 もの。かぶせもの。
きせい (六九) 烟管 (名) 次條をいふ、伊勢
 國の方言。【煙管】佐夜中山集「金鑄は月に猶
 はた耀きて、たばこきせりも共に新らし」
きせい (七〇) 烟管 (名) 【外來語】なれど不
 詳。【煙管】(煙)の義にて、煙管といふ。
 其の中開を竹にて接続し之を羅字とい
 ふ。煙管の先端曲がりて上に向きたる孔
 あり、煙草を盛る處とす。之を火皿と名
 づく。羅字なくして煙管と吸口とを金屬に
 つづけて打ちたるを延べ打ちといふ。
 天網島「こちも念佛申すぞや、鉦の火入
 れ、きせる煙木、百合若大臣守鏡三き
 せるくは(て)懐手、身をのさばつて立ち
 むたり」きせる(煙)をいふ。伊勢國「昔
 時、芝居にて吸煙用の火繩を賣りたるも
 の。下文を見よ。劇場新語「半疊火繩賣
 りは中疊火繩の數にて見物人の入り高を
 量る。一名きせるといふ」
きせい (七一) 著 (他動) ます(著)の口語。
きせい (七二) 煙管員 (名) 【動】軟體
 動物、腹足類の一屬。有肺類に屬す。殼
 は狭長、左巻にして全形やや煙管の形を
 なし、殻口内に脚あり。本邦、各地に産
 し、朽木・腐葉の間に棲息す。
きせい (七三) 植なんばんきせる
 (名) 【植】植なんばんきせる

(野蕨)の異名。
きせい (七四) 煙管筒 (名) 【器】きせる
 (煙管)の同。代男「五ふくづきのき
 せる筒、小者に煙草・毛巾著、ひなびたる
 事にぞ有りける」雪女五枚羽子板「奴に
 持たせし煙管筒、一寸ひ詰めて煙らす」
 【煙管筒】(煙)の義にて、煙管の筒。煙管筒など
 字環「たばこ入、きせる筒を、蝦夷錦など
 にて拵へ、男向き御番御役勤むる者など
 は、一般に革のきせる筒を用ふる事に成
 りたり。是れ等は革の方おとなしく、や
 にも通らす」
きせい (七五) 煙管通 (名) 煙管の
 中にとほして、やにを取り除く具。鯨須
 又ははりがねにて作りたる線條。油嘉須
 「折れず曲がらず通らざりけり」
きせい (七六) 煙管張 (名) 煙管を作
 ること。又、其れを張とする人。人倫訓
 蒙園「幾世留張り。今二條通り宮小路
 に煙屋といふ者あり。其の先祖之を始む
 とかや」
きせい (七七) 煙管袋 (名) きせる
 を入る袋。雜貨物誌「おれがきせる袋
 に、毛たて袋がある。矢根を抜くべいと
 思つて入れてきた」賤學環「きせるぶくろ
 も、其の頃は皆衣類の裁ち餘りなどに
 て、手前縫ひにしたり」
きせい (七八) 煙管屋 (名) きせるを商
 ふ家。又、其れを製する人。用明天皇職
 人鑑「このねまきの帯解きて、とんと
 とそなたにきせる屋の、中よしず屋とな
 り給ふ」
きせい (七九) 煙管焼 (名) 煙管に煙
 草をつめ、火をつけて肌を焼く。入れほ
 くの如くすること。誓約のしるしとし
 て、元祿時代遊女の間に流行はれた
 り。若風俗動めとして指切のもあり、因

きたき (名) 江戸の人喜多川歌麿を祖とするもの。
きたきす (名) 植「こぼろ(牛蒡)の異名。和名は牛蒡。本草云、悪質。一名、牛蒡。根を乾燥して、酒に煎じて飲用す。根を乾燥して、酒に煎じて飲用す。根を乾燥して、酒に煎じて飲用す。
きたきた (名) 植「こぼろ(牛蒡)の異名。和名は牛蒡。本草云、悪質。一名、牛蒡。根を乾燥して、酒に煎じて飲用す。根を乾燥して、酒に煎じて飲用す。根を乾燥して、酒に煎じて飲用す。
きたきたり (名) 著切(名) 衣類は今著て居る一枚のみにて、他に著かへるなきこと。
きたきたりすめ 著切雀(名) (舌切雀にかけて秀句にいふ)著て居る物のみにて、他に衣類なきこと。
きたきた (名) 他人の家の敬稱。おたく(尊宅) 銭塘縣志「貴宅何所」。おたく(尊宅) 銭塘縣志「貴宅何所」。
きたきた (名) 歸宅(名) 我が家に歸ること。
きたきた (名) 庭訓往来六月「諸事期御歸宅之時候」。
きたきた (名) 寄託(名) あつけたのむこと。委託。舊刑法第三條「給料を得て人の寄託を受け保護すべき者」
きたきた (名) 寄託(名) あつけたのむこと。委託。舊刑法第三條「給料を得て人の寄託を受け保護すべき者」
きたきた (名) 寄託(名) あつけたのむこと。委託。舊刑法第三條「給料を得て人の寄託を受け保護すべき者」

きたきた (名) 寄託(名) あつけたのむこと。委託。舊刑法第三條「給料を得て人の寄託を受け保護すべき者」
きたきた (名) 寄託(名) あつけたのむこと。委託。舊刑法第三條「給料を得て人の寄託を受け保護すべき者」
きたきた (名) 寄託(名) あつけたのむこと。委託。舊刑法第三條「給料を得て人の寄託を受け保護すべき者」
きたきた (名) 寄託(名) あつけたのむこと。委託。舊刑法第三條「給料を得て人の寄託を受け保護すべき者」
きたきた (名) 寄託(名) あつけたのむこと。委託。舊刑法第三條「給料を得て人の寄託を受け保護すべき者」
きたきた (名) 寄託(名) あつけたのむこと。委託。舊刑法第三條「給料を得て人の寄託を受け保護すべき者」
きたきた (名) 寄託(名) あつけたのむこと。委託。舊刑法第三條「給料を得て人の寄託を受け保護すべき者」
きたきた (名) 寄託(名) あつけたのむこと。委託。舊刑法第三條「給料を得て人の寄託を受け保護すべき者」

きたきた (名) 寄託(名) あつけたのむこと。委託。舊刑法第三條「給料を得て人の寄託を受け保護すべき者」
きたきた (名) 寄託(名) あつけたのむこと。委託。舊刑法第三條「給料を得て人の寄託を受け保護すべき者」
きたきた (名) 寄託(名) あつけたのむこと。委託。舊刑法第三條「給料を得て人の寄託を受け保護すべき者」
きたきた (名) 寄託(名) あつけたのむこと。委託。舊刑法第三條「給料を得て人の寄託を受け保護すべき者」
きたきた (名) 寄託(名) あつけたのむこと。委託。舊刑法第三條「給料を得て人の寄託を受け保護すべき者」
きたきた (名) 寄託(名) あつけたのむこと。委託。舊刑法第三條「給料を得て人の寄託を受け保護すべき者」
きたきた (名) 寄託(名) あつけたのむこと。委託。舊刑法第三條「給料を得て人の寄託を受け保護すべき者」
きたきた (名) 寄託(名) あつけたのむこと。委託。舊刑法第三條「給料を得て人の寄託を受け保護すべき者」

きたきた (名) 寄託(名) あつけたのむこと。委託。舊刑法第三條「給料を得て人の寄託を受け保護すべき者」
きたきた (名) 寄託(名) あつけたのむこと。委託。舊刑法第三條「給料を得て人の寄託を受け保護すべき者」
きたきた (名) 寄託(名) あつけたのむこと。委託。舊刑法第三條「給料を得て人の寄託を受け保護すべき者」
きたきた (名) 寄託(名) あつけたのむこと。委託。舊刑法第三條「給料を得て人の寄託を受け保護すべき者」
きたきた (名) 寄託(名) あつけたのむこと。委託。舊刑法第三條「給料を得て人の寄託を受け保護すべき者」
きたきた (名) 寄託(名) あつけたのむこと。委託。舊刑法第三條「給料を得て人の寄託を受け保護すべき者」
きたきた (名) 寄託(名) あつけたのむこと。委託。舊刑法第三條「給料を得て人の寄託を受け保護すべき者」
きたきた (名) 寄託(名) あつけたのむこと。委託。舊刑法第三條「給料を得て人の寄託を受け保護すべき者」

きたつ (名) 植「はとこ」接骨木の異名。
きたたて 木桶(名) 桶に代へて、身を寄する樹木。本平家高き所にて遠見しつ、窪所には木桶を備へて、敵來たらば打ち落とさんと窺ひけり。太平記十五、豊後二年、小松の陰を木桶に取つて、指し詰め引き詰め、散敷にぞ射させたりける。
きたたて 氣立(名) ころろだて。きききき。心いき。意氣。甲陽軍鑑「其の方相舞と聞く小幡圖書頭は、如何様な氣だての者ぞと被仰」
きたたて 季立(名) 俳句の、季節の語を配ること。
きたたて 北隣(名) 北に隣れること。又、其の家。
きたたて 北殿(名) 北隣に住める人の敬稱。源朝「北どのこそ聞き給ふやなど、いひかはすも聞こゆ」
きたたて 段半(名) 段別一段の半。半段。運歩色葉「段半」
きたたて 穢(自動) きたなしと思ふ。宇治拾遺「きたながらて、その小路を養の小路と附けたりけるを」
きたたて 穢心(名) 不正の心。濁りたる心。神代紀「吾元無黒心」
きたたて 穢氣(副) きたなさう。見苦しきやう。竹取「悉くもきたたげなる所に、年月を経て物し給ふこと」源末「かたぢきたたげなく、若やかなるほど」

きたたて 穢心(名) 不正の心。濁りたる心。神代紀「吾元無黒心」
きたたて 穢氣(副) きたなさう。見苦しきやう。竹取「悉くもきたたげなる所に、年月を経て物し給ふこと」源末「かたぢきたたげなく、若やかなるほど」
きたたて 穢心(名) 不正の心。濁りたる心。神代紀「吾元無黒心」
きたたて 穢氣(副) きたなさう。見苦しきやう。竹取「悉くもきたたげなる所に、年月を経て物し給ふこと」源末「かたぢきたたげなく、若やかなるほど」
きたたて 穢心(名) 不正の心。濁りたる心。神代紀「吾元無黒心」
きたたて 穢氣(副) きたなさう。見苦しきやう。竹取「悉くもきたたげなる所に、年月を経て物し給ふこと」源末「かたぢきたたげなく、若やかなるほど」
きたたて 穢心(名) 不正の心。濁りたる心。神代紀「吾元無黒心」
きたたて 穢氣(副) きたなさう。見苦しきやう。竹取「悉くもきたたげなる所に、年月を経て物し給ふこと」源末「かたぢきたたげなく、若やかなるほど」

きたたて 穢心(名) 不正の心。濁りたる心。神代紀「吾元無黒心」
きたたて 穢氣(副) きたなさう。見苦しきやう。竹取「悉くもきたたげなる所に、年月を経て物し給ふこと」源末「かたぢきたたげなく、若やかなるほど」
きたたて 穢心(名) 不正の心。濁りたる心。神代紀「吾元無黒心」
きたたて 穢氣(副) きたなさう。見苦しきやう。竹取「悉くもきたたげなる所に、年月を経て物し給ふこと」源末「かたぢきたたげなく、若やかなるほど」
きたたて 穢心(名) 不正の心。濁りたる心。神代紀「吾元無黒心」
きたたて 穢氣(副) きたなさう。見苦しきやう。竹取「悉くもきたたげなる所に、年月を経て物し給ふこと」源末「かたぢきたたげなく、若やかなるほど」
きたたて 穢心(名) 不正の心。濁りたる心。神代紀「吾元無黒心」
きたたて 穢氣(副) きたなさう。見苦しきやう。竹取「悉くもきたたげなる所に、年月を経て物し給ふこと」源末「かたぢきたたげなく、若やかなるほど」

きたたて 穢心(名) 不正の心。濁りたる心。神代紀「吾元無黒心」
きたたて 穢氣(副) きたなさう。見苦しきやう。竹取「悉くもきたたげなる所に、年月を経て物し給ふこと」源末「かたぢきたたげなく、若やかなるほど」
きたたて 穢心(名) 不正の心。濁りたる心。神代紀「吾元無黒心」
きたたて 穢氣(副) きたなさう。見苦しきやう。竹取「悉くもきたたげなる所に、年月を経て物し給ふこと」源末「かたぢきたたげなく、若やかなるほど」
きたたて 穢心(名) 不正の心。濁りたる心。神代紀「吾元無黒心」
きたたて 穢氣(副) きたなさう。見苦しきやう。竹取「悉くもきたたげなる所に、年月を経て物し給ふこと」源末「かたぢきたたげなく、若やかなるほど」
きたたて 穢心(名) 不正の心。濁りたる心。神代紀「吾元無黒心」
きたたて 穢氣(副) きたなさう。見苦しきやう。竹取「悉くもきたたげなる所に、年月を経て物し給ふこと」源末「かたぢきたたげなく、若やかなるほど」

きたはし 段階 (名) 「段階」の義。きたはしにひさまづいて、萬徳の尊容をまもり。
きたひ 腊 (名) 乾したる肉。四時祭式。腊八斤。字鏡「腊」と和名。腊。唐前云、臘腊乾肉也。

きたまぐわ 蟻塔科 (名) 「植」ありのたぐわ(蟻塔科)の異名。
きたまふれ 著倒 (名) 身代の倒るるをも願はずして美服をまよふこと。又、其の人。「京の著たふれ」。

きたまへふね 北前船 (名) ほくこくぶね北前船に同じ。
きたまみまう (名) 「植」玄參科、きたみさう属の一年生草本。茎は地上に横臥す。

きたるやま 北山 (名) 「北」の山。萬三向南山(山)になびく雲の青雲の、星離れゆき月も離れく。
きたるやま 北山 (名) 「北」の山。萬三向南山(山)になびく雲の青雲の、星離れゆき月も離れく。

きたる 疑團 (名) うたがひのかたまり。心中に結ばれたる疑念。「疑團氷」と思ひて。
きたる 疑團 (名) うたがひのかたまり。心中に結ばれたる疑念。「疑團氷」と思ひて。

きたる 疑團 (名) うたがひのかたまり。心中に結ばれたる疑念。「疑團氷」と思ひて。
きたる 疑團 (名) うたがひのかたまり。心中に結ばれたる疑念。「疑團氷」と思ひて。

きたる 疑團 (名) うたがひのかたまり。心中に結ばれたる疑念。「疑團氷」と思ひて。
きたる 疑團 (名) うたがひのかたまり。心中に結ばれたる疑念。「疑團氷」と思ひて。

きたる 疑團 (名) うたがひのかたまり。心中に結ばれたる疑念。「疑團氷」と思ひて。
きたる 疑團 (名) うたがひのかたまり。心中に結ばれたる疑念。「疑團氷」と思ひて。

頭、紅紫色の花を開き、頭状花序に排列す。我が國、各地の山野に自生す。かほあざみ。かまな。きつねのまゆはけ。ひめあざみ。

きつねいろ 狐色 (名) 薄き緑色。こげ茶の如きうすき色。

きつねうとん 狐鬮 (名) 油揚げと葱などを交せて煮たる鬮。きつね。鬮鬮の異名。

きつねえびね (名) 【植】こけらん(古鬮鬮)の異名。

きつねおとし 狐落 (名) 狐つきをとおとしたほすこと。

きつねがうし 狐格子 (名) 【宮殿】社寺等の屋根の博風(鷹魚)の下に取付けたる、縦横正方に細かく組みたる格子。きつねまじと。つまがうし。きつねがうし。【動】すぢがつつを(條鬮鬮)の異名。

きつねがし 狐貝 (名) 【動】軟體動物、瓣鰓類の一種。介殻は楕圓形にして、殻の頂は上部に偏在す。表面の幅上に斑理あり。蝶番ひには小耳状突起左右にあり。本邦、各地の近海に産す。

きつねがや 狸落果 (名) 【植】木本科、狸落果属の多年生草本。莖の高さ二三尺。葉は細長にして尖り、莖・葉共に毛茸多し。花は小穂をなし、小穂はまた總狀に排列し、秋季、暗緑色を呈し、のち褐色となり、長き毛を具ふ。我が國、各地の山野に自生す。

きつねがり 狐狩 (名) 狐を狩ること。著聞、きつねがりをして、たねを断ちてんと思ひて。

きつねぐさ (名) 【植】ねぢば(絞草)の異名。

きつねけん 狐拳 (名) 拳の一種。

両手を額に擧ぐるを狐とし、膝の上に置くを庄屋とし、片手を前へ出だすを鐵砲とす。狐は庄屋に勝つて鐵砲に負け、庄屋は鐵砲に勝つて狐に負け、鐵砲は狐に勝つて庄屋に負けと定めて勝負をなす。藤八拳。庄屋拳。

きつねくちけ (名) 【植】くちら(苦參)の異名。

きつねくち 狐餅 (名) いなりずし(稻荷餅)に同じ。

きつねたすき (名) 【植】ひかげのかづら(石松)の異名。

きつねたひ 狐鯛 (名) 【動】魚類中、硬骨類の一種。べらに類し、吻長く尖り、黒條及び黒點を具ふ。本邦、各地の近海に産す。

きつねつか 狐塚 (名) 狐の棲む塚。狂言、此の中は狐塚の狐が出てばかすといふ程に、ばかされぬやうにして番をせえ。

きつねつかひ 狐使 (名) 狐を使ひて行ふといふ妖術。又、其れを行ふ人。康富記(慶長七年)因入高天、昨日被流諷談國(後醍醐朝臣國被流之國)是等皆狐仕之輩。

きつねつき 狐附 (名) 狐の憑りうつりたりと信する一種の神病。又、其れにかかりたる人。狐憑。狐憑などにかけて捕らふること。又、其れを捕らふ人。國姓爺後日合戰、關玉といふ狐釣の名人夫婦あること隠れなく「打狐。きつねど 狐戸 (名) きつねがうし(狐格子)に同じ。著聞、鬼同丸(鬼同丸)狐戸

り入りて、頼光の寝たる上の天井にあり」

きつねのかき (名) 【植】やぶれがき(鬼兒傘)の異名。

きつねのかみそり 鐵色箭 (名) 【植】石蒜科、石蒜属の多年生草本。地下に鱗を有し、之より葉を叢生す。葉は細長なれども幾分か廣く、淡綠色、夏季に至りて枯死す。花莖は葉間より抽出し、秋季頂上に、黄赤色にして、六裂せる花被を有する數花を鐵形に著生して開く。我が國、各地の山野に自生す。又、性往觀賞用として栽培せらる。有毒植物なり。

きつねのかみそり 狐剃刀 (名) 【植】まんじゆしやけ(石蒜)の異名。

きつねのからかさ 狐傘 (名) 【植】だいもんじやうの異名。

きつねのからし (名) 【植】いぬがらし(烏菘)の異名。

きつねのまげ (名) 【植】くちら(苦參)をいふ、陸前國仙臺の方言。

きつねのしやくし (名) 【植】からすびしやく(半夏)の異名。

きつねのたいまつ 鬼筆 (名) 【植】きつねのふかき(鬼筆)の異名。

きつねのたばこ (名) 【植】やぶたばこの異名。

きつねのちち (名) 【植】のうるしをいふ、山城國伏見の方言。

きつねのちやうちん 狐挑燈 (名) きつねび(狐火)に同じ。洛陽集、朱雀野や狐の挑燈鹿の妻。

きつねのちやうちん (名) 【植】こみかんさう(葉下珠)の異名。【動】んずる野鴨格の異名。【動】ちがきの異名。

きつねのちやうちん (名) 【植】やぶけまん(紫華)の異名。

きつねのちんぼ (名) 【植】きつねの

をかき(鬼筆)の異名。

きつねのつばな (名) 【植】ちからしば(狼尾草)の異名。

きつねのひびきだけ (名) 【植】ちゃんばき(博落迴)の異名。

きつねのびんせう (名) 【植】かはらけつめい(山豆)の異名。

きつねのふで 狐筆 (名) 【植】きつねのをかき(鬼筆)の異名。

きつねのぼたん 回回蒜 (名) 【植】毛茛科、毛茛属の多年生草本。莖の高さ二三尺。葉は三小葉より成る複葉にして、各小葉は二三淺裂す。春より夏に互り、黄色五瓣の花を枝端に開き、のち余米糖狀の聚合瘦果を結ぶ。我が國、各地の水邊に自生す。有毒植物なり。

きつねのま 爵牀科 (名) 【植】爵牀科、爵牀属の一年生草本。莖の高さ尺餘。葉は對生、長橢圓形又は廣披針形、全縁にして、莖・葉共に微毛を生ず。花序は葉腋に生じ、夏、淡紫色の小唇形花を開き、短太なる穗狀花序に排列す。我が國、各地の山野に自生す。いぬがらし。かづらさう。かな。

きつねのま 爵牀科 (名) 【植】顯花植物、雙子葉類の一種。草本、時に灌木又は小喬木。葉は對生、單葉、托葉を缺き、莖又は葉に不整齊なる完全花を開く。花冠は合瓣、殆ど整齊、五瓣を有し、或ひは唇形をなす。葯を有する雄蕊は四筒又は二筒にして、輪狀又は湯呑狀の花盤を有す。子房は二室、各室に二筒乃至十筒の胚珠を藏す。柱頭は一筒又は二筒。果實は卵二室、胞背裂開す。種子は胚乳無きものと有るものとあり。本科に屬する植物は、廣く温熱兩帶に分布し、殊に熱帶に多し。染料及び觀賞用に供す

へきものあり。

きつねのま 狐意 (名) 小兒の戯れに、左右の手をうしろ前にして指を組み合はせ、中に穴あくやうにして、其の穴より覗き見ること。かくすれば狐の正體見ゆといふ。

きつねのまゆはけ (名) 【植】きつねあざみ(泥胡菜)の異名。

きつねのもちあひ (名) 【植】きつねをがせ(松葉)の異名。

きつねのや (名) 【植】せんだんぐさ(鬼鐵草)の異名。

きつねのやう (名) 【植】前條に同じ。

きつねのらさく 狐蠟燭 (名) かまぼこ(蒲鉾)に同じ。

きつねのそかき 鬼筆 (名) 【植】櫛子菌類、すぼんだけ属の菌類。初め卵圓形、雀卵大、白色なれども、發育するに従ひ、外部破れて、三寸乃至五寸許りの菌柄を抽出し、頭部に鐘狀の傘部を戴き、此の部には微細なる鐵紋を有し、淡白色なり。菌柄も亦上半淡朱色、下半白色なり。我が國、各地陰濕の地に自生す。有毒菌なり。きつねのたいまつ。きつねのふで。

きつねのそで 狐繪筆 (名) 【植】前條の異名。

きつねのそ (名) 【植】きくもの異名。【動】ちもの異名。【動】のぎらんの異名。

きつねのそがせ (名) 【植】ひかげのかづら(石松)の異名。

きつねばち 狐蜂 (名) 【動】きまらばちの異名。

きつねばな (名) 【植】きつねのかみそり(鐵色箭)をいふ、出雲國の方言。

きつねばり (名) 【植】せんだんぐさ(鬼鐵草)の異名。

鐵草の異名。

きつねび 狐火 (名) 【動】狐の口より吐くといふより名づく。りんくわ(燐火)の異名。おにび。きつねのちやうちん。漢藥草「狐火」曾我會稽山遊記「はつと消えては狐火の我れと吾が身を迷はする」

きつねび 狐日和 (名) きまぐれ(きつね)氣紛天氣に同じ。

きつねぶく 狐福 (名) 意外なる幸福。偶然のさいはひ。徳俵。

きつねぶく (名) 【植】ほこりたけ馬物の異名。

きつねぶく 狐類 (名) 武器。鐵面の一種。類と頭のみを被ひ、頭の前方向へ突き出たるもの。

きつねぶく 狐窟 (名) きつねがう(狐格子)に同じ。

きつねぶく (名) 【植】ひめくずの異名。

きつねぶく (名) 【植】くさねむ(合萌)の異名。

きつねめし 狐飯 (名) 油氣を去りて味を附けたる油揚げを刻みてまぜたる飯。

きつねも (名) 【植】ちもの異名。

きつねや 狐矢 (名) 流れ矢。又、まぐれ中りの矢。新六帖「人心頼まれがたききつね矢は、ただ其のままにまた音ぞせぬ」盛衰記「射、扇をば射たれども、武者をばえ射すれば狐矢にこそあれといはんも本意なれば、只射よといふ者多し」

きつねやき 狐焼 (名) 狐色に焼くこと。又、その焼きたるもの。

きつねやん (名) 【植】いぬよもぎ(菴藷)の異名。

きつねれ 狐獵 (名) 狐を獵ること。

と。又、其の方法。きつねがり。

きつねわた 狐綿 (名) 唐綿を内に包み、眞綿を上にしたるもの。

きつねわた 狐鼠 (名) 狐を捕らふるために設けたるわな。

きつねわた (名) 【副】りつば(立派)の訛り。上方の方言。浮世風呂「萬せえのせえ藏のと、きつねわた男が云うてちやが中降りつばをきつば」

きつねわた 吉方 (名) えはら(吉方)に同じ。代始和抄「陰陽吉方を勸へ申す者也」出世景清「吉方に打ち向かひ、先づ家固めの祭文を唱へつ」

きつねわた 吉報 (名) よきしらせ。喜ぶべきおとづれ。

きつねわた (名) 【植】つばき(山茶)の異名。

きつねわた 切端 (名) かたはし。かたわれ。きればし。絶狩御本地「やい、見事馬に乗つたれば、定めて武士の切つばしならん」

きつねわた (名) 副。明確に決むるさまに。かきり。斷然。

きつねわた 喫飯 飯を喫ふこと。食事。

きつねわた 橘皮 (名) 柚の皮。ちんぴ。きがは。

きつねわた 切符 (名) 金錢支拂の證券。これと引換へに乗車・入場等をなし得るもの。甲陽軍鑑「侍扶助の事、二十以前七十以後は、大小共に我が番へおく金銀・米錢を以て切符にあつべし」運歩色葉「切符」

きつねわた 切符 事を決定す。音に同じ。

きつねわた 氣棲 (名) きげん(機嫌)に同じ。「きげんきつねを取る」

きつねわた 氣はす 合氣棲 氣に入るやうに調子をあはす。きげんをとる。

きつねわた 氣詰 (名) きつねること。太平記「氣詰ちと禮議をも振る舞ひ、極信をも立つる人をば、あら見られずの延喜式や、あら氣詰りの色代やと」東海道名所記「數奇屋のかこひの茶の湯は氣づまり也」

きつねわた 氣詰 (名) 氣づまりなること。氣づまりなる度合。吉野郡女楠「ふと室の津・田かけ、梅花の移り咲きそめて、抹香の匂ひ氣づまり」

きつねわた 氣詰 (自動) 懼りて氣がつまる。心窮なり。

きつねわた 木積 (名) 炭坑にて、採炭したる跡の天井岩を支持するため、木を井桁に積みたるもの。

きつねわた 吉夢 (名) めでたきゆめ。よきゆめ。詩經「吉夢乃占我夢、吉夢維何、維熊維羆、維虺維蛇」

きつねわた 氣詰 (自動) いきづまる。のびのびせず。窮屈なり。

きつねわた 勢ひをはる。りきむ。いばる。陸前國仙臺の方言。

きつねわた 木積 (名) 木材の寸法・數等を見積ること。

きつねわた 詰問 なじり問ふこと。責めとふこと。漢書「詰問嘉」

きつねわた 橘柚 (名) みかんとゆずと。又、其の果實。莊子「夫狙梨橘柚、果疏之屬、實熟則剝則辱」

きつねわた 氣強 (名) きつよし(氣強)の語幹。

きつねわた 氣強氣 (副) きつよきやう。きつよさう。

きつよき 氣強 (名) きつよきこと。きつよき度合。

きつよし 氣強 (形) 愛情にほだされず。つれなし。心づよし。氣丈夫なり。ただけし。曾根崎心中「氣強う勇む詞の中、涙に咽せて言ひさせり」

きつりつ 屹立 高く聳え立つこと。

きつりつね 水金鳳 (名) 〔植〕鳳仙花(すずり)科。鳳仙花属の一年生草本。莖の高さ二三尺に達し、柔滑なり。葉は橢圓形、粗鋸歯を有す。夏季、黄色にして距ある不整齊の花を、葉腋より生ずる花梗上に三四箇づつ著生して開く。我が國、各地の山地、溪間の濕地に自生す。よろうこん。

きつりつ 吉例 (名) めでたきためし。きつりつ。運歩色葉吉例

きつりつ 吉禮 (名) めでたき禮式。祭のきしき。きつりつ。周禮「大宗伯之職、以吉禮事邦國之鬼神示」

きつりつ 技手 (名) 〔技師と音近くして紛はしきにより、これと區別するためにいふ〕きつりつ(技手)に同じ。

きつりつ 旗亭 (名) 〔旗を立てて目標とせる家の義〕はたごや。又、料理店。旅館。酒樓。宋史「所過旗亭市樓、垂簾外蔽」集異記「開元中詩人王昌齡、高適、王之渙齊名中、共詣旗亭、賞酒」

きつりつ 貴弟 (名) 他人の弟の敬稱。令弟。

きつりつ 歸程 (名) かへりの道程。歸途。

きつりつ 規程 (名) 〔大條に同じ〕行政裁判法「行政訴訟手續に關し此法律に規程なきものは行政裁判所の適用の所に依り民事訴訟に關する規程を適用することを得」

きつりつ 規定 (名) 法令の條文として定むること。又は、其の條文。きつりつ。規則。民法「第三十本法其の他の法律の規程」同「第三十本商會社に關する規程」會計法「法律勅令を以て規定したるもの外」

きつりつ 起程 (名) たびだつこと。出發。發足。〔物事の起りはじめ。船の碇を引きあげて出帆すること〕

きつりつ 起碇 (名) 義理ある弟。異父母の弟。夫又は妻の弟。

きつりつ 議定 (名) 合議して事を決定すること。ぎちやう。議定。大日本帝國憲法「第三十帝國議會に於て豫算を議定せし又は豫算成立に至らざる時」漢書「議定奏成」

きつりつ 規定液 (名) 〔化〕液一りつとる中に、溶質の一瓦當量を含める液。

きつりつ 議定官 (名) 賞勳會議を組織する官吏の一。皇族又は勳一等以上の勳任官より、これを補するもの。賞勳會議規程「議定官」

きつりつ 既定經費 (名) 〔法〕既に定まり、議會の議決により改廢するを得ざる國家の經費。即ち、皇室費、繼續年度間の繼續費の類。

きつりつ 議定憲法 (名) 〔法〕君主と人民との協定により制定したる憲法。協約憲法。欽定憲法及び民定憲法の對)

きつりつ 既定歳入 (名) 〔法〕法律命令によりて既に其の費目又は金額の定まれる歳入。前年度の豫算によりて、既に其の費目又は金額の定まれる歳入。大日本帝國憲法「第六十憲法上の大權に基つて其の既定の歳入」

きつりつ 議定書 (名) 〔法〕議定したる事項を記載せる文書。ぎちやうし(議定書)。〔法〕國家を代表せる全權委員が、會合して議定したる國際事件を記載したる文書。其の効力は條約に異ならざるもの。

きつりつ 既定豫算 (名) 〔法〕其の成立に必要な手續を履きたる、國又は府、縣、郡等の豫算。郡制「第九十郡長は郡會の議決を経て既定豫算の追加若は更正を爲すことを得」府縣制「第九十府縣知事は府縣會の議決を経て既定豫算の追加若は更正を爲すことを得」

きつりつ 奇蹄類 (名) 〔動〕哺乳動物の有蹄類分類上の一亞目。前後肢中、第三の指趾最もよく發達す。前肢は四指を有するものあれども、後肢は必ず奇數の趾を有す。馬、犀、象の類。

きつりつ 規定論 (名) いしひ(きつりつ)人意志必然論に同じ。

きつりつ 歸朝 外國より歸ること。

きつりつ 軌條 (名) 〔理〕鋼線をつらして引かせる引伸ばして造りたる金屬製。通常、鐵道として敷設し、汽車、電車等をして、其上を平滑に走らしむ。れる。

きつりつ 偽朝 (名) 支那にて、正統ならざる朝廷。

きつりつ 汽笛 (名) 汽罐に裝置し、蒸氣力にて吹き鳴らす笛。「汽笛一聲」

きつりつ 棄擲 投げ棄つること。うちやりて使用せざること。拋擲。

きつりつ 儀的 (名) 標的。標的。非子彈。不以儀的爲關、則射者皆如擊也」

きつりつ 軌鐵 (名) きでう(軌條)に同じ。

きつりつ 軌轍 (名) 車の跡。わだち。

きつりつ 規轍 (名) 定まりたる型。一定の形式。

きつりつ 蟻垤 (名) 蟻の築きたる塚。ありづか。蟻の塔。韓非子「夫世愚學之人比有術之士也、猶蟻垤之比大陵也」

きつりつ 木鐵砲 (名) 木製の鐵砲。駿府記「十七日、木鐵砲多造、城中有之」

きつりつ 黃蝶 (名) 〔動〕昆蟲類中、鱗翅類の一種。小形黄色の普通の蝶。前翅の外端は黒色なり。本邦、各地に産す。東鑑「五月、自去比黃蝶飛行」

きつりつ 〔植〕からたちばな(百兩金)の異名。奇妙と重ね言ひて、其の意味を強めていふ語。「奇妙きてれつ妙

不思議「浮世床」貴さん今能いか。おい丁度よし。きてれつ、ありがた

きつりつ 木貂 (名) 〔動〕哺乳類中、食肉類、いたち科に屬する一種。體は貂より太く、毛は黄色なり。

きつりつ 機轉 氣轉 (名) 氣のききたること。めささの機轉なること。ささく。下學集「機轉」論「唯今の機轉、凡慮よりなすわざにあらず」五十年忌歌念佛「商ひの慣ひ、廻はり金の無き時は、氣轉を利かせ、表裏をつかひ」豫め考慮せず、其の時の思ひつきにて物事をなすこと。機轉加留多「其の日其の日のきてんの身すぎ」

きつりつ 氣轉 氣がきかす。はたらきなし。心中初米朝日「四夕四分で白提燈、氣轉の悪い提燈屋」

きつりつ 起點 (名) 物事の始まる處。起り。

きつりつ 畿甸 (名) きない畿内に同じ。

きつりつ 紀傳 (名) 人物の傳記を記録したる文書。きでんたい(紀傳體)の略。きでんたい(紀傳體)の略。又、其れを修むる學者。十訓「明經には中紀傳には藤佐世等、毛詩、尚書、後漢書などの文を引いて」太平記「三、公案、決斷所中、議定の人數には才學優長の卿相・雲客、紀傳明法、外記官人」名目抄「四道紀傳、傳明法、外記官人」他人の殿令の敬稱。盛衰記「紀傳、性照も道廣くなりなげ、六波羅の貴殿(も參すべし)」

きつりつ 歸田 官職を去りて、田園に歸りて農業に従事すること。

きつりつ 既電 既に電報を發したること。又、その電報。前電。

きつりつ 貴殿 (代) 多く、同輩又は同輩以上の人に用ふる對稱の代名詞。そ

することを「得」〔法〕人の行爲の準則となるべき規則。法令。明治三十一年勅令第三百五十二號「沖繩縣開切島規程」〔法〕官・公署などの内部に於ける、事務執行の準則となるべき規則。議院法「第六十兩議院交渉事務の規程は其の協議に依り之を定む」

きつりつ 規定 法令の條文として定むること。又は、其の條文。きつりつ。規則。民法「第三十本法其の他の法律の規程」同「第三十本商會社に關する規程」會計法「法律勅令を以て規定したるもの外」

きつりつ 起程 たびだつこと。出發。發足。〔物事の起りはじめ。船の碇を引きあげて出帆すること〕

きつりつ 起碇 義理ある弟。異父母の弟。夫又は妻の弟。

きつりつ 議定 合議して事を決定すること。ぎちやう。議定。大日本帝國憲法「第三十帝國議會に於て豫算を議定せし又は豫算成立に至らざる時」漢書「議定奏成」

きつりつ 規定液 〔化〕液一りつとる中に、溶質の一瓦當量を含める液。

きつりつ 議定官 賞勳會議を組織する官吏の一。皇族又は勳一等以上の勳任官より、これを補するもの。賞勳會議規程「議定官」

きつりつ 既定經費 〔法〕既に定まり、議會の議決により改廢するを得ざる國家の經費。即ち、皇室費、繼續年度間の繼續費の類。

きつりつ 議定憲法 〔法〕君主と人民との協定により制定したる憲法。協約憲法。欽定憲法及び民定憲法の對)

きつりつ 既定歳入 〔法〕法律命令によりて既に其の費目又は金額の定まれる歳入。前年度の豫算によりて、既に其の費目又は金額の定まれる歳入。大日本帝國憲法「第六十憲法上の大權に基つて其の既定の歳入」

きつりつ 議定書 〔法〕議定したる事項を記載せる文書。ぎちやうし(議定書)。〔法〕國家を代表せる全權委員が、會合して議定したる國際事件を記載したる文書。其の効力は條約に異ならざるもの。

きつりつ 既定豫算 〔法〕其の成立に必要な手續を履きたる、國又は府、縣、郡等の豫算。郡制「第九十郡長は郡會の議決を経て既定豫算の追加若は更正を爲すことを得」府縣制「第九十府縣知事は府縣會の議決を経て既定豫算の追加若は更正を爲すことを得」

きつりつ 奇蹄類 〔動〕哺乳動物の有蹄類分類上の一亞目。前後肢中、第三の指趾最もよく發達す。前肢は四指を有するものあれども、後肢は必ず奇數の趾を有す。馬、犀、象の類。

きつりつ 規定論 いしひ(きつりつ)人意志必然論に同じ。

きつりつ 歸朝 外國より歸ること。

きつりつ 軌條 〔理〕鋼線をつらして引かせる引伸ばして造りたる金屬製。通常、鐵道として敷設し、汽車、電車等をして、其上を平滑に走らしむ。れる。

きつりつ 偽朝 支那にて、正統ならざる朝廷。

きつりつ 汽笛 汽罐に裝置し、蒸氣力にて吹き鳴らす笛。「汽笛一聲」

きつりつ 棄擲 投げ棄つること。うちやりて使用せざること。拋擲。

きつりつ 儀的 標的。標的。非子彈。不以儀的爲關、則射者皆如擊也」

きつりつ 軌鐵 〔理〕鋼線をつらして引かせる引伸ばして造りたる金屬製。通常、鐵道として敷設し、汽車、電車等をして、其上を平滑に走らしむ。れる。

きつりつ 軌轍 車の跡。わだち。

きつりつ 規轍 定まりたる型。一定の形式。

きつりつ 蟻垤 蟻の築きたる塚。ありづか。蟻の塔。韓非子「夫世愚學之人比有術之士也、猶蟻垤之比大陵也」

きつりつ 木鐵砲 木製の鐵砲。駿府記「十七日、木鐵砲多造、城中有之」

きつりつ 黃蝶 〔動〕昆蟲類中、鱗翅類の一種。小形黄色の普通の蝶。前翅の外端は黒色なり。本邦、各地に産す。東鑑「五月、自去比黃蝶飛行」

きつりつ 〔植〕からたちばな(百兩金)の異名。奇妙と重ね言ひて、其の意味を強めていふ語。「奇妙きてれつ妙

なる。貴所。今昔貴殿と川人とこそ、此の罪をば負ひつらめ」東鑑「八月、貴殿重國就貴殿之儀」

きつりつ 儀典 (名) 儀式の規定。典例。典範。

きつりつ 疑點 (名) うたがはしき點。うたがふべき箇所。

きつりつ 偽電 〔電〕いつはりの電報。にせの電報。

きつりつ 起電機 (名) 〔理〕多量の電氣を起こしむる機械。摩擦によりて發電せしむる摩擦起電機と、感應によりて發電せしむる感應起電機との二種あり。

きつりつ 氣轉利 (名) 氣轉のきく人。大織冠「在天素より氣轉利き、ちつとも應せず」

きつりつ 植たらがらし(蕃椒)の異名。

きつりつ 紀傳儒 (名) 紀傳體を修むる儒者。

きつりつ 饋電線 (名) 發電所又は配電所より、電力使用區域に達する送電線。電車線路に沿ひて架設せる太き電線の類。

きつりつ 紀傳體 (名) 歴史の一體。本紀、列傳等の別を立てて記述したるもの。(編年體・紀事本末體などの對)

きつりつ 紀傳道 (名) 古への大學寮の四科の一。歴史を修むる學科。主として、史記、漢書、後漢書などを研究す。

きつりつ 紀傳博士 (名) 古へ大學にて、紀傳道の教授を掌る博士。類聚三代格「四、大納言、紀傳博士一員」

きつりつ 氣轉者 (名) 氣轉のききたる人。きてんきき。生玉心中「使は

る。丁稚も氣轉者」

きつりつ 起電力 (名) 〔理〕電流を生ぜしむる原因。導線の二點間の起電力は其の電位差を以て之を表はし、△おとす。を以て其の單位とす。

きつりつ 歸途 (名) かへりみち。かへる時。かへり。歸路。

きつりつ 企圖 くだてはかること。くだて。計畫。企畫。

きつりつ 冀圖 希望して計畫すること。

きつりつ ちよと。ふと。すぐに。竹取「このかや姫、きとかけになりぬ」講談典侍日記「つばねより急ぎたるけしきに、きとおはしませ、三位殿絶え入らせ給ひぬとて」宇治拾遺「あからさまに、きと立ち離れまらせける程に」

きつりつ 木戸 城戸 (名) 城の門。崇神紀「おほき者如」よりうかがひて、東鑑「八月、引籠于富所衣笠城、各張陣中、西木戸和田太郎義盛」増鏡「木戸、さかも木・石弓などいふ事ども、したためらる」

きつりつ 木戸御免 相撲などの興行場に、木戸錢なしに出入するを免すこと。

きつりつ 喜怒 よるこぶことといかること。莊子「喜實未、而喜怒爲用」中庸「喜怒哀樂之未發、謂之中」

きつりつ 義徒 (名) 正義を守るともがら。義のたむけに起つやから。

きつりつ 〔副〕ぐつとに同じ。東海道名所

記「榮阿彌ぎと詰まりけり」

きつりつ 一季冬 (名) 冬の末。又、冬の終りにある月。即ち、陰曆十二月。晩冬。禮記「季冬之月、日在婺女」

きつりつ 籠頭 (名) かりくび(籠首)に同じ。

きつりつ 氣筒 (名) 英(Cylinder) (名) 〔理〕蒸氣機關・瓦斯機關等に於いて、蒸氣又は瓦斯の仕事をなす部分にして、活塞の入り居る筒筒。

きつりつ 奇童 (名) 普通にすぐれたるかしく童。神童。

きつりつ 機動演習 (名) 秋季演習の一。兵卒の各年次に於け、教育の實績を試験するもの。最古兵はこれを終へたる後、直に滿期除隊となるものとす。旅團演習・師團演習及び特別大演習の三種に分かす。

きつりつ 既登記 (名) 〔法〕既に或種の登記の存在すること。未登記の對) 不動産登記法「第三既登記の不動産に付き未登記の所有權以外の權利を目的とする權利に關する登記」

きつりつ 機動裝置砲 (名) 機械的動力を藉りて使用し得る火砲。

きつりつ 儀同三司 (名) 〔三〕司は三公、儀は三公に同じといふ義。じゆんだい、じん(准大臣)の異稱。拾芥抄「儀同三司、儀同三司、儀同三司、儀同三司」

きつりつ 木燈籠 (名) 木製の燈籠。茶の湯の庭などに用ふ。(石燈籠などの對)

きつりつ 〔植〕じやがたらいも馬鈴薯の異名。

きつりつ 木戸格子 (名) 劇場にて、木戸の脇に立てたる一種の格子。

きつりつ 著時 (名) 其の衣服を著る

破産に「ね」として解熱薬に供す。
きんぎょ 氣入 (名) 氣に入ること。心に適ふこと。又、其の人。甲陽軍鑑に右衛門が氣に入りとて、なごの與七郎と云ふ者「傾城島原合戦、氣に入りの、下女のお福がよちり腰」

きんぎょ (名) きのふ昨日の詠り。
きんぎょ (名) きのふ昨日の詠り。
きんぎょ (名) きのふ昨日の詠り。

きんぎょ (名) きのふ昨日の詠り。
きんぎょ (名) きのふ昨日の詠り。
きんぎょ (名) きのふ昨日の詠り。

きんぎょ (名) きのふ昨日の詠り。
きんぎょ (名) きのふ昨日の詠り。
きんぎょ (名) きのふ昨日の詠り。



(きがぬき)



(きづかぬき)

に契りや深草の里「皮を被りたる陰堂。かほかぶり。著聞、僅かなる小まらの、しちかきぬかづきしたるを、かき出たしたりければ」包童。
きんぎょ (名) きのふ昨日の詠り。

きんぎょ (名) きのふ昨日の詠り。
きんぎょ (名) きのふ昨日の詠り。
きんぎょ (名) きのふ昨日の詠り。

きんぎょ (名) きのふ昨日の詠り。
きんぎょ (名) きのふ昨日の詠り。
きんぎょ (名) きのふ昨日の詠り。

きんぎょ (名) きのふ昨日の詠り。
きんぎょ (名) きのふ昨日の詠り。
きんぎょ (名) きのふ昨日の詠り。

きほんきん 基本金 (名) これより生ずる利息を、或る費用の支出に充て得べき財源たる資金。

きほんけん 基本教練 (名) 飛脚動作の基礎となる、軍隊などの各箇教練。即ち、小隊教練・中隊教練・大隊教練・聯隊教練及び旅團教練の總稱。

きほんさいきん 基本財産 (名) 或る費用を支出する財源として積みおく財産。市制施行市町村は其の不動態積立金等を以て基本財産となし之を維持するの義務あり。町村制導入臨時に収入したる金銀は基本財産に加入す可し。

きほんたんわ 基本単位 (名) 数量を測るとき、基本とする単位。

きほんねだん 基本値段 (名) 商品の賣價を定むべき標準價格。

きま 一期米 (名) 取引所の語。ていきまい(定期米)の略。「期米市場」

きまい 貴妹 (名) 他人のいもうとの敬稱。

きまい 義妹 (名) 義理ある妹。弟の妻、又は妻の妹の稱。いもうとぶん(妹分)に同じ。

きまいしちやう 一期米市場 (名) 米の定期賣買をなす市場。

きまい 欺罔 (名) 欺き罔ふること。他人をして、虚欺の事を信じ、錯誤に陥らしむること。きばう。刑法第三百四十八條附して財物を騙取したる者。漢書詔「挾左道懷詐僞以欺罔世主」

きまう 起毛 (名) 織物の表または裏に出来る毛羽を抜きとること。

きまうき 起毛機 (名) 起毛をなすに用ふる機械。

きまうきん 起毛筋 (名) まうなうきん毛筋筋に同じ。

きまうしゆき 欺罔取財 (名) 〔法〕人を欺罔して財物を騙取し、又は財産上不法の利益を得、若しくは他人にこれを得しむること。

きまうしゆき 欺罔取財 (名) 油地獄。大事の金銀を湯水のやうに川遊び、ちよがらかきされに來申さない。

きまかせ 氣任 (名) 心まかせにする。氣まかせ。

きまぐら 木枕 (名) 木製の枕。狂言「安からざりし身の狂亂は、木枕なりけり」夕霧阿波鳴渡。ひらり紙花七九寸、木枕に打ち敷きて、横になるとの阿波大盡。

きまぐれ 氣紛 (名) 意向定まらず變はり易きこと。又、其の性質。

きまぐれんき 氣紛天氣 (名) 陰晴不定な天氣。變はり易き空模様。

きまぐれもの 氣紛者 (名) 氣紛れる人。氣定まらぬ人。

きまじめ 生真面目 (名) 極めてまじめなること。又、其人。水賣夕照「御はぐる附けた女房を持ちやまじめ、しんぱらうの」

きます 來座 (自動) きたる(來)の敬語。萬「啼く子なす慕ひ根摩斯」て。同語いはほろそひの若松限りとや、君が伎麻左(ぬ)うらもとなくも。

きます 著夏 (他動) ませて著る。雅亮裝束抄「夏すずしのさしほきを、淺きにも薄色にても、きませてゆる常の事なり」

きまたたび 木天蓼 (名) 〔植〕また

たび木天蓼の異名。

きまたたてふ 黄斑蝶 (名) 〔動〕昆蟲類中、鱗翅類の一種。中形にして、翅は黄褐色を呈し、所に黄斑あり。殊に後翅外縁に列をなすもの中央には黒點ありて、蛇の目状をなす。本邦、至る處に産す。

きまちいし 來海石 (名) 〔礦〕凝灰岩の一種。出雲國より出づるもの。

きまう 一期末 (名) 期限のすゑ。期間の終り。

きまづけ 副 (名) きまづきやう。きまづきやう。

きまづき (名) きまづきこと。きまづき度合。

きまづし (形) 心よからず。氣ざはりなり。不愉快なり。傾城買二筋道、必ずあちら氣まづく思つてくれめえよ。

きまづわりもどし 期末割戻 (名) 〔商〕保険業者又は倉庫業者等が、決算期に保険料又は倉庫料の收納高より諸経費を差し引き、法定積立金其の他の準備金をなして、株主に配當したる剰餘金を保險契約者又は預荷多き得意先等に割り戻すこと。

きまはり (名) 〔動〕こじから(五十雀)の異名。

きまぶり 木守 (名) きまもり(木守)の訛り。狂言「取残りされし木まぶりの」國姓爺「成人して、若宮に忠臣の根つきとなれ、我れ等が家の木まぶらて」

きまへ 氣前 (名) ところだて。きまへ。氣前。「氣前のよき人」金鏡などに切れはなれよきこと。物惜しきせざること。「氣前を見せる」

きまへもの 氣前者 (名) きまへ(よ)き人。物惜しきせぬ人。

きまき 氣儘 (名) 意のままにすること。勝手。任意。浮世風呂「面倒なら、其の氣儘と粉の筒を愛へ貸しやれ。おれが氣儘に飲まう」同語氣儘に汲ませる。きまききん氣儘頭巾の略。獨語「江戶の婦女、外に出づるに、昔は氣儘とて、黒き絹にて頭面を覆ひ、眼ばかり顯しける」

きまきはうたい 氣儘放題 (名) 勝手に任せておくこと。我がまま勝手な手に任せておくこと。

きまきはうたい 氣儘八百 前條に同じ。浮世風呂「小さな時分から氣儘八百に育てた物だから、大きくなつても首蛇物に畏ぢずだ」

きまきづきん 氣儘頭巾 (名) 黒き絹などにて面部を覆ひ、目ばかり出だすやうにした

きまきづきん 氣儘頭巾 (名) 黒き頭巾。寛保頃より行はる。男女の製同じか

きまきづきん 氣儘頭巾 (名) 黒き頭巾。寛保頃より行はる。男女の製同じか

きまきづきん 氣儘頭巾 (名) 黒き頭巾。寛保頃より行はる。男女の製同じか

きまきづきん 氣儘頭巾 (名) 黒き頭巾。寛保頃より行はる。男女の製同じか

きまきづきん 氣儘頭巾 (名) 黒き頭巾。寛保頃より行はる。男女の製同じか

きまきづきん 氣儘頭巾 (名) 黒き頭巾。寛保頃より行はる。男女の製同じか

きまきづきん 氣儘頭巾 (名) 黒き頭巾。寛保頃より行はる。男女の製同じか

きまきづきん 氣儘頭巾 (名) 黒き頭巾。寛保頃より行はる。男女の製同じか

きまきづきん 氣儘頭巾 (名) 黒き頭巾。寛保頃より行はる。男女の製同じか

きまきづきん 氣儘頭巾 (名) 黒き頭巾。寛保頃より行はる。男女の製同じか

きまきづきん 氣儘頭巾 (名) 黒き頭巾。寛保頃より行はる。男女の製同じか

きまきづきん 氣儘頭巾 (名) 黒き頭巾。寛保頃より行はる。男女の製同じか

きまきづきん 氣儘頭巾 (名) 黒き頭巾。寛保頃より行はる。男女の製同じか



(ん きづきまき)

きまきづきん 氣儘頭巾 (名) 黒き頭巾。寛保頃より行はる。男女の製同じか

きまきづきん 氣儘頭巾 (名) 黒き頭巾。寛保頃より行はる。男女の製同じか

きまきづきん 氣儘頭巾 (名) 黒き頭巾。寛保頃より行はる。男女の製同じか

きまきづきん 氣儘頭巾 (名) 黒き頭巾。寛保頃より行はる。男女の製同じか

きまきづきん 氣儘頭巾 (名) 黒き頭巾。寛保頃より行はる。男女の製同じか

きまきづきん 氣儘頭巾 (名) 黒き頭巾。寛保頃より行はる。男女の製同じか

きまきづきん 氣儘頭巾 (名) 黒き頭巾。寛保頃より行はる。男女の製同じか

る人。わがままもの。

きまめ 氣實 (名) 心のまめなること。勢を意とせず、氣輕にはたらくこと。

きまめ 木豆 (名) 〔植〕豆科、木豆属の一年生草本。莢は高さ三四尺に達し、はぎに似て濃綠色、稜あり。葉は三小葉より成る複葉、各小葉は長楕圓形全縁にして稍厚く、表面は滑かに裏面は淡緑、微毛あり。晩秋の候、黄色の蝶形花を開く。果實は莢にして、種子は黄褐色。味、大豆に似たり。りうきうまめ。蒼豆。柳豆。米豆。

きまもり 木守 (名) 木の番人。こもり。今昔「木桶に我が居たりし所には、木守に雑色一人をなん置きたる」

きまもり 木守 (名) 木の番人。こもり。今昔「木桶に我が居たりし所には、木守に雑色一人をなん置きたる」

きまもり 木守 (名) 木の番人。こもり。今昔「木桶に我が居たりし所には、木守に雑色一人をなん置きたる」

きまもり 木守 (名) 木の番人。こもり。今昔「木桶に我が居たりし所には、木守に雑色一人をなん置きたる」

きまもり 木守 (名) 木の番人。こもり。今昔「木桶に我が居たりし所には、木守に雑色一人をなん置きたる」

きまもり 木守 (名) 木の番人。こもり。今昔「木桶に我が居たりし所には、木守に雑色一人をなん置きたる」

きまもり 木守 (名) 木の番人。こもり。今昔「木桶に我が居たりし所には、木守に雑色一人をなん置きたる」

きまもり 木守 (名) 木の番人。こもり。今昔「木桶に我が居たりし所には、木守に雑色一人をなん置きたる」

きまもり 木守 (名) 木の番人。こもり。今昔「木桶に我が居たりし所には、木守に雑色一人をなん置きたる」

きまもり 木守 (名) 木の番人。こもり。今昔「木桶に我が居たりし所には、木守に雑色一人をなん置きたる」

きまもり 木守 (名) 木の番人。こもり。今昔「木桶に我が居たりし所には、木守に雑色一人をなん置きたる」

きまもり 木守 (名) 木の番人。こもり。今昔「木桶に我が居たりし所には、木守に雑色一人をなん置きたる」

きまもり 木守 (名) 木の番人。こもり。今昔「木桶に我が居たりし所には、木守に雑色一人をなん置きたる」

きまもり 木守 (名) 木の番人。こもり。今昔「木桶に我が居たりし所には、木守に雑色一人をなん置きたる」

きまもり 木守 (名) 木の番人。こもり。今昔「木桶に我が居たりし所には、木守に雑色一人をなん置きたる」

きまもり 木守 (名) 木の番人。こもり。今昔「木桶に我が居たりし所には、木守に雑色一人をなん置きたる」

きまもり 木守 (名) 木の番人。こもり。今昔「木桶に我が居たりし所には、木守に雑色一人をなん置きたる」

きまもり 木守 (名) 木の番人。こもり。今昔「木桶に我が居たりし所には、木守に雑色一人をなん置きたる」

きまもり 木守 (名) 木の番人。こもり。今昔「木桶に我が居たりし所には、木守に雑色一人をなん置きたる」

きまもり 木守 (名) 木の番人。こもり。今昔「木桶に我が居たりし所には、木守に雑色一人をなん置きたる」

きまもり 木守 (名) 木の番人。こもり。今昔「木桶に我が居たりし所には、木守に雑色一人をなん置きたる」

きまもり 木守 (名) 木の番人。こもり。今昔「木桶に我が居たりし所には、木守に雑色一人をなん置きたる」

きまもり 木守 (名) 木の番人。こもり。今昔「木桶に我が居たりし所には、木守に雑色一人をなん置きたる」

きまもり 木守 (名) 木の番人。こもり。今昔「木桶に我が居たりし所には、木守に雑色一人をなん置きたる」

きまもり 木守 (名) 木の番人。こもり。今昔「木桶に我が居たりし所には、木守に雑色一人をなん置きたる」

きまもり 木守 (名) 木の番人。こもり。今昔「木桶に我が居たりし所には、木守に雑色一人をなん置きたる」

きまもり 木守 (名) 木の番人。こもり。今昔「木桶に我が居たりし所には、木守に雑色一人をなん置きたる」

きまもり 木守 (名) 木の番人。こもり。今昔「木桶に我が居たりし所には、木守に雑色一人をなん置きたる」

きまもり 木守 (名) 木の番人。こもり。今昔「木桶に我が居たりし所には、木守に雑色一人をなん置きたる」

きまもり 木守 (名) 木の番人。こもり。今昔「木桶に我が居たりし所には、木守に雑色一人をなん置きたる」

きまもり 木守 (名) 木の番人。こもり。今昔「木桶に我が居たりし所には、木守に雑色一人をなん置きたる」

きまもり 木守 (名) 木の番人。こもり。今昔「木桶に我が居たりし所には、木守に雑色一人をなん置きたる」

きまもり 木守 (名) 木の番人。こもり。今昔「木桶に我が居たりし所には、木守に雑色一人をなん置きたる」

きまもり 木守 (名) 木の番人。こもり。今昔「木桶に我が居たりし所には、木守に雑色一人をなん置きたる」

きまもり 木守 (名) 木の番人。こもり。今昔「木桶に我が居たりし所には、木守に雑色一人をなん置きたる」

きまもり 木守 (名) 木の番人。こもり。今昔「木桶に我が居たりし所には、木守に雑色一人をなん置きたる」

きまもり 木守 (名) 木の番人。こもり。今昔「木桶に我が居たりし所には、木守に雑色一人をなん置きたる」

きまもり 木守 (名) 木の番人。こもり。今昔「木桶に我が居たりし所には、木守に雑色一人をなん置きたる」

きまもり 木守 (名) 木の番人。こもり。今昔「木桶に我が居たりし所には、木守に雑色一人をなん置きたる」

きまもり 木守 (名) 木の番人。こもり。今昔「木桶に我が居たりし所には、木守に雑色一人をなん置きたる」

きまもり 木守 (名) 木の番人。こもり。今昔「木桶に我が居たりし所には、木守に雑色一人をなん置きたる」

きまもり 木守 (名) 木の番人。こもり。今昔「木桶に我が居たりし所には、木守に雑色一人をなん置きたる」

きまもり 木守 (名) 木の番人。こもり。今昔「木桶に我が居たりし所には、木守に雑色一人をなん置きたる」

きまもり 木守 (名) 木の番人。こもり。今昔「木桶に我が居たりし所には、木守に雑色一人をなん置きたる」

きまもり 木守 (名) 木の番人。こもり。今昔「木桶に我が居たりし所には、木守に雑色一人をなん置きたる」

きまもり 木守 (名) 木の番人。こもり。今昔「木桶に我が居たりし所には、木守に雑色一人をなん置きたる」

きまもり 木守 (名) 木の番人。こもり。今昔「木桶に我が居たりし所には、木守に雑色一人をなん置きたる」

きまもり 木守 (名) 木の番人。こもり。今昔「木桶に我が居たりし所には、木守に雑色一人をなん置きたる」

きまもり 木守 (名) 木の番人。こもり。今昔「木桶に我が居たりし所には、木守に雑色一人をなん置きたる」

きまもり 木守 (名) 木の番人。こもり。今昔「木桶に我が居たりし所には、木守に雑色一人をなん置きたる」

きまもり 木守 (名) 木の番人。こもり。今昔「木桶に我が居たりし所には、木守に雑色一人をなん置きたる」

きまもり 木守 (名) 木の番人。こもり。今昔「木桶に我が居たりし所には、木守に雑色一人をなん置きたる」

きまもり 木守 (名) 木の番人。こもり。今昔「木桶に我が居たりし所には、木守に雑色一人をなん置きたる」

きまもり 木守 (名) 木の番人。こもり。今昔「木桶に我が居たりし所には、木守に雑色一人をなん置きたる」

きまもり 木守 (名) 木の番人。こもり。今昔「木桶に我が居たりし所には、木守に雑色一人をなん置きたる」

きまもり 木守 (名) 木の番人。こもり。今昔「木桶に我が居たりし所には、木守に雑色一人をなん置きたる」

きまもり 木守 (名) 木の番人。こもり。今昔「木桶に我が居たりし所には、木守に雑色一人をなん置きたる」

きまもり 木守 (名) 木の番人。こもり。今昔「木桶に我が居たりし所には、木守に雑色一人をなん置きたる」

きまもり 木守 (名) 木の番人。こもり。今昔「木桶に我が居たりし所には、木守に雑色一人をなん置きたる」

きまもり 木守 (名) 木の番人。こもり。今昔「木桶に我が居たりし所には、木守に雑色一人をなん置きたる」

きまもり 木守 (名) 木の番人。こもり。今昔「木桶に我が居たりし所には、木守に雑色一人をなん置きたる」

きまもり 木守 (名) 木の番人。こもり。今昔「木桶に我が居たりし所には、木守に雑色一人をなん置きたる」

きまもり 木守 (名) 木の番人。こもり。今昔「木桶に我が居たりし所には、木守に雑色一人をなん置きたる」

きまもり 木守 (名) 木の番人。こもり。今昔「木桶に我が居たりし所には、木守に雑色一人をなん置きたる」

きまもり 木守 (名) 木の番人。こもり。今昔「木桶に我が居たりし所には、木守に雑色一人をなん置きたる」

きまもり 木守 (名) 木の番人。こもり。今昔「木桶に我が居たりし所には、木守に雑色一人をなん置きたる」

きまもり 木守 (名) 木の番人。こもり。今昔「木桶に我が居たりし所には、木守に雑色一人をなん置きたる」

きまもり 木守 (名) 木の番人。こもり。今昔「木桶に我が居たりし所には、木守に雑色一人をなん置きたる」

きまもり 木守 (名) 木の番人。こもり。今昔「木桶に我が居たりし所には、木守に雑色一人をなん置きたる」

きまもり 木守 (名) 木の番人。こもり。今昔「木桶に我が居たりし所には、木守に雑色一人をなん置きたる」

きまもり 木守 (名) 木の番人。こもり。今昔「木桶に我が居たりし所には、木守に雑色一人をなん置きたる」

きまもり 木守 (名) 木の番人。こもり。今昔「木桶に我が居たりし所には、木守に雑色一人をなん置きたる」

きまもり 木守 (名) 木の番人。こもり。今昔「木桶に我が居たりし所には、木守に雑色一人をなん置きたる」

きまもり 木守 (名) 木の番人。こもり。今昔「木桶に我が居たりし所には、木守に雑色一人をなん置きたる」

きまもり 木守 (名) 木の番人。こもり。今昔「木桶に我が居たりし所には、木守に雑色一人をなん置きたる」

きまもり 木守 (名) 木の番人。こもり。今昔「木桶に我が居たりし所には、木守に雑色一人をなん置きたる」

きまもり 木守 (名) 木の番人。こもり。今昔「木桶に我が居たりし所には、木守に雑色一人をなん置きたる」

きまもり 木守 (名) 木の番人。こもり。今昔「木桶に我が居たりし所には、木守に雑色一人をなん置きたる」

きまもり 木守 (名) 木の番人。こもり。今昔「木桶に我が居たりし所には、木守に雑色一人をなん置きたる」

きまもり 木守 (名) 木の番人。こもり。今昔「木桶に我が居たりし所には、木守に雑色一人をなん置きたる」

きまもり 木守 (名) 木の番人。こもり。今昔「木桶に我が居たりし所には、木守に雑色一人をなん置きたる」

きまもり 木守 (名) 木の番人。こもり。今昔「木桶に我が居たりし所には、木守に雑色一人をなん置きたる」

きまもり 木守 (名) 木の番人。こもり。今昔「木桶に我が居たりし所には、木守に雑色一人をなん置きたる」

きまもり 木守 (名) 木の番人。こもり。今昔「木桶に我が居たりし所には、木守に雑色一人をなん置きたる」

きまもり 木守 (名) 木の番人。こもり。今昔「木桶に我が居たりし所には、木守に雑色一人をなん置きたる」

きまもり 木守 (名) 木の番人。こもり。今昔「木桶に我が居たりし所には、木守に雑色一人をなん置きたる」

きまもり 木守 (名) 木の番人。こもり。今昔「木桶に我が居たりし所には、木守に雑色一人をなん置きたる」

きまもり 木守 (名) 木の番人。こもり。今昔「木桶に我が居たりし所には、木守に雑色一人をなん置きたる」

きまもり 木守 (名) 木の番人。こもり。今昔「木桶に我が居たりし所には、木守に雑色一人をなん置きたる」

きまもり 木守 (名) 木の番人。こもり。今昔「木桶に我が居たりし所には、木守に雑色一人をなん置きたる」

きまもり 木守 (名) 木の番人。こもり。今昔「木桶に我が居たりし所には、木守に雑色一人をなん置きたる」

きまもり 木守 (名) 木の番人。こもり。今昔「木桶に我が居たりし所には、木守に雑色一人をなん置きたる」

きまもり 木守 (名) 木の番人。こもり。今昔「木桶に我が居たりし所には、木守に雑色一人をなん置きたる」

きまもり 木守 (名) 木の番人。こもり。今昔「木桶に我が居たりし所には、木守に雑色一人をなん置きたる」

きまもり 木守 (名) 木の番人。こもり。今昔「木桶に我が居たりし所には、木守に雑色一人をなん置きたる」

きまもり 木守 (名) 木の番人。こもり。今昔「木桶に我が居たりし所には、木守に雑色一人をなん置きたる」

きまもり 木守 (名) 木の番人。こもり。今昔「木桶に我が居たりし所には、木守に雑色一人をなん置きたる」

きまもり 木守 (名) 木の番人。こもり。今昔「木桶に我が居たりし所には、木守に雑色一人をなん置きたる」

きまもり 木守 (名) 木の番人。こもり。今昔「木桶に我が居たりし所には、木守に雑色一人をなん置きたる」

きまもり 木守 (名) 木の番人。こもり。今昔「木桶に我が居たりし所には、木守に雑色一人をなん置きたる」

きまもり 木守 (名) 木の番人。こもり。今昔「木桶に我が居たりし所には、木守に雑色一人をなん

さみ 君 (代) 對稱の代名詞。記す赤玉はをきへ光れど、白玉の鼓美(さ)がよそひし、たふとくありけり「推古紀」そのたびとあはれ、親なしになれりけり、さすたけの積(さ)はやなき「萬葉」春なればうべも咲きたる梅の花、鼓美(さ)を思ふと、よいもねなくに「備前」

さみあひ 氣味合 (名) ①ころもち。②あひ。③おもむき。次第がら。傾城買二筋道「摩ばかり響めずと、氣味あひも響めてくりや」④おもむきあること。おつ。關取千兩機三時も時、折りも折り、わがみとおれが立合ひとは、はて氣味あひな事ぢやの」

さみうを (名) ①動はうぼら(動)をいふ。佐渡國の方言。

さみがさる 君著 (枕) 笠はかぶり著るものなれば、かきにつづけていふ。萬三君之服(さ)かきまの山に居る雲の、たちてはつづける戀もするかも」

さみかげさう 君影草 (名) ①植は百合科、君影草屬の多年生草本。地下莖を有し、之より葉を生ず。葉は長橢圓形、全縁、平長四五寸。六月頃、葉開より斜めに花莖を抽出し、上部に總狀花序を綴り、白色鐘狀の向下せる小花を著生す。我が國、北部の山地に自生し、又觀賞用とする庭園に栽培せらる。歐洲に栽培せらるるものは強き芳香を有す。すずらんやちよさう。

さみがさす 君差 (枕) かきはさすものなれば、かきにつづけていふ。古今



(うさげかみき)

さみがね (名) 將來に君となるべき人。君主の候補者。宇津保關、東宮の若宮中、いかやうに生ひ出で給はんとすらん、行く先のさみがねにやはあらぬ」

さみがよ 君代 (名) ①我が君の御代。萬葉花ちらふ此のむかつを、をなのを、ひしにつくまで伎美我與(さ)もがも」②我が國の國歌の名。古今集の賀の、我が君は千代に八千代にさされ石の、いははとなりて昔のむすまでとあるを和漢朗詠集に、初句を君が代はとし、我が君の御代の長久を祝きたる歌とせしを取り、初句の四字によりて名づく。③植

さみがよの 君代 (枕) 君が代は永かれと壽く意より、ながにつづけていふ。拾遺歌「君がよのながの山のかひあり」とのときき雲のるる時ぞ見る」夫木也「君が代のながの浦にむれるたるともに千とせを契るたづかな」

さみがよは 君代 (枕) 君が代はめでたく永かれと壽く意より、ながにつづけていふ。續古今集「君がよはつものりの浦に天降る、神も千歳を待つとこそ聞け」夫木也「君が代はたかの山のいはのむら、あけんあしたののりにあふまで」同「君が代はながの浦の濱千鳥昔のあとに今日あひ見ん」

さみさみ 君君 (名) ①この君彼の君。君たち。枕「宮仕へする人人の出で集まりて、君の御事めでたきえ」拾遺歌「岩の上の松に譬へん君君は、世にまれなるたねぞと思へば」

さみけいせい 君傾城 (名) 君と傾

城との重言。けいせい(傾城)に同じ。丹波與作「かうした勤め様あれども、君傾城と云ふ者は、此の類での玉様」

さみさね (名) ①は正身の義。ほんさい(本妻)をいふ。萬葉和物語「春の野に縁にはへるさねかづら、我が君さねと頼むいかにぞ」

さみさねがた 君澤形 (名) 江戸時代の末に、伊豆國津島戸田村にて、本邦人の手にて造りたる最初の西洋形の船。

さみさま 君様 (名) 女より我が意中人の人をいふ稱。戀人。犬子集、身を投げたも思ひ出にせん、君さまの小便水の淵もがな「鷹筑波」こひのおこりも皆法の道の君様の熱氣さむれば如來肌」

さみじか 氣短 (名) 次條の語幹。

さみじかし 氣短 (形) 短氣なり。性急なり。氣短(し)の對。

さみしけれ 黃身時雨 (名) 菓子の一。餡に雞卵をまぜ、甘味をつけて煉り、みぢん粉を加へ、手にて種種の形に作りたるもの。

さみしらす 君不知 (名) 鷹の翼の名所。たか(鷹)を見よ。關津松崎野記「鷹の毛名所の事、中羽裏の毛をば、さみしらすといふなり」

さみしりなす 木老加子 (名) 枝より早くむしり取りたる小さき茄子。菅原傳授手習鑑「子供の頭はなき、顔は丸顔さみしりなす子」

さみし 黃身酢 (名) 鯉節の煮出しに葛粉を雜せ、其れに雞卵の黃身のみを入れ、煮たる味醂にて味を加へ、流して酢を加へたるもの。貝の内また野菜にかけ

て食ふ。

さみし 黃身鮓 (名) 雞卵の黃身を煮りて、魚肉などを加へ、鮓の如くしたるもの。

さみつ 生蜜 (名) 蜂の巣よりとりて、未だ精製せざる蜜。

さみつ 機密 機密に關する秘密。刑法第三十五條「軍事上の機密を敵國に漏泄したる者」各省官制通則「機密に關する事項」漢書「留深留、聖恩、審因、機密」後漢書「以侍中、內幹機密、出宣、詰命」

さみつ 黃水 (名) たんじふ(膽汁)に同じ。

さみつ をつく 吐黃水 きみつを吐く。恐怖したるさまなどにいふ。宇治拾遺歌「從者ども大かたたく申すに及ばずとて、黃水をつきあひたり」

さみつ 生水 (名) 沸かしなごせざる水。天然のままの水。なまみづ。

さみつじかう 機密事項 (名) 機密に關する事項。

さみつじむ 機密事務 (名) 機密に關する事務。各省官制通則「機密事務は奏任とす大臣の命を承け機密事務を掌り」

さみつひ 機密費 (名) 機密事項に使用すべき費用。會計検査院法「政府の機密費に關する計算は會計検査院に於て検査を行ふ限に在らず」

さみつばんしよ 機密文書 (名) 機密事項を記録せる文書。内閣所屬職員官制「書記官長は内閣總理大臣の命を受け機密文書を管掌し」

さみつあうせい 機密漏泄罪 (名) ①法「外患に關する罪の一。軍事上の機密を敵國に漏泄したるによりて成立するもの。

さみな 公名 (名) 天台宗などにて、新たに僧となりたるものを、大藏卿・治部卿・右中將・大納言などと呼ぶこと。聖德太子「山切物、奇物實めはたり、出舉人に借し散らして、徳附き、公名附きなんとして、以ての外に過分に成り」海人藻芥「禪侶者、古多分附國名、近代一向公名計也」

さみのもち (名) ①植もちきびなるべし。和名「稷米。一名、稗米」

さみはしる 黃味走 (自動) 黃色を帯ぶ。さばむ。さばしる。黄色

さみやう 歸命 (名) 梵語「Nāma」の譯「佛の教命に歸依し、又己れの身命を捧げて佛に歸すること。南無。榮華「弟子歸命稽首敬白」諸賢南無といつば、即ち是れ歸命」翻譯名義集「南無此翻歸命」

さみやう ちやうきやう 歸命長久 次條の誤り。

さみやう ちやうらい 歸命頂禮 佛を禮拜する時、唱ふる語。佛を信順して、自己の頂頭にて佛の足を禮すること。手調き渴仰の思ひ骨にとほるあひだ、手を額に當てて歸命頂禮するほどに「盛衰記」佛眼を塞ぎ心を靜めて、歸命頂禮「八幡大菩薩」

さみやう ちやうくわく 歸命無量光覺 (名) 佛語。なむあみだぶつ(南無阿彌陀佛)の譯語。

さみやう ちやうじゆかん 歸命無量壽覺 (名) 佛語。前條に同じ。

さみやん 氣脈 (名) ①血液の通ふすぢ。靈驗論「氣脈調和而邪氣無所留」②連絡。脈絡。「五ひに氣脈を通ず」

さみやん 擬脈翅類 (名) ①動昆蟲類の一日。翅は膜質にして、前

後翅共殆ど同形、脈は甚だ細密なり。幼蟲は多く水中に住し、不完全變態をなす。白蟻(さ)かかげる等の類。

さみや 氣味好氣 (副) きみやきやう。さみやさう。

さみや 氣味好 (名) きみやきこさみや。さみやさう。

さみや 氣味好 (形) 氣もちよし。愉快なり。きびよし。雙生岡田川「うい、奴けな奴、氣味よい奴、伊達な奴は花指り衣」

さみや 氣味悪氣 (副) きみやわるきやう。さみやさう。

さみや 氣味悪 (形) 氣もちわるし。不愉快なり。きびわるし。生玉心中「氣味悪さうに、店の手水鉢で顔を洗うてけつつかた」怖ろし。畏るべし。蟬丸「丑の時參り中、今が見始め、何とやら氣味わるく」

さみや 紀三井寺 (名) 愚者をいふ隱語。紀三井寺は願禮の札所の二番なるより、智者を一番として、愚者を二番といふ。二番。浮世物語「心だての二番なる紀三井寺の輩を」置土産「つねづね阿呆をば紀三井寺ぢや二番ぢや、といふ」

さみや 飢民 (名) うゑたる民。饑饉にせまれる民。

さみや 義民 (名) 義の爲めに一身を捧げたる民。正義のためにつくす民。書經「乃以惟爾多方之義民、不克永于多享」

さみや 機務 (名) 概要なる事務。機密の政務。内閣官制「内閣總理大臣は各大臣の首班として機務を奏宣し」戰時大本營條例「帷帳の機務に奉仕し」宋書「參議機務」

さみや 歸夢 (名) 故郷へ歸りたりと見る夢。

さみや 他動 健かに定む。きはむ。決定す。確定す。狂言「此の月邊がよい名でござる。是れにきめませう」

さみや 義務 (名) 國民として爲さざるべからず、又爲すべからざる行爲。自己の分際に応じて務めざるを得ざる行爲。②法「法律によりて強制せらるる行爲、又は不行爲の負擔、其の基く法律によりて、公法上の義務、私法上の義務、積極義務、消極義務、相對義務、絕對義務に分かつ。各條を見よ。權利の對」

さみや 義務額 (名) 法「義務として、納め又は支拂ふべく定められたる金額。明治廿九年十二月勅令第二號「市町村村學校組合及其の區は土地の情況に依り本項の義務額を超えたる金額を支出することを得」

さみや 來向 (自動) 來たりむかふ。むかひ來たる。萬「ひなめしのみこのみこと、馬なめてみ狩り立たしし時は來向(さ)同「春過ぎて夏來向(さ)は」

さみや 義務共通 (名) 民事訴訟法「數人、共同の義務あること。權利共通若くは義務共通の地位に立つこと」

さみや 黃無垢 (名) 表裏共に、黄色にして無地なる衣服。一代女「千筋染めの黃むく」

さみや 義務教育 (名) 學齡兒童保護者が、義務として、其の保護する兒童に受けしむる普通教育。強制教育。

さみや 義無辭辯 (名) 佛語。四辯の一。諸法の義理を明らかにするに

無碍なる辯。

さみや 氣穢 (形) 不潔らしく不快を感ず。心もちわるし。

さみや 義務者 (名) 義務を負ふ者。民法「第九百三十一條「扶養義務者」所得税法「第三十八條「納稅義務者」

さみや 生息子 (名) 未だ婚女子に接せざるむすこ。

さみや 生娘 (名) 未婚の少女。世なれざる少女。處女。狐山姥「生娘、遊女、妾者」

さみや 氣に入る (形) 氣に入ること難し。機嫌を取るにむづかし。傾城買二筋道「只きむづかしい、ぶらぶら病なれば」

さみや 來陸 (自動) 來たりてむつぷ。來たりてむつまじくす。宇治拾遺「つかさのかみとて、きむつびつれば、よしとは思はねど、追ふべきこともあらねば、さと見てあるに」

さみや 義務的 義務によりてすること。

さみや 義務的仲裁裁判 (名) 法「當事國が其の義務として、國際紛議を仲裁裁判に附すること。又、其の裁判」

さみや 義務年限 (名) 義務として、或る事務又は職業に従事すべき年限。

さみや 義無邊處天 (名) 佛語。三十三天の一。無色界にあり。

さみや 黃紫紺 (名) 三引(さ)に

さやうあへく 強悪 極めてあしきこと。がうあく。暴悪。

さやうあつ 強壓 つよくおしつこと。強力を以て壓迫すること。

さやうあつうふう 強壓通風(名) 風車其の他の機械に依り、蒸気機、火爐内へ空気を送入する法。

さやうあふき 京扇(名) みやこにて作りたるあふき。京折りの扇。大狂言、此の扇子は京扇でもなし、又さし置し、せぬものを、此れをそなたへおまするでもをりないぞ。

さやういりう 誑誘 たぶらかしていざなふこと。おびきだすこと。誘惑。

さやういりう 享有 権利・利益等の如き無形物を、我が身にうけたもつこと。民法第181条「私権の享有は出生に始まる」

さやういりう 享有的財産(名) 其の所有者の生計・愉快又は奢侈に供するために利用するもの(生産的財産の對)

さやういりうのうりやく 享有能力(名) 「法」權利を享有し得る能力。權利の主體となり得る資格。權利能力。權能。

さやういし 經石(名) 小石一つに、細文一字づつ寫したるもの。

さやういしつ 驚逸 馬などが驚きて狂奔すること。

さやういで 京出(名) みやこを出づること。又、その時(京入りの對) 盛衰記(下)馬中京出ではかりこそ首をも少し持ちあげ侍りしが、はや乗り損じて。

さやういふ 郷邑(名) むらざと。

さやういり 京入(名) みやこへ入ること。又、その時(京出の對) 盛衰記(上)義仲・行家京入り

さやういん 郷音(名) きやうおん(郷音)に同じ。

さやううら 強雨(名) つよくふる雨。がうら。大雨。

さやううた 京唄(名) かみがたうた。みやこうた。

さやううち 京打(名) 京にて製造したること。浮世風呂(中)うらう、京打ち(中)。

さやううちば 京團扇(名) 山城國深草より製出する團扇。浮世風呂(中)紺縮緬の一粒鹿の子の丸げけ帯、京うちば手に持ちて入り来たり

さやううちまわり 京内參(名) みやこへゆくこと。京都へ上りて見物すること。狂言(中)京うち参りて申れば、都の様子も承りたり存ずる。大原問答青葉笛定めて京内参りか、参宮ならんが。

さやううん 狂雲(名) 亂れわく雲。處定まらぬ雲。運歩色葉(中)狂雲。

さやうえう 強要 無理に人をしふること。

さやうえき 疆場(名) 國さかひ。國界。詩經(中)疆場翼翼、黍稷或或。左傳(中)疆場無備、邑能無亡乎。

さやうえき 巨益 補ひたすこと。

さやうえき 杏葉(名) 唐鞍の羅紋(中)杏葉(中)。

さやうえき 唐鞍(名) 羅紋(中)。

さやうえき 唐鞍(名) 羅紋(中)。

さやうえき 唐鞍(名) 羅紋(中)。

さやうえふ 杏葉藤(名) 紋所名。ふち藤を見よ。

さやうえふ 杏葉牡丹(名) 紋所名。ばたん牡丹を見よ。

さやうえふ 杏葉櫻(名) 紋所名。

さやうえふ 杏葉橘(名) 紋所名。たちばな橘を見よ。

さやうえふ 杏葉鐵線(名) 紋所名。

さやうえふ 杏葉花菱(名) 紋所名。

さやうえふ 杏葉藤(名) 紋所名。ふち藤を見よ。

さやうえふ 杏葉牡丹(名) 紋所名。ばたん牡丹を見よ。

さやうえふ 杏葉櫻(名) 紋所名。

さやうえふ 杏葉橘(名) 紋所名。たちばな橘を見よ。

さやうえふ 杏葉鐵線(名) 紋所名。

さやうえふ 杏葉花菱(名) 紋所名。

さやうえふ 杏葉紅葉(名) 紋所名。

さやうえふ 杏葉山吹(名) 紋所名。

さやうえふ 杏葉龍膽(名) 紋所名。

さやうえふ 杏葉割菊(名) 紋所名。

さやうえん 一竟宴(名) 宮中にて、書物を博士に講せしめ、或ひは和歌集の勅撰などの業畢はれる時、宴を設けて、其の書中に載する事を取り出で、諸臣をして詩まいた歌によましめて、祿を賜はりなどせらるること。又、一人として之に擬して行ふもあり。三代實錄(中)三十一、於侍從局南右大臣曹司、設日本紀覽宴。明月記(中)三十一、新古今覽宴、慶風情可豫參由(中)。

さやうえん 一饗宴 宴會。諸事を終りて、夜に入りて才子ひきて宴席をのぶ。是れを祭の竟宴といふ也。

さやうえん 一饗筵(名) 饗應のむしる。饗應の坐席。

さやうえん 一狂焰(名) はげしく燃えたつほ。

さやうえん 一饗宴 享宴 饗應の酒宴。左傳(中)世之治也、諸侯閒於天子之事、則相朝也、於是乎有享宴之禮。

さやうえん 一饗應 酒食を備へて、取持つこと。馳走。徒然草「大方開きにくく見ゆるしきこと中、貧しき所に酒宴好み、客人に饗應せんときらめきたる」

さやうえん 一饗應 響きの聲に應ずるが如く、來たり與ふること。管子「下之事上也、如響之應聲也」史記(中)一

さやうあへく 強悪 極めてあしきこと。がうあく。暴悪。

さやうあつ 強壓 つよくおしつこと。強力を以て壓迫すること。

さやうあつうふう 強壓通風(名) 風車其の他の機械に依り、蒸気機、火爐内へ空気を送入する法。

さやうあふき 京扇(名) みやこにて作りたるあふき。京折りの扇。大狂言、此の扇子は京扇でもなし、又さし置し、せぬものを、此れをそなたへおまするでもをりないぞ。

さやういりう 誑誘 たぶらかしていざなふこと。おびきだすこと。誘惑。

さやういりう 享有 権利・利益等の如き無形物を、我が身にうけたもつこと。民法第181条「私権の享有は出生に始まる」

さやういりう 享有的財産(名) 其の所有者の生計・愉快又は奢侈に供するために利用するもの(生産的財産の對)

さやういりうのうりやく 享有能力(名) 「法」權利を享有し得る能力。權利の主體となり得る資格。權利能力。權能。

さやういし 經石(名) 小石一つに、細文一字づつ寫したるもの。

さやういしつ 驚逸 馬などが驚きて狂奔すること。

さやういで 京出(名) みやこを出づること。又、その時(京入りの對) 盛衰記(下)馬中京出ではかりこそ首をも少し持ちあげ侍りしが、はや乗り損じて。

さやういふ 郷邑(名) むらざと。

さやういり 京入(名) みやこへ入ること。又、その時(京出の對) 盛衰記(上)義仲・行家京入り

さやういん 郷音(名) きやうおん(郷音)に同じ。

さやううら 強雨(名) つよくふる雨。がうら。大雨。

さやううた 京唄(名) かみがたうた。みやこうた。

さやううち 京打(名) 京にて製造したること。浮世風呂(中)うらう、京打ち(中)。

さやううちば 京團扇(名) 山城國深草より製出する團扇。浮世風呂(中)紺縮緬の一粒鹿の子の丸げけ帯、京うちば手に持ちて入り来たり

さやううちまわり 京内參(名) みやこへゆくこと。京都へ上りて見物すること。狂言(中)京うち参りて申れば、都の様子も承りたり存ずる。大原問答青葉笛定めて京内参りか、参宮ならんが。

さやううん 狂雲(名) 亂れわく雲。處定まらぬ雲。運歩色葉(中)狂雲。

さやうえう 強要 無理に人をしふること。

さやうえき 疆場(名) 國さかひ。國界。詩經(中)疆場翼翼、黍稷或或。左傳(中)疆場無備、邑能無亡乎。

さやうえき 巨益 補ひたすこと。

さやうえき 杏葉(名) 唐鞍の羅紋(中)杏葉(中)。

さやうえき 唐鞍(名) 羅紋(中)。

さやうえき 唐鞍(名) 羅紋(中)。

さやうえき 唐鞍(名) 羅紋(中)。

さやうえふ 杏葉藤(名) 紋所名。ふち藤を見よ。

さやうえふ 杏葉牡丹(名) 紋所名。ばたん牡丹を見よ。

さやうえふ 杏葉櫻(名) 紋所名。

さやうえふ 杏葉橘(名) 紋所名。たちばな橘を見よ。

さやうえふ 杏葉鐵線(名) 紋所名。

さやうえふ 杏葉花菱(名) 紋所名。

さやうえふ 杏葉藤(名) 紋所名。ふち藤を見よ。

さやうえふ 杏葉牡丹(名) 紋所名。ばたん牡丹を見よ。

さやうえふ 杏葉櫻(名) 紋所名。

さやうえふ 杏葉橘(名) 紋所名。たちばな橘を見よ。

さやうえふ 杏葉鐵線(名) 紋所名。

さやうえふ 杏葉花菱(名) 紋所名。

さやうえふ 杏葉紅葉(名) 紋所名。

さやうえふ 杏葉山吹(名) 紋所名。

さやうえふ 杏葉龍膽(名) 紋所名。

さやうえふ 杏葉割菊(名) 紋所名。

さやうえん 一竟宴(名) 宮中にて、書物を博士に講せしめ、或ひは和歌集の勅撰などの業畢はれる時、宴を設けて、其の書中に載する事を取り出で、諸臣をして詩まいた歌によましめて、祿を賜はりなどせらるること。又、一人として之に擬して行ふもあり。三代實錄(中)三十一、於侍從局南右大臣曹司、設日本紀覽宴。明月記(中)三十一、新古今覽宴、慶風情可豫參由(中)。

さやうえん 一饗宴 宴會。諸事を終りて、夜に入りて才子ひきて宴席をのぶ。是れを祭の竟宴といふ也。

さやうえん 一饗筵(名) 饗應のむしる。饗應の坐席。

さやうえん 一狂焰(名) はげしく燃えたつほ。

さやうえん 一饗宴 享宴 饗應の酒宴。左傳(中)世之治也、諸侯閒於天子之事、則相朝也、於是乎有享宴之禮。

さやうえん 一饗應 酒食を備へて、取持つこと。馳走。徒然草「大方開きにくく見ゆるしきこと中、貧しき所に酒宴好み、客人に饗應せんときらめきたる」

さやうえん 一饗應 響きの聲に應ずるが如く、來たり與ふること。管子「下之事上也、如響之應聲也」史記(中)一

きやうがた 京方 (名) きやうがた。みやがた。義経記(三)野野原。我がもとは上下の行所なりければ、もし京方の者ありやとて。

きやうかたばら 經帷子 (名) 佛葬にて、死人に著する衣。白麻などにて造り、任に六字の名號、即ち南無阿彌陀佛などを縫きたるもの。若風俗「經かたばら」を縫はせ、早桶を誂へ、冥途飛脚、此の紋附けて、我が中の經帷子と觀念し、冥途の道を此のやうに、手を引かろや、引かれろと。壽衣。帛衣。

きやうがたり 京語 (名) きやうがとは(京詞)に同じ。京談。

きやうかた 京鹿子 (名) 京都にて染めたる鹿子しぼり。

きやうがのこ (名) 〔植〕番薯科、なつゆきさう屬の多年生草本。莖の高さ一二尺。葉は掌狀に深裂して鋸齒を有し、長き葉柄を具ふ。夏秋の候、枝頂に紅色の小花を密生す。我が國、各地の庭園に栽培せらる。

きやうがはら 經瓦 (名) 經文を彫りつけて永く傳へんために、土中に埋めおく瓦。

きやうかぶ 鏡匣 (名) 化粧道具を納める箱。くしげ。

きやうか 匡合 だし合はすこと。匡濟利合すること。王褒文選(三)齊桓設「匡燎之禮、故有「匡合之功」。

きやうかぶ 競合 (名) せりあふこと。我れ後れじと争ひてきこあふこと。

きやうか 〔法〕同一の目的物の上に存すること。民法第三三三條「一般の先取特權が互に競合する地合」。

きやうがみ 經紙 (名) 經文を書く紙。和泉式部續集「御文どものあるをやりて、經紙に漉かす」と。

きやうがよ 京通 (名) 京へ通ふこと。醒睡笑、餘り京通ひの繁ければ「きやうがらす」京鳥 (名) 京の商人の稱。又、京に馴れたる人。右馬節用人「京鳥を云ふ」。

きやうかん 狂漢 (名) 狂氣したる男。ものぐるほしき男子。

きやうかん 經函 (名) きやうばこ(經箱)に同じ。洛陽伽藍記「經函至今猶存」。

きやうかん 強諫 ながち諫むること。切諫。左傳「宮之奇之爲人、也、備而不強諫」。

きやうかん 狂簡 志望高大にして、細事を顧みざることを。論語「吾嘗小子、狂簡、斐然成章」。

きやうかん 強顔 (名) 〔あつかま〕なきこと。厚顔。鐵面皮。田代「なげ心のなきこと。つれなきこと」。

きやうかん 響岩 (名) 〔地〕新火山岩の一種。微晶狀の石基中に玻璃長石、霞石、輝石等の斑晶を有し、極めて緻密なる岩石。新鮮なるものは暗緑灰色乃至褐色にして石英無し。一般に板狀に割れ易く、打てば一種の美音を發す。本邦には産出せず。

きやうかん 京簪 (名) 京がたのかんざし。浮世風呂「京形だの、京かんざしだのと、何でも珍らしい事を好みます」。

きやうかん 狂氣 精神のくるぶこと。利害得失を辨別する心力を喪ふこと。きちがひ。發狂。喪心。論語「狂氣」。

して候は如何に」井筒業平河内通「物がついたか、狂氣か」氣ばかり大なること。進取の氣のみ盛んなること。それのみ専一に心の進むこと。尊徳詩「雲夫吾兄有狂氣嗜好與俗殊酸鹹」司馬光詩「尊前狂氣出雲霄」。

きやうかん 狂喜 ものぐるほしきまじること。

きやうかん 慶喜 よるこぶこと。歡喜。浄土和讃「念慶喜する人は」。

きやうかん 驚喜 おどろき且つよろこぶこと。朱熹詩「驚喜非昔觀披尋得」。

きやうかん 驚悸 おどろきて胸さわぎすること。

きやうかん 驚起 おどろきておくこと。おどろきたつこと。運歩色葉「驚起」。

きやうかん 驚起 競ひたつこと。争ひおこること。

きやうかん 強記 強記 よく記憶すること。記憶力のつよきこと。史記「王子博聞強記、學無所主」。

きやうかん 強毅 義氣のたけくつよきこと。剛毅。

きやうかん 經木 (名) 杉、檜などの材を、紙の如く薄く方形に削りたるもの。物品を包み、又葉子折の敷物などに用ひ、經木眞田をも作る。昔時これに經文を寫したるによりて名あり。運歩色葉「經木」。

きやうかん 競技 互ひにわざを競争すること。技藝の勝負を争ふこと。

きやうかん 行儀 行儀 形儀 (名) 座臥、進退の儀法。たちふるまひ。作法。庭訓往來「行儀散動」史記「禮儀」。

「甲所以責湯行義過失亦有烈士風」順序。秩次。列次。「行義よく飾る」のつとるべき行ひ。甲陽軍鑑「大將のまね給へば中將その下の奉公人、公家衆の形儀に給ひ」。

きやうかん 行儀作法 行儀と作法との重言。たちふるまひの作法。甲陽軍鑑「善き御法度を以て、諸人大小、上下の形義作法をよく定めなされ候はば」井筒業平河内通「行儀作法は武家の風」。

きやうかん 行儀強 能く行儀を守る。行義正し。長町女腹切「半七も待筋、行儀強い若い者と、常常自慢し置きしに」堀河波鼓「殊にお屋敷行儀よく、此のやうな親里でも、一夜泊りも法度なり」。

きやうかん 經木編 (名) 經木にて物を編むこと。又、その編みたるもの。

きやうかん 行儀被 (名) 模様の名。經形の行儀正しく並びたる小紋の模様。

きやうかん 匡救 あしきことをただしつくこと。書經「匡救」既往背師保之訓不克于厥初、尚頼匡救之德、圖惟厥終。左傳「彌縫其闕而匡救其災」。

きやうかん 經木籠 (名) 檜の經木にて作りたる籠。藤、桐、漆、漆等にて作りたる籠。

きやうかん 經木笠 (名) 經木もて編みたるかぶりがさ。我衣「元文元年より、經木笠を移がたに造る」。

きやうかん 經木眞田 (名) 經木を眞田紐の如く編みたるもの。夏帽子など製造の料とす。

きやうかん 行儀被 (名) 鯨形の、

行儀正しくならびたる鯨小紋の模様。みだれざめの對等。

きやうかん 〔植〕禾本科、ぎやうかんばら屬の多年生草本。莖は地上に傾斜して蔓延す。葉は細長、尖りて、しは上に細く。初夏、尺許の花軸を抽出し、花軸は先端三五葉狀に分岐し、各枝に小穂を穂狀に著生す。小穂は一花より成りて、帶紫綠色を呈す。我が國、各地の路傍に自生す。

きやうかん 形儀直 (名) 形儀の悪しきを改め直すこと。

きやうかん 輕輕 (名) かるがるしきさまにいふ語。かるはすみ。輕半。源氏物語「いふ語、いとやうきやうなりや、此の事のさまよなどのたまふに」同前「いかでか、みすの前をばわたり侍らん、いとやうきやうならんとて、いだしき奉りて給へれば」。

きやうかん 輕行 ぎやうだう行 道に同じ。盛衰記「八、備へに輕をよみ坊中に輕行して」阿彌陀經「以食時、還到本國、飯食輕行」。

きやうかん 仰仰 (形) ぎやううさんらし。おほぎやうなり。大げさなり。長平家「御馬十二疋、御劍七腰、御衣十二領、ひろぶたに入れて參られたり。ぎやううさんらしくぞ見えける」傾城反魂香「ぎやううさんらしい白無垢著たは、對ち果たしての何のといふ、おどしでも見せてもなら」。

きやうかん 仰仰氣 (名) ぎやううさんらしきやう。ぎやううさんらしきやう。

きやうかん 仰仰 (名) 經文を書く紙。和泉式部續集「御文どものあるをやりて、經紙に漉かす」と。

きやうかん 京通 (名) 京へ通ふこと。醒睡笑、餘り京通ひの繁ければ「きやうがらす」京鳥 (名) 京の商人の稱。又、京に馴れたる人。右馬節用人「京鳥を云ふ」。

きやうかん 狂漢 (名) 狂氣したる男。ものぐるほしき男子。

きやうかん 經函 (名) きやうばこ(經箱)に同じ。洛陽伽藍記「經函至今猶存」。

きやうかん 強諫 ながち諫むること。切諫。左傳「宮之奇之爲人、也、備而不強諫」。

きやうかん 狂簡 志望高大にして、細事を顧みざることを。論語「吾嘗小子、狂簡、斐然成章」。

きやうかん 強顔 (名) 〔あつかま〕なきこと。厚顔。鐵面皮。田代「なげ心のなきこと。つれなきこと」。

きやうかん 響岩 (名) 〔地〕新火山岩の一種。微晶狀の石基中に玻璃長石、霞石、輝石等の斑晶を有し、極めて緻密なる岩石。新鮮なるものは暗緑灰色乃至褐色にして石英無し。一般に板狀に割れ易く、打てば一種の美音を發す。本邦には産出せず。

きやうかん 京簪 (名) 京がたのかんざし。浮世風呂「京形だの、京かんざしだのと、何でも珍らしい事を好みます」。

きやうかん 狂氣 精神のくるぶこと。利害得失を辨別する心力を喪ふこと。きちがひ。發狂。喪心。論語「狂氣」。

きやうかん 仰仰 (名) ぎやううさんらしきやう。ぎやううさんらしきやう。

きやうかん 強弓 (名) ぼうきゆう (強弓) に同じ。運歩色葉「強弓」。

きやうかん 強圍 (名) じやうゐ (強圍) に同じ。左傳「魯圍季孫之室」。

きやうかん 強禦 (名) つよき敵。劉義恭文「賜臣供御金梁橋鞍」。

きやうかん 郷曲 (名) むらさきと。郷邑。莊子「莊子所以立宗廟社稷、治邑屋州閭曲者、曷嘗不法聖人哉」。

きやうかん 驚禽 (名) 物に驚きたる鳥。王融文「危葉長風、驚禽落」。

きやうかん 狂句 (名) 構想・用語の滑稽なる俳句。

きやうかん 驚懼 おどろきおそるること。莊子「乘亦不知也、墜亦不知也、死生驚懼、不入乎其胸中」史記「禮儀」。

きやうかん 狂愚 (名) きちがひとばか。きちがひとばか、おろかなること。

きやうかん 境遇 (名) 其の身の際會せる運命又は事情。めぐりあはせ。まはりあはせ。

きやうかん 京下 (名) 昔京都より地方に赴くこと。京上(京の對) 東鑑「於當國京下輩」。

きやうかん 京下執筆 (名) 次條に同じ。

きやうかん 京下奉行 (名) 鎌倉幕府の職名。京都の官人の、鎌倉へ下りて提起せる訴訟を判決するものなるべし。見録。

きやうかん 敬屈 身をかがめて敬禮すること。盛衰記「敬屈は貴族天皇にておはしますにやとて、馬より下りて敬屈すれば」。

きやうかん 經供養 (名) 經文を書寫し、佛前に供へて佛事を修むること。枕「何がしにて、その人のせし八講、經くやうなど、いひくらべみたるほどに」陰曆、三月二日、攝津國四天王寺の太子夢殿に於いて修する法會。

きやうかん 敬供養 (名) 佛語。佛供養の一。財物を寄附し、堂舎を莊嚴にすること。

きやうかん 行供養 (名) 佛語。佛供養の一。修行・讀經すること。

きやうかん 行比 (名) 行力をくらべあふこと。諸軍「行せば行徳も劣るまじとよ。いざ軍僧、行くべせん」。

きやうかん 杏花 (名) あんずの花。

きやうかん 狂花 (名) くるひばな(狂花)に同じ。

きやうかん 狂畫 (名) ざれゑ戯繪に同じ。

きやうかん 仰臥 あふむきて臥すこと。

きやうかん 境外 (名) さかひのそと。境内の對) 史記「魯以臣之尊禮、而不敢自擅、誅於境外」。

きやうかん 京菓子 (名) 京都にて製造したる菓子。

きやうかん 鏡花水月 (句) 鏡にうつれる花水に宿れる月の如く、見るべくして取るべからざること。形迹の言説すべからずして、ただ悟入すべき物事に譬へていふ語。詩家直説「詩有可解不可解、若鏡花水月、勿泥其迹可也」。

きやうかん 鏡花水月法 (名) 鏡に花のうつり水に月の映じたるが如く、男婦と其の形跡をあらはすのみにて、露骨に説明せざる文體。おもに漢文にいふ。

きやうかん 京官 (名) 京中の諸官。但し家令以下をいはず。百寮調要「京中のもろもろの官をば、内官とも京官とも申すなり」。

きやうかん ちもく 京官除目。つかさめしのちもく(司召除目)に同じ。江次第「京官除目、於外記給之」。

きやうかん 郷關 (名) 故郷のさかひ。又、ふるさと。故郷。郷里。張説詩「相逢得意、何處是郷關」。

きやうかん 郷貫 (名) 郷里の戸

いふに似たるよりいふ。...

さやうらうら 狂浪 (名) きやうらら

さやうらうら 京落 (名) みやこ

さやうらうら 競落 (名) 競争入札にて落札すること

さやうらうら 競落期日 (名) 競落期日

さやうらうら 享樂 (名) 快樂をうくること

さやうらうら 競落額 (名) 競落代價のたか

さやうらうら 競落者 (名) 競落したる者

さやうらうら 狂惑 (名) 精神のくるひまどふこと

さやうらうら 京童 (名) 前條に同じ

さやうらうら 京童 (名) 前條に同じ

さやうらうら 狂惑 (名) 精神のくるひまどふこと

さやうらうら 京童 (名) 前條に同じ

さやうらうら 狂惑 (名) 精神のくるひまどふこと

さやうらうら 京童 (名) 前條に同じ

さやうらうら 狂惑 (名) 精神のくるひまどふこと

さやうらうら 京童 (名) 前條に同じ

さやうらうら 狂惑 (名) 精神のくるひまどふこと

さやうらうら 京童 (名) 前條に同じ

さやうらうら 狂惑 (名) 精神のくるひまどふこと

さやうらうら 狂惑 (名) 精神のくるひまどふこと

さやうらうら 京童 (名) 前條に同じ

さやうらうら 狂惑 (名) 精神のくるひまどふこと

さやうらうら 京童 (名) 前條に同じ

さやうらうら 狂惑 (名) 精神のくるひまどふこと

さやうらうら 京童 (名) 前條に同じ

さやうらうら 狂惑 (名) 精神のくるひまどふこと

さやうらうら 京童 (名) 前條に同じ

さやうらうら 狂惑 (名) 精神のくるひまどふこと

さやうらうら 京童 (名) 前條に同じ

さやうらうら 狂惑 (名) 精神のくるひまどふこと

さやうらうら 京童 (名) 前條に同じ

さやうらうら 狂惑 (名) 精神のくるひまどふこと

さやうらうら 京童 (名) 前條に同じ

さやうらうら 狂惑 (名) 精神のくるひまどふこと

さやうらうら 京童 (名) 前條に同じ

さやうらうら 狂惑 (名) 精神のくるひまどふこと

さやうらうら 京童 (名) 前條に同じ

さやうらうら 狂惑 (名) 精神のくるひまどふこと

さやうらうら 京童 (名) 前條に同じ

さやうらうら 狂惑 (名) 精神のくるひまどふこと

さやうらうら 京童 (名) 前條に同じ

さやうらうら 狂惑 (名) 精神のくるひまどふこと

さやうらうら 京童 (名) 前條に同じ

きやま (名) 黄病 (名) わらだん黄魚 (名) 同。 (名) (蘭 Diamondの訛り) 玉の如き金剛石に同じ。きやまんの異名。金剛石の、がらす・を能く切るより誤りいふ。

きやまんとせき (名) 前條に同じ。

きやまんと (名) (蘭 Diamondの訛り) 前條に同じ。

きやまんとほり (名) 陶器に細密の彫刻あるをいふ。ほり物の名にして、石にあらずと。

きやま (名) 氣病 (名) 氣の塞ぎて起りたる病。心勞の結果より起りたる病。夕霧阿波鳴渡身がことを氣病みにして、あぶなしと聞き及びしが、雪女五枚羽子板「ただ斯波殿を懸ひ慕ひ、思ひ積もつて氣病みとなり」

きやめれおん (名) (動) かめれおん (遊役)に同じ。

きやめじ (名) 花文字 (名) きやしや(花車)をいふ。女詞。東國紀行「宮内御まで御小袖、きやめじなる御したり、見る目も匂ひもあやしばかりなり」

きやめ (名) (動) 植ぢんかう (沈香)の異名。香料の一。沈香に屬する木の、土中に埋まれるを掘り出したるもの。其の金色の木理あるを糖結といひて上品とし、木理なくて黒きを糖結といふ。東海道名所記「伽羅・梅花・待從など、おぼろにくゆらし」江戶時代、遊廓にて、金銀の隠語。用捨箱「笑ひ顔伽羅もらはば若夷中句意は、花街の隠語に、金銀の事を伽羅といふ」回音、何ににらず、よきものを賞めていふ詞。「伽羅の下駄」心中萬年草「私が妹にお梅と申し

て、すんと伽羅めでござれども」孕常磐「一夜の情をかけ給へ、吾妻の伽羅」伽羅の一種。禪家にて用ふるもの。掛絡。玉の如き春。露言歳且帳「國厚う千代のつやあり伽羅の春」

きやらのみち (名) 伽羅道 正しき道。直なる道。鳥籠物語「實にありがたき物語、じんのみちと申すべき、伽羅の道とや譽め申さん」

きやらのをいふ (名) 伽羅男 立派なる男。

きやらのたかす (名) 伽羅もたかす (沈香もたかす) 伽羅もたかすに同じ。ちんかう沈香の條を見よ。

きやらのい (名) 伽羅色 (名) 濃き茶色。赤黒き色。

きやらのがき (名) 伽羅柿 (名) 柿の實の圓く少しく尖り、肉の中沈香の木目の如くにして、味も酸く美しい。

きやらのさ (名) (動) 美しきやらばくの異名。

きやらのさ (名) (動) 笑ふ聲。からから。宇治拾遺「仲風情都きやらさやと笑ひて」

きやらのさ (名) (動) 笑ふ聲。からから。宇治拾遺「仲風情都きやらさやと笑ひて」

きやらのさ (名) (動) 笑ふ聲。からから。宇治拾遺「仲風情都きやらさやと笑ひて」

きやらのさ (名) (動) 笑ふ聲。からから。宇治拾遺「仲風情都きやらさやと笑ひて」

きやらのさ (名) (動) 笑ふ聲。からから。宇治拾遺「仲風情都きやらさやと笑ひて」

きやらのさ (名) (動) 笑ふ聲。からから。宇治拾遺「仲風情都きやらさやと笑ひて」

きやらのさ (名) (動) 笑ふ聲。からから。宇治拾遺「仲風情都きやらさやと笑ひて」

きやらのさ (名) (動) 笑ふ聲。からから。宇治拾遺「仲風情都きやらさやと笑ひて」

きやらのさ (名) (動) 笑ふ聲。からから。宇治拾遺「仲風情都きやらさやと笑ひて」

きやらのさ (名) (動) 笑ふ聲。からから。宇治拾遺「仲風情都きやらさやと笑ひて」

きやらのさ (名) (動) 笑ふ聲。からから。宇治拾遺「仲風情都きやらさやと笑ひて」

きやらのさ (名) (動) 笑ふ聲。からから。宇治拾遺「仲風情都きやらさやと笑ひて」

きやらのさ (名) (動) 笑ふ聲。からから。宇治拾遺「仲風情都きやらさやと笑ひて」

きやらのさ (名) (動) 笑ふ聲。からから。宇治拾遺「仲風情都きやらさやと笑ひて」

きやらのさ (名) (動) 笑ふ聲。からから。宇治拾遺「仲風情都きやらさやと笑ひて」

きやらのさ (名) (動) 笑ふ聲。からから。宇治拾遺「仲風情都きやらさやと笑ひて」

きやらのさ (名) (動) 笑ふ聲。からから。宇治拾遺「仲風情都きやらさやと笑ひて」

きやらのさ (名) (動) 笑ふ聲。からから。宇治拾遺「仲風情都きやらさやと笑ひて」

きやらのさ (名) (動) 笑ふ聲。からから。宇治拾遺「仲風情都きやらさやと笑ひて」

きやらのさ (名) (動) 笑ふ聲。からから。宇治拾遺「仲風情都きやらさやと笑ひて」

きやらのさ (名) (動) 笑ふ聲。からから。宇治拾遺「仲風情都きやらさやと笑ひて」

きやん (名) (動) きんとんば(黃蜻蛉)の異名。

きやん (名) 貴論 (名) 他人のきとしの敬語。「貴論に従ふ」

きやん (名) 貴論 (名) 他人のきとしの敬語。「貴論に従ふ」

きやん (名) 貴論 (名) 他人のきとしの敬語。「貴論に従ふ」

きやん (名) 貴論 (名) 他人のきとしの敬語。「貴論に従ふ」

きやん (名) 貴論 (名) 他人のきとしの敬語。「貴論に従ふ」

きやん (名) 貴論 (名) 他人のきとしの敬語。「貴論に従ふ」

きやん (名) 貴論 (名) 他人のきとしの敬語。「貴論に従ふ」

きやん (名) 貴論 (名) 他人のきとしの敬語。「貴論に従ふ」

きやん (名) 貴論 (名) 他人のきとしの敬語。「貴論に従ふ」

きやん (名) 貴論 (名) 他人のきとしの敬語。「貴論に従ふ」

きやん (名) 貴論 (名) 他人のきとしの敬語。「貴論に従ふ」

きやん (名) 貴論 (名) 他人のきとしの敬語。「貴論に従ふ」

きやん (名) 貴論 (名) 他人のきとしの敬語。「貴論に従ふ」

きやん (名) 貴論 (名) 他人のきとしの敬語。「貴論に従ふ」

きやん (名) 貴論 (名) 他人のきとしの敬語。「貴論に従ふ」

きやん (名) 貴論 (名) 他人のきとしの敬語。「貴論に従ふ」

きやん (名) 貴論 (名) 他人のきとしの敬語。「貴論に従ふ」

きやん (名) 貴論 (名) 他人のきとしの敬語。「貴論に従ふ」

きやん (名) 貴論 (名) 他人のきとしの敬語。「貴論に従ふ」

きやん (名) 貴論 (名) 他人のきとしの敬語。「貴論に従ふ」

きやん (名) 貴論 (名) 他人のきとしの敬語。「貴論に従ふ」

きやん (名) 貴論 (名) 他人のきとしの敬語。「貴論に従ふ」

きやん (名) 貴論 (名) 他人のきとしの敬語。「貴論に従ふ」

きやん (名) 貴論 (名) 他人のきとしの敬語。「貴論に従ふ」

きやん (名) 貴論 (名) 他人のきとしの敬語。「貴論に従ふ」

きやん (名) 貴論 (名) 他人のきとしの敬語。「貴論に従ふ」

きやん (名) 貴論 (名) 他人のきとしの敬語。「貴論に従ふ」

きやん (名) 貴論 (名) 他人のきとしの敬語。「貴論に従ふ」

きやん (名) 貴論 (名) 他人のきとしの敬語。「貴論に従ふ」

きやん (名) 貴論 (名) 他人のきとしの敬語。「貴論に従ふ」

きやん (名) 貴論 (名) 他人のきとしの敬語。「貴論に従ふ」

きやん (名) 貴論 (名) 他人のきとしの敬語。「貴論に従ふ」

きゆう (窮寇) (名) 逃げ道を失ひてくるしめる敵。孫子「歸師勿追、窮寇勿追」漢書「此窮寇不可追也」

きゆう (窮) (名) 困窮。左傳「困窮山窮谷、固陰沍寒、於是乎取之」

きゆう (窮) (名) 困窮。史記「困窮、天子雖無、京中の貴賤はなほ窮困、愁へに拘れり」

きゆう (窮) (名) 困窮。史記「困窮、天子雖無、京中の貴賤はなほ窮困、愁へに拘れり」

きゆう (窮寇) (名) 逃げ道を失ひてくるしめる敵。孫子「歸師勿追、窮寇勿追」漢書「此窮寇不可追也」

きゆう (窮) (名) 困窮。左傳「困窮山窮谷、固陰沍寒、於是乎取之」

きゆう (窮) (名) 困窮。史記「困窮、天子雖無、京中の貴賤はなほ窮困、愁へに拘れり」

きゆう (窮) (名) 困窮。史記「困窮、天子雖無、京中の貴賤はなほ窮困、愁へに拘れり」

